

2019(令和元)年度

兵庫県

INIE 実践報告書

「教育に新聞を」実践 高等学校編

- ◇新聞を通して社会への関心を高め、社会の一員としての自覚を高める
(兵庫県立武庫荘総合高等学校)
- ◇新聞で「他人事」から「自分事」へ
(兵庫県立津名高等学校)
- ◇モラルジレンマの枠組みを用いた社会的論争課題の探究
～みんな違って、みんないい～ (神戸市立神港橋高等学校)
- ◇日々の教育活動への新聞の活用と地理歴史科地理B授業への新聞の活用
(兵庫県立柏原高等学校)
- ◇課題研究論文のテーマを探す
(兵庫県立加古川南高等学校)
- ◇新聞を活用した主体的な学び
(兵庫県立三田西陵高等学校)
- ◇「私たちの街・神戸について」記事を書いてみよう
(兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校)

「教育に新聞を」実践 中学校編

- ◇子どもたちの生活への新聞の取り入れ方
(神戸市立山田中学校)
- ◇新聞に親しみ、「学力」向上を目指す
(尼崎市立大庄北中学校)

兵庫県NIE推進協議会

N I Eを子どものために ～取り組みのさらなる深化へ～

会長 秋 田 久 子

2019年度の実践報告書をお届けします。今回も学校の特色を生かした実践が盛りだくさんです。各校から寄せられた実践報告を読みながら、新しい二つの観点が浮かびました。

一つ目は、学校経営・教育経営の観点からのN I E導入とその効果です。

県立神戸聴覚特別支援学校の例をご紹介します。4年前の冬に当時の天知校長先生からご連絡をいただきました。「児童・生徒の言語力育成にN I Eを使いたい」。障がいのために狭くなりがちな視野と情報収集の範囲を広げて、将来の社会生活を支えたいというお考えです。大賛成。そこで、実践指定前の1年間で「N I Eウオーミングアップ期間」として、学校と一緒に有用な展開を試行することにしました。

天知先生は聴覚障がい教育への先生方の深い理解とやる気に信頼を寄せるとともに、先生方ご自身の心の底にある「外部への気後れ」もおもんばかっておられました。そして、その気後れこそが実は生徒の可能性に枠をはめるものであると看破しておられました。

ウオーミングアップ後の先生方の意欲は目を見張るものでした。18年度、実践発表会での壁新聞や生徒のしっかりした意見発表に、大勢の参加者が称賛を寄せました。加えて私どもは、外部に向けて成果を発信する先生方の生徒への信頼と自信にあふれた明るさに目を見張りました。その後も時折学校へ伺っていますが、森村校長先生に引き継がれて、先生方の「気」はさらに明るく前向きに進化していると感じます。

20年度開校の姫路市初の義務教育学校、豊富小中学校では、学校の特色ある取り組みに「N I E実践」を掲げ、19年度を助走期間として両校の先生方がN I E研究を進めておられます。先生方の熱意の輪がつながっていきます。その実践報告も掲載しています。

学校経営・教育経営にもN I Eは使える、うれしいことです。

二つ目は、外部の力添えをいただくのにもN I Eは活用できるということです。

養父市立建屋小学校の英語スタンプラリー「イングリッシュ・マラソン」。PTAさんと英語教室参加の地域の方々が問題作成にも行事展開にも力添えをくださいました。

県立津名高等学校2年生が新聞を資料に地域課題を抽出し、その解決を考える「リボン・プロジェクト」。ポスターセッションには行政や市民団体の皆様が参加くださいました。

県立神戸鈴蘭台高等学校の県内の17企業・団体の経営者・役員の方々へのインタビュー活動。「私たちの街 神戸」を考える事前準備にも、まとめにもN I Eを活用しました。

外部の力添えをいただく活動の準備にも「まとめ」にも、N I Eは有用です。

実践報告書は事例集です。児童・生徒の目を社会に広げる、そのための地ならしにも具体的な資料としても、どうぞこの実践報告集をご活用ください。

兵庫のN I E活動を支えてくださるすべての皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございます。どうぞこれからも一緒に、よろしく願いいたします。

<目次>

巻頭言 「N I Eを子どものために ～取り組みのさらなる深化へ～」

兵庫県N I E推進協議会会長 秋田 久子 …………… 1

2019年度兵庫県N I E実践指定校 …………… 4

【小学校】

社会に目を向け 自分を拓く 新聞の活用

神戸市立向洋小学校…………… 6

社会に対して自分の考えをもち、参画していこうとする児童の育成を目指した授業づくり—新聞記事のスクラップ・読み比べ、投書欄への投稿を通して—

加古川市立川西小学校……………10

伝え合う喜びを実感しながら発信しよう！

～仲間・地域・世界とつながる児童の育成をめざして～

養父市立建屋小学校……………14

新聞に親しみ、文章を読み取る力の育成

～初見ノートを使った音読を通して～

神戸市立六甲アイランド小学校……………18

新聞を「つかう」「つくる」活動を通して

姫路市立豊富小学校……………22

新聞に親しもう～新聞を活用し、表現できる子の育成～

洲本市立鳥飼小学校……………26

主体的で対話的な学びを新聞でも

淡路市立志筑小学校……………30

【中学校】

子どもたちの生活への新聞の取り入れ方

神戸市立山田中学校……………36

新聞に親しみ、「学力」向上を目指す

尼崎市立大庄北中学校……………40

N I Eを通しての学び合いから世界を考える。

(終戦から 74 年、阪神・淡路大震災 25 年)

西宮市立平木中学校……………44

新聞で学びを深めよう

猪名川町立中谷中学校……………48

新聞を活用した「調べる力」の育成

姫路市立豊富中学校……………52

【高等学校】

新聞を通して社会への関心を高め、社会の一員としての自覚を高める

兵庫県立武庫荘総合高等学校……………58

新聞で「他人事」から「自分事」へ

兵庫県立津名高等学校……………62

モラルジレンマの枠組みを用いた社会的論争課題の探究

～みんな違って、みんないい～

神戸市立神港橘高等学校……………66

日々の教育活動への新聞の活用と地理歴史科地理B授業への新聞の活用

兵庫県立柏原高等学校……………70

課題研究論文のテーマを探す

兵庫県立加古川南高等学校……………74

新聞を活用した主体的な学び

兵庫県立三田西陵高等学校……………78

「私たちの街・神戸について」記事を書いてみよう

兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校……………82

【特別支援学校】

神戸聴覚N I E 希望の風にのって～主体的対話的で深い学びを実現するために～

自分の思いを文章で伝える

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校……………88

【2019年度兵庫県 NIE 実践指定校】

通常枠 20 校（◆は継続校 ◇は新規校）

〈通常枠〉小学校 7 校

◆神戸市立向洋小学校	神戸市東灘区向洋町中
◆加古川市立川西小学校	加古川市米田町平津
◆養父市立建屋小学校	養父市建屋
◇神戸市立六甲アイランド小学校	神戸市東灘区向洋町中
◇姫路市立豊富小学校	姫路市豊富町御蔭
◇洲本市立鳥飼小学校	洲本市五色町鳥飼中
◇淡路市立志筑小学校	淡路市志筑

〈通常枠〉中学校 5 校

◆神戸市立山田中学校	神戸市北区山田町下谷上
◆尼崎市立大庄北中学校	尼崎市大庄北
◆西宮市立平木中学校	西宮市平木町
◇猪名川町立中谷中学校	猪名川町字尾鼻ヶ尾
◇姫路市立豊富中学校	姫路市豊富町御蔭

〈通常枠〉高等学校 7 校

◆兵庫県立武庫荘総合高等学校	尼崎市武庫之荘
◆兵庫県立津名高等学校	淡路市志筑
◇神戸市立神港橘高等学校	神戸市兵庫区会下山町
◇兵庫県立柏原高等学校	丹波市柏原町東奥
◇兵庫県立加古川南高等学校	加古川市加古川町友沢
◇兵庫県立三田西陵高等学校	三田市ゆりのき台
◇兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校	神戸市北区山田町下谷上

〈通常枠〉特別支援学校 1 校

◆兵庫県立神戸聴覚特別支援学校	神戸市垂水区福田
-----------------	----------

【 小 学 校 】

社会に目を向け 自分を拓く 新聞の活用

神戸市立向洋小学校 校長 三善 公文
教諭 田中 健二

1. はじめに

本校の児童は、学習塾などに通う児童が多く、学校外での学習時間が長い児童がたくさんいる（家庭学習が毎日3時間以上の児童が全国平均の2倍）。しかし、「将来の夢や目標をもっていますか」という質問には、「もっている」と答えた児童が全国平均に比べ10ポイント少なく、学校へ行くことが楽しいと感じている児童も少ない。

また、国語科や算数科の全体的な学力は全国平均より高い水準を保っているものの、国語科における「読む」と「書く」の分野において、難しさを抱えている児童が多くいる。（全国学力・学習状況調査より）

そこで今回は、新聞や情報を使った学習を通して、知的好奇心を高め、社会に目を向ける学習活動を設定することで、「将来の夢や目標」をもつことができるのではないかと。児童が社会の出来事に関心を寄せ、自分の考えを表現することで「学校へ行くことが楽しい」と感じる児童が増加するのではないかと。新聞を活用した学習を年間通して設定することで、「読む」や「書く」に対して、前向きに考える児童が増加するのではないかと。そういった期待を込めて本年度行った取り組みを中心に活動報告を行う。

2. 本年度の主な取り組み

活動その1 「先生スピーチ」

児童の知的好奇心や社会への関心を高めるために、朝の会の時間に「先生スピーチ」を行った。

先生スピーチの内容は、新聞やネットニュースなどから、児童が興味を示すだろうと期待できる出来事や事件をピックアップし、分かりやすい言葉にしてまとめたものである。また、スピーチの最後には、児童が社会の出来事に対して疑問や興味をもつことができるように呼びかける言葉をつけたしている。

〈 例 〉

スピーチ名

「首里城焼失と人の弱さ…」

呼びかけ

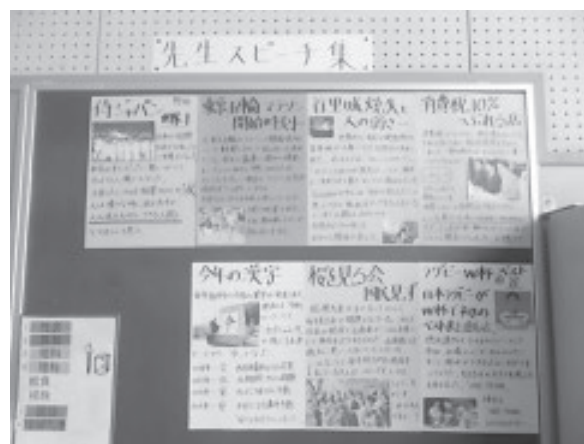
「証拠がないにもかかわらず、犯人は韓国人だと言う人が出てきました。みんなはどう思いますか」

スピーチ名

「消費税10% つぶれる店」

呼びかけ

「機械導入が間に合わず、つぶれてしまう老舗があります。みんなはこの国の政策をどうとらえますか」



スピーチ後、その内容についてフリートークをしたり、購読している読売KODOMO新聞を読んだり、社会の出来事に対して考え、議論する時間を設けた。児童の中からは「人を〇〇人だからと決めつけるのではなく、正しい判断をしていきたい」や「消費税を高くしたのは理由がたくさんあると思います。でもそのせいで悲しい思いをする人もいることを忘れてはいけないと思います。せっかく集めたお金なので大切に使ってほしい」という意見が出てきた。そういった議論が交わされた後日、「桜を見る会」についての記事を出してほしいと児童が話しかけてきたことは、この活動をしてきた大きな成果と思う。

そういった活動を年間通して取り組むことで、児童から「昨日こんなニュースがありました」と話したり、「新聞にこんな記事があったので、先生スピーチにしてみんなで話し合いたい」と意欲的な態度を見せたりすることが何度もあった。

知的好奇心を高め、社会に目を向けようとする態度を育むことができた活動であったと思う。

活動その2 「かくかくタイム」

読むことや書くことに苦手意識をもつ児童が多いということから、18年度に引き続き、朝の学習の時間に高学年は、読売KODOMO新聞を活用し、読んだり要約したりする時間を設けた。しかし、18年度の反省で「読むことに難しさを抱える児童が1年間で要約をすることはかなり難しい。」という意見が出た。それを踏まえて、本年度は新聞を購入する学年を4年生からと設定し、スモールステップで力を伸ばしていけるように体制を整えた。また、低学年においても絵本の読み聞かせなどを通して、話の中心をとらえたり、感想を書いたりする力を育むことができるようにした。

学年	主な活動とめあて
1	教師の読み聞かせをした絵本の内容について感想を書くことができる。
2	自分が選んだ本の内容について、感想を書くことができる。また、簡単な設問に答えられる。
3	自分が選んだ本の内容について、感想を書くことができる。また、設問に答えたり、自分の考えを書いたりすることができる。
4	読売KODOMO新聞を読み、簡単な設問に答えられる。
5	読売KODOMO新聞を読み、簡単な設問に答え、それらをつないで要約ができる。
6	読売KODOMO新聞を読み、制約を踏まえて要約ができる。

新聞を活用した「かくかくタイム」に年間を通して取り組み、一つ一つの記事がもつ魅力とさまざまな記事が並んでいる一覧性によって、本校の児童は、多くの知識や情報に触れて、世の中の出来事への感度を高めることができた。そして、新聞記事の内容をまとめる活動を通して、知識を得るだけでなく、書く力を高めることができた。新聞に載っている記事は、今現在の自分たちが暮らしている社会のリアルな情報なので、児童も自然と興味をもつことができた。子ども新聞に興味をもった児童は、大人向けの一般紙にも少しずつ興味を向けるなど、児童は新聞を通して社会に関心を深めた。



5年生 要約ノートとワークシート

5年生のかくかくタイムでは、木曜日に届く読売KODOMO新聞を放課後、教師で記事を選定する。金曜日に児童に新聞を配布し、自由に新聞を読む時間を設けた後、選定した記事を切り抜き、ワークシートの上部に貼る。次週の火曜日にその記事に対する設問に答え、要約を進める。このサイクルを繰り返すことで、児童はスムーズに取り組むことができるようになり、読む力や学びに向かう力が高まった。児童の中には、新聞の中で分からなかった語句やもっと調べてみたいことを休み時間にパソコンで調べ、自学ノートにまとめるなど、自ら進んで学ぶ姿が見られることもあった。



5年生 新聞を読む児童の様子



6年生 要約ノート

6年生も同様に、木曜日に届く読売KODOMO新聞を放課後に教師が記事を選定する。金曜日に児童に新聞を配布し、記事を切り抜いた後、火曜日に要約を進めた。5年生のワークシート形式とは違い、キーワードをいくつか指定し、その言葉を用いて要約をすることで、話の中心をとらえて読む力が養われ、書く力へとつなげることができた。また、児童が提出したノートに教師が評価をつけていくことも行った。主語と述語の関係や話の中心をとらえた文章構成ができていくかなど、国語科のねらいに沿った評価規準を学年で定め、児童に適格に評価・アドバイスを行うことで、次号への意欲を高め、さらに力を伸ばすことができた。

5年生のワークシートと要約ノートは6年生の要約ノートにつながるように意識をして制作している。購入するノートをそろえ、児童がスムーズに活動が行えるようにするなど、細かな部分にまで組織的に取り組むことができたことが、学校全体として成果を出すことができた要因であると考えられる。

3. 最後に

これらの活動を通して、あらためて児童の教育環境を整えていくことの重要性を感じた。児童が学校の授業だけでなく、社会を通して成長していくことができるように、学校側の働きかけがこれからも大切になっていくと思う。また、児童はどこに困り感をもって、どんな手立てを必要としているのかを見つめなおす良い機会ともなった。全体研修で児童の実態を捉え、「かくかくタイム」をはじめとする朝の学習時間について議論を重ねることができたことも、本校にとって大きな成果であったと感じる。

情報化社会が進むにつれて、テレビやインターネットによる映像や短い言葉による情報ばかりに触れる児童が増えている。しかし、児童が大人へと成長したときに、社会の動向に関心を持ち、自分の考えをもつためには、新聞などの活字による情報に多く触れることが重要である。私は、新聞は「子どもと社会をつなぐ扉」だと考える。社会に目を向け、子どもたちが自ら考え、未来を切り拓いていく力を育むために、今後も新聞や情報をいかした学習活動を積極的に取り入れていきたい。



兵庫県N I E推進協議会主催、19年度N I E
実践発表会での向洋小学校の実践発表の様子
(2月1日、神戸市・よみうり神戸ホール)

社会に対して自分の考えをもち、 参画していこうとする児童の育成を目指した授業づくり

—新聞記事のスクラップ・読み比べ、投書欄への投稿を通して—

加古川市立川西小学校 校長 竹内 恵理子
教諭 藤池 陽太郎

I. はじめに

本校はN I E指定校2年目であり、これまで高学年を中心として新聞を活用した教育活動を積み重ねてきた。その中で、実践1年目の5年生（現6年生）の児童は、新聞を教室に置いても日常的に新聞に触れることが少なく、さらに、社会的事象を自分ごととして捉えることができず、社会事象への関心が低いという課題が見られた。学習指導要領の社会編では、「社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養う」という目標が示されているが、5年生の児童にはその力が十分に育っていないと考えた。

そこで指定校の2年目は、新聞を通して社会的事象に出会わせ、新聞の投書欄へ実際に投稿する活動を積み重ねることで、社会に対して自分の考えをもち、社会に参画していこうとする児童を育成できるのではないかと考え、授業づくり及び実践を行った。そこから得られた成果と課題について考察していきたい。

II. 実践について

1. 新聞記事のスクラップ活動

テレビで流れるニュースなど、社会で起きるさまざまな事象と児童が出合えるツールは数多くある。その中でも新聞は、児童が社会的事象に受動的ではなく、主体的に出会うことができるツールの一つであると考えた。そこで、児童と社会的事象を出合わせるために、毎週水曜日を「新聞の日」として、朝の学習の時間に新聞記事のスクラップ活動を行った。スポーツ記事以外をスクラップするというルールのもと、自分が興味を持った新聞記事を切り抜き、その新

聞記事について考えたことをコメント欄に書く活動を積み重ねた。（写真1・2）



写真1 新聞記事のスクラップ



写真2 新聞記事を切り抜く児童

最初は新聞記事を探すだけで時間を要していた児童も、回数を重ねていくうちに、新聞の構成やどこにどのような記事があるかを自然に理解していくことで、短い時間で気になる記事を見つけ出すことができるようになった。また、新聞記事を友だちと探す姿も見られ、「この事件、信じられないよね」「これについて、ぼくはこう思う」など、記事をきっかけとして社会的事象

についての会話も生まれるようになり、関心の高まりを感じられた。さらに、水曜日の朝の学習の時間までに記事を切り抜いておくというルールに変更したことで、休み時間や少しの空き時間に新聞を開き、新聞記事に目を向ける習慣を身につけることができた。

2. 新聞の投書欄への投稿

6月に国語科の「新聞の投書を読み比べよう」（東京書籍）の発展学習として、実際に新聞の投書欄への投稿をする活動を行った。（写真3）テーマは自分の関心のある社会的事象であれば何でも良いとした。新聞記事のスクラップを積み重ね、社会的事象への関心が高まっていたこともあり、高齢者運転問題や児童虐待などの社会問題についての投書を書く児童が多かった。また、数名の児童が実際に投稿した文章を新聞の投書欄に掲載していただき、自分たちが考え、発信したことが実社会に届いたという大きな手ごたえを感じる事ができたようであった。



写真3 新聞の投書を書く児童

3. 新聞記者による出前授業

新聞への関心が高まったところで、新聞についてより詳しく知るために、6月と11月にゲストティーチャーとして神戸新聞社の三好正文記者にお越しいただいた。6月には新聞記者がどのように現場で取材をし、記事になっているのかを教えていただいた。（写真4）



写真4 三好記者による出前授業

また11月には、新聞を読むことに慣れてきた児童にさらに新聞を読みとる力をつけてほしいと考え、新聞各社の記事の書き方の違いについて授業をしていただいた。東日本を縦断した台風19号について、東日本の各地方新聞と神戸新聞を読み比べることにより、同じ災害でも地域によって伝え方が大きく異なることに気づくことができたようであった。（写真5）



写真5 新聞記事を読み比べる児童

4. 新聞記事を活用したプレゼンテーション

11月に行った国語科「まちの幸福論」（東京書籍）の学習では、町おこしの事例について、インターネットや書籍から情報を集めるだけでなく、新聞記事から情報を得るなど、情報源の一つとして新聞を活用することができた。加古川市の人口減少などの問題について、新聞記事を引用することで説得力を高めながら、その解

決策について自分たちの考えをプレゼンテーションで伝えることができた。(写真6)



写真6 新聞記事を引用したプレゼン

5. 新聞記事から消費増税について考える

6月と10月に投書欄へ投稿したが、その内容については、自分の生活経験の中だけで自分の考えをもつ児童が多く、複数の情報から多様な視点をもって考える力は十分ではなかった。

そこで、11月に社会科の「わたしたちの生活と政治」(東京書籍)の学習において、10月に実施された消費税の増税を社会事象として取り上げ、複数の新聞記事の読み比べから多様な見方ができるようにするために授業づくり及び実践を行った。消費税は児童も納税者の1人であり、自分の生活との関わりが大きいと、児童の関心も高い。その消費税が増税されることを取り上げて学習を進めていくことで、増税も政策の一つで国民の願いを実現するためのものであり、その願いを実現するために国会・内閣などそれぞれの役割があることを具体的に理解させることができると考えた。さらに、教科書で学習した内容や増税に関する新聞記事を読み比べることで、「消費税は商品が値上がりするから反対」という偏った見方をするのではなく、多様な視点をもって増税の意味について考えることができ得ると考えた。

授業では、まず消費税の増税に関する政府広報紙を配布し、増税の使いみちについて確認をさせた。その中の「幼児教育の無償化」につい

て取り上げ、本当に子育て世代の親の願いなのかという疑問をもたせながら、実際の声を聞くインタビュー活動へとつなげた。インタビュー活動を行うことで、新聞の紙面だけでなく、生の声を聞くことの重要性にも気付かせることができた。(写真7)



写真7 インタビューをする児童

また、税金や国会、内閣の働きの学習では、教科書だけでなく、実社会と接点をもちながら、身近なものとして学習してほしいと考え、毎時間、その学習内容に応じた新聞記事のコピーを配布した。例えば、「国会の仕事は法律をつくることである」という内容の学習では、ながら運転を厳罰化する道路交通法が改正された記事を配布することで、「それも法律だったんだ」というように、法律を身近に感じながら学習をすることができた。

税金、内閣、国会の働きについて学習をした上で、本単元のねらいでもあった、社会的事象について多様な見方をもって考える力を育成するために、消費増税に関する新聞記事を読み比べ、その上で消費増税について賛成か反対かに分かれて討論会を行う活動を設定した。討論会では、①消費税の増税について解説する記事②消費税の増税に対して反対意見が多いという記事③海外では消費税が高いという記事、の三つの記事を読み比べながら討論を行った。(写真8・9)



写真8 三つの新聞記事を読み比べる児童



写真9 討論会で賛成意見を主張する児童

【賛成派】「少子高齢化が進んでいるから将来のためには仕方がない」「国会議員が慎重に決定をした」「負担を軽くする軽減税率もある」「高くても海外のように社会保障が充実する」

【反対派】「収入が少ない人ほど負担が重い」「物の値段が上がるともっと不景気になる」「軽減税率がわかりにくい」「国の予算や無駄を先に削るべき」「一部のみにしか使われていない」

両者は上記のように主張をし、新聞記事の読み比べをした上で討論を行うことで、少子高齢化や社会保障、軽減税率などの多様な見方から消費増税について考えることができた。また、授業前は、「物が高くなるから反対」という生活経験の中だけで、偏った考えをもってしまいう児童が多かったが、授業後は、「これからの社会のためには必要だから賛成」「一部のみにしか得が

ないから反対」など、多様な見方で自分の考えをまとめることができていた。また、授業後に書いた新聞の投書においても、賛成派・反対派どちらも多様な見方をもつことができており、児童の変容を確認することができた。

Ⅲ. 成果と課題

新聞を活用した本授業実践により、次の成果と課題が得られた。

一つ目の成果は新聞への慣れ親しみである。スクラップ活動の積み重ねにより、今まで「難しいもの」であった新聞が児童にとっても身近なものになった。定期的に、全員が新聞に触れる機会を設けることは有効であった。

二つ目は社会的事象への関心の高まりである。新聞への慣れ親しみにより、社会的事象について自然に目にする機会が増えることで関心が高まっていることを感じた。また、その記事についてさらに詳しく知ろうと記事を読み込むなど、主体性の高まりも確認できた。

三つ目は社会の一員としての意識の醸成である。新聞を活用した授業や自分の考えを発信する投書により、今まで「関係がない」と感じていた政治や社会問題が身近なものとなり、これから自分たちが社会の一員となり考えていかなければならないという意識の変容が見られた。

一方、課題としては、投書欄への投稿の数が合計4回のみであったことがあげられる。今後は月に1回は投稿するなど、社会参画の機会を増やすことで、さらに社会的事象への関心の高まりが期待できると考えている。

Ⅳ. 終わりに

本実践では、新聞を活用した学習により、一定の成果を得ることができた。新聞は教科書では取り扱えない実社会で今起きている社会的事象を取り扱える教材であり、たくさんの可能性を秘めている。今後も新聞を通して社会事象への関心を高め、投書欄への投稿によって社会に参画できる児童の育成を目指していきたい。

伝え合う喜びを実感しながら発信しよう！

～仲間・地域・世界とつながる児童の育成をめざして～

養父市立建屋小学校 校長 池田 哲郎
主幹教諭 坂本 和宏

1 はじめに

本校は、18年度より小規模特認校として、また本年度からコミュニティ・スクールとしてスタートをした、全校児童数45名の小学校である。

NIE実践指定校2年目となる。18年度から始めた国際理解・外国語活動の取り組みの一環として、英字新聞の活用を実践の中心にして取り組んだ。本報告では、18年度の取り組みを引き継いで行った「English Marathon」(イングリッシュマラソン)について、その経過と概要そして児童および参加した方々の感想・変容について述べる。

2 実践の概要

(1) 日時及び参加者

- ・日時：令和元年10月31日(木) 2～3校時
- ・参加者：建屋小学校全校生およびPTA、地域の方

(2) ねらい

- ・児童が英字新聞を活用したさまざまな課題に取り組むことにより、英語に対する興味関心を深める。
- ・異年齢集団が協力して課題を解決することにより、信頼関係を深め、よりよい学校生活を築こうとする主体的な意欲を養う。

(3) 方法：ポイントラリー形式、縦割り班でブースをまわっていく。

- ・縦割り班のリーダーは、チェックシートを持って各ブースのポイント等を記入する。
- ・全員がスタンプカードを持ち、回ったブースが分かり、記念になるようにする。
- ・各ブースでは、必ず英語であいさつをする。
- ・ブースは八つ設定し、時間内に六つ以上のブースをクリアできるようにする。

(4) その他

- ・PTAと地域の方および教職員がブースを担当する。
- ・1, 2年生は生活科として、3～6年生は総合的な学習の時間としての学習活動とする。
- ・ブースの内容については、NIE事務局及び本校職員が内容を提起し、校内研修会で本校および他校の教職員・PTA・地域の方とワークショップを行い検討する。

3 実践の経過および実際

(1) 校内研修にてブースの内容検討 (7月24日 於：建屋小学校)



問題提起

グループ討議

発表

※四つのグループがそれぞれ六つの内容を選び、発表した。その内容を後日校内研究推進委員会で検討し、最終的に八つのブースの内容を決定した。

(2) 決定したブースおよび教室配置について (誌面の都合上ブース名のみ表示)

- Odd one out!! (音楽室) ・ Matching News (家庭科室)
- Newspaperman 2 (多目的) ・ What's this? (理科室)
- Sort by the day of the week (図書室) ・ News Puzzle (会議室)
- Super Matching (コンピューター室) ・ 言葉みつけ Jolly Phonics (図工室)



言葉みつけ Jolly Phonics



Odd one out!!





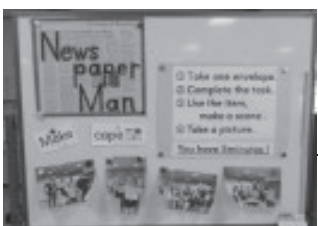
(3) 実践の内容 (誌面の都合上、2のブースについて紹介する)

Newspaperman2

概要：指示カードを引き、その指示通りの物をみんなで作る。特に本年度は何かワンシーンを作る。そして最後に体育館で見せ合う。

準備物：新聞を使ってする動作の指示文書



新聞たくさん、加工用のセロテープやガムテープ等

<p>手順</p> 	<ol style="list-style-type: none"> ①封筒を一つとる。 ②あたえられたお題をする。 ③全員でできたら勝ち。 ④みんなで写真を撮る。 ⑤あたえられた時間は5分間。 
<p>ミッションクリアの条件</p>	<p>5分間でできたところまで。</p>
<p>準備物</p> 	<p>Newspaper Man の仮装 ミッションの封筒 新聞 (たくさん) ガムテープ セロテープ マジック はさみ</p>

Sort by the day of the week

概要：日付がばらばらの1週間の新聞記事を、月～日の順に並べる。

準備物：1週間(月～日)の曜日が載った(日時はばらばらの)英字新聞

<p>手順</p> 	<ol style="list-style-type: none"> ①図書室のどこかに、1週間分(7日分)の新聞が隠されている。それをみんなで探す。 ②全部の新聞が見つかったら、いよいよゲームスタート。 ③新聞を、月曜日から日曜日まで順番に並べる。(1～3年生がする) ④並べられたら、全員で大きな声で英語で月曜日から日曜日まで言う。
<p>ミッションクリアの条件</p>	<ol style="list-style-type: none"> ①0～30秒：シールかハンコの、上級品 ②30秒～1分：シールかハンコの、普通のもの ③1分すぎたら、高学年が手伝う。
<p>準備物</p>	<p>名札、衣装、1週間(日～土)の曜日が載った(日時はばらばらの)英字新聞(パウチ)</p> 

4 参加者の感想

(児童)

- ・むずかしかったけど、とてもおもしろかった。ぼくのじゅんばんのとき、わからなかったら、たてわりはんのおにいさんがヒントをおしえてくれて、うれしかった。
- ・リーダーとして下級生を連れて回るの、とても難しかったです。



ブースの内容は、前もって練習をしたから思ったより簡単で、下の子に教えることが出来ました。とても良い経験になりました。

(地域の方)

- ・昨年もブースの担当をしたが、確実に子どもたちの英語力が上がっていると感じた。リーダーが下の学年の子をまとめていて、とても頼もしかった。自分もいい経験になった。

5 成果と課題

本実践は、小規模を生かした本校の強みが十分に発揮されたものであると感じた。異年齢集団を有効に活用し、それが子どもたち相互の関係性を高めていく。さらに地域の方が学校の教育活動に主体的に参画していただける素地があり、結果としてコミュニティ・スクールを円滑に推進することにも寄与している取り組みである。さらに、各ブースの内容が本校教職員のみならず、市内外の教職員および地域の方に参加していただき、兵庫県NIE推進協議会の事務局の方々からいただいたアイデアを元に内容を検討したことが、運営していく側の主体的な参加意識の涵養（かんよう）につながったといえる。本実践は子どもたちだけでなくわたしたち教職員も広い視野をいただくことのできた、大変有意義なものであったと実感している。

課題としては、新聞の記事を有効に活用する取り組みのさらなる推進が挙げられる。また、新聞を自分たちで製作する取り組みも大切である。これについては5年生で、地域素材を活用した新聞づくりの取り組みを、記者派遣事業として実践した。学習活動の中で調べたことを新聞形式でまとめる方法を採用することはよくあることだが、その中にNIEの実践で学んだことを生かし、「何を・誰に・何のために・どのような方法で」伝えるのかということ念頭に置きながら実践をすすめていきたい。

English Marathon（イングリッシュマラソン）は、「グローバル&ローカル」を合言葉とする本校教育にとって、今後も推進していくことが必要な重要な取り組みである。今後も様々な知恵をいただきながら、全ての参加者が主体的に取り組んでいけるようなものであり続けたいと考えている。

新聞に親しみ、文章を読み取る力の育成

～初見ノートを使った音読を通して～

神戸市立六甲アイランド小学校

校長 繁田 恭治

教頭 酒井 秀幸

1. はじめに

本校は、神戸市東灘区にある人工島、六甲アイランドの東部を校区にもつ全校児童数 337 人の小学校である。教育への関心は高いものの、新聞購読をしている家庭はそれほど多くはない。子どもたちはテレビやインターネット等を使って情報を音声や映像で得ており、情報を活字から得ている児童は少ない。

多種多様な情報があふれている今日、情報の選択・活用の能力を育成することはとても重要なことである。そして収集した情報を読み取り、そこに自分の考えを重ね合わせることで、新学習指導要領に示されているアクティブラーニングの実践につながるのではないかと考える。

活字離れが叫ばれている中、子どもたちが少しでも新聞の面白さに触れ、他社紙と比較することで、リードの表現方法や記事内容の扱い方、読者を引きつける紙面の工夫等に気づいてくれたらと思う。また、学習新聞の作成にもヒントとなる要素がたくさん詰まっている。1年目の今年も5年生が子ども新聞を使った音読活動を通して、文章を読み取る活動に取り組んだことを中心に、本校のNIEについて述べていく。

2. 実践の概要

①新聞との出会い

まず、新聞を置くスペースだが、「スカイルーム」と呼ばれる、日当たりの良いオープンスペースが3階にあり、靴を脱いで誰でも利用できる場所に決めた。テーブルを6台置き、1紙ずつ置いていった。毎朝、5年生が職員室に前日の夕刊と当日の朝刊を取りに来て、机に分けてくれた。読み終わった新聞は、横に置いてある棚に新聞ごとに時系列で片づけていき、後日、読み返したい時にすぐに取り出せるようにした。



たまたま5年生の教室が3階にあったため、新聞を置いたついでに新聞を広げたり、各紙に連載されている漫画を読んだりと思い思いの使い方で新聞に慣れ親しんだ。また、購読期間が9月～12月だったため、秋雨等で運動場に行けない時は、友達を誘っ

て新聞のスポーツ欄を読みに行く児童もおり、一緒に読みながら談笑する場面も見られた。



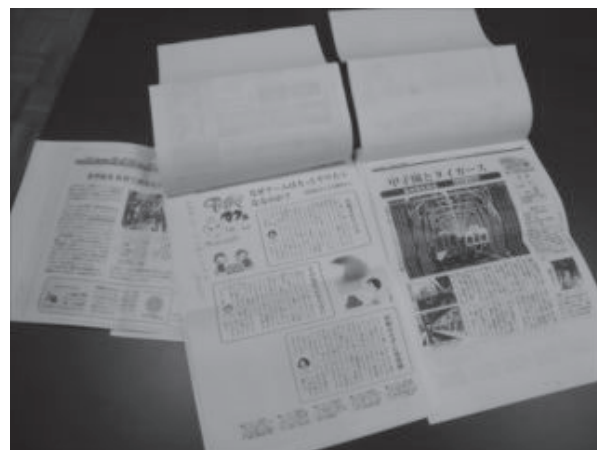
新聞に慣れ親しむ習慣がなかった子どもたちにとって、6紙もの新聞、とりわけ9月・10月に講読した子ども新聞は振り仮名が振られている上、内容が小学生向きに書かれているため読みやすかったようである。中には、子ども新聞を読んだ後で一般紙の同じ内容を読み比べる子供もおり、内容が分かると読みやすいようであった。

また、担任も児童同様に新聞に興味をもち、気になる記事を見つけては授業の中で紹介するようになり、そのことがさらに新聞を読む児童を増やすきっかけとなった。

②新聞記事を音読する

ある日、5年生の担任が「教頭先生、子ども新聞って面白いですね。今度、この新聞記事を使って音読の宿題にしてみたいと思います。」と話してくれた。

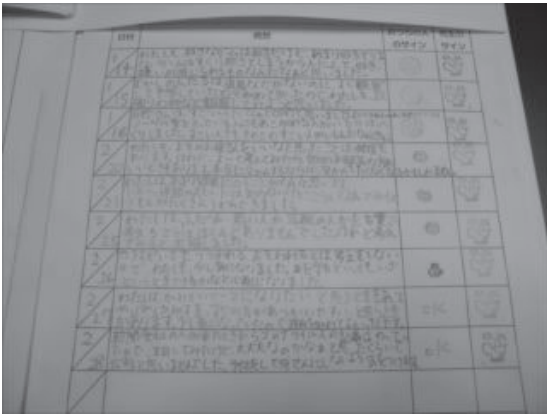
数日後、その教室に行ってみると、新聞記事がコピーされたものが貼られている冊子を見つけた。その名も「初見ファイル」。



詳細を担当に聞いてみると、これまでも音読の宿題は教科書を使って行っていたが、せっかく振り仮名のついた新聞記事があるなら、それを使ってみようということになった。そこで子ども新聞をあらかじめ担任が読んでおき、タイムリーな記事や子どもたちに伝えたい内容をコピーして手元にため、その都度増し刷りして子どもたちに配布、お家の人に音読を聞いてもらうという形態であった。

初見とは、「初めて目にしたもの」という意味で、文字通り配られた日に初めて見た記事を読むというものであった。教科書と違って初めての文章を読むことによって子どもたちは「今日はどんな内容なんだろう。」といった興味をもてたようである。

記事のコピーを持ち帰った子どもたちは、お家の人の前で音読してサインをもらうだけでなく、その日に読んだ記事の感想を一言、書きつづることを行った。初めのうちは「おもしろかった」「初めて知った」といった簡単な感想だったが、回を重ねるうちに自分の考えを入れたり、具体的な感想を書くことができる子どもが増えてきた。

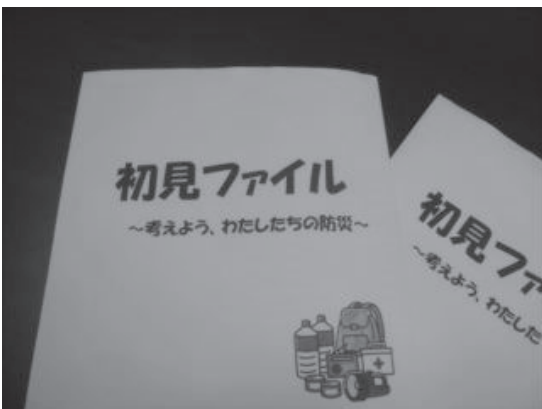


○吉野さんはすごい人だなあとあらためて思いました。ノーベル賞をとっている人にもあこがれる人がいることにびっくりしました。すごい人でも、その上のすごい人がいるんだなあと思いました。

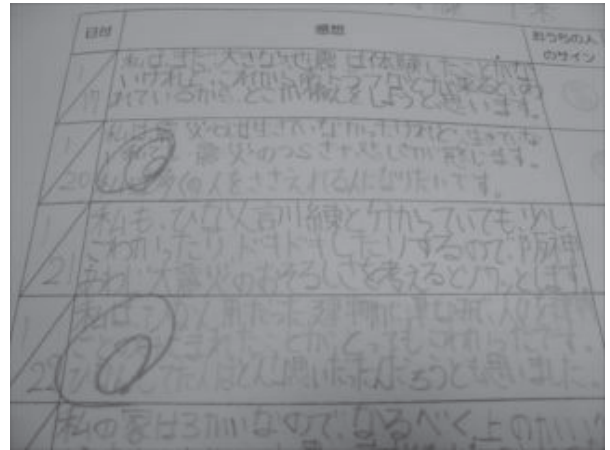
○私は日ごろ、あまり鉄道に乗ることがありません。だから鉄道の種類やスピードのことは知らないけれど、こうして読んでみると疑問がたくさん浮かんできました。〈児童の感想より〉

③防災記事を総合学習で活用

本校では、1月に全学年で防災参観授業が行われるが、それに合わせて5年生が防災発表会を行っている。そこで総合的な学習の時間に防災学習をテーマに学習を進めていくのだが、ここでも新聞記事を活用した取り組みが見られた。それが黄緑色の表紙、「初見ノート～考えよう、わたしたちの防災～」である。



使い方は前述の「初見ファイル」と同じだが、中身は全国各地の防災に関する記事が集められていた。これらも担当が9月から新聞記事を読みながらストックしていたもので、震災を神戸で体験していない担当が、震災を全く知らない子どもたちに防災教育の大切さを伝えようとした表れと感じた。



○私は震災当時は生まれていなかったけれど、生まれていない私でも震災のつらさや悲しさを感じます。私は多くの人を支える人になりたいです。

○私は避難用だった建物が、津波で人々を建物ごとのみこんだことがとってもこわかったです。避難していた人はどんな思いだったのだろうと思いました。

〈児童の感想より〉

購読期間を過ぎても、新聞記事を使った取り組みができるのも、新聞というメディアの特性である。子どもたちが新聞記事を使った授業に触れることで、多様な考え方を知り、自己の見識を広め、深めることができる。事実、本校の子どもたちも「初見ノート」を続けたことで、文章を読み取る力、記事に自分の考えを付け加えて表現する力が高まったのではないだろうか。

④記者派遣事業と震災特集記事の送付

1月に5年生対象で新聞記者派遣を受けることができた。ちょうど社会科で情報単元を学習していた時だったため、実際に新聞記者がどのように記事を集め、新聞にあげていくのかを丁寧に教えていただいた。本校では本年度から保護者が講師となって、されているお仕事について子どもたちに語っていただくというキャリア教育を行っており、子どもたちは新聞記者という仕事についても興味をもって聞くことができた。また、震災の日である1月17日の1週間前から高学年対象に震災特集が組まれた新聞を児童数分、毎日届けていただき、新聞記事を通して震災の時の様子を知ることができた。

3. おわりに

本年度、本校は初めてN I Eに取り組んだ。どれくらいの教育的効果があったかについては十分に検証できていない。しかし、今まで身近になかった新聞が手の届くところに置かれ、子どもたちなりの楽しみを見い出すきっかけとなったことは確かである。また5年生担任のように、新聞という学習資料が4カ月間届けられたことで、それを使ってみようという気持ちになることもできた。積極的かつ計画的に子どもたちの学習に活用してくれたことに深く感謝している。

一方、次年度に向けた取り組みにもヒントを与えてくれた。それは、さまざまな学習活動の中で、新聞という学習資料をどのように活用していくかということである。例えば、3年生社会科で行う地域学習は、新聞の「地域版」を使うことができるし、

4年生国語では要点をまとめる活動に新聞のコラムを活用することもできそうである。特別活動の学級活動では、新聞係や体育係が「今週の話題」「今週の1枚の写真」といった内容で、切り抜いたものを定期的に掲示することもできる。また、かつて私が担任だった時、社会の時間に地図帳を使った学習に取り組んだ際、子どもたちが地図帳から探す地名を新聞記事から選んだことがある。新聞記事を読んできた子どもは、ヒントを聞いて地名を探すことができるため、早く見つけることができ、そのことが子どもたちの新聞を読む習慣に繋がった。さらに発展学習として、子どもたちが各自で課題を決めてスクラップブック作りや新聞づくりを行うことによって、新学習指導要領に示されている「学びに向かう力」に繋がっていると確信している。要は指導者が「新聞を授業でどのように使おうか」と考えることから始まる。そして自ら新聞をめぐり、使えそうなものがないかを意識して探してみることで、授業のヒントが見つかるのではないだろうか。

N I Eの目的は、新聞購読できる期間限定の多様な学習活動ではない。大切なのはその期間の後にある。生きる力が求められている今、この情報化社会の荒波で生き抜くための、確かな情報判断力と問題解決力は不可欠である。

本校は2年目を迎えるにあたり、さらにN I Eを推進したいと思う。他校の実践例を紹介し、それぞれの学年ができそうな活動を子どもたちの興味や学習の流れに即して一緒に考え、さらにより活動ができることを目指していきたい。

新聞を「つかう」「つくる」活動を通して

姫路市立豊富小学校 校長 阪本 靖
教諭 川村 かおり

1 はじめに

本校は姫路市の北東部にある全校生 516 人の中規模校であり、本年度、N I E の研究推進にあたり、アンケートを実施した。

【アンケートより】(4・5・6年生 243名)

① 情報をどのような手段で入手していますか。

新聞・ネット・テレビ (12%)

新聞・テレビ (19%)

ネット・テレビ (26%)

テレビ (43%)

② あなたの家は新聞をとっていますか。

とっている (53%)

とっていない (47%)

③ 家族・友人・先生と新聞記事やニュースについて話をしますか。

話をする (55%)

話をしない (45%)

これを受け、まずは子どもたちが新聞を身近に感じられるようにしかけ、工夫をすることからのスタートとなった。また、本校はこれまで主に図書館を使った調べる学習を積極的に行っていたが、子どもたちの調べる力をさらに育成するために新聞を活用した(新聞を「つかう」新聞を「つくる」)取り組みを行うことにした。

2 新聞のある環境づくり

(1) 児童玄関

毎朝、新聞委員会の子どもたちが新聞 6 紙の 1 面を掲示している。玄関を通る子どもたちが、新聞紙面や社会で起きている事象を自

然に目にする素敵な空間になっている。



防災担当教諭が 1 月 17 日の阪神・淡路大震災や 3 月 11 日の東日本大震災に関するスクラップ記事を使ってポスターを掲示した。



(2) 学校図書館

図書室の入り口に、1 週間分の子ども新聞 3 紙を入れたケースを設置している。



学校司書が新聞 6 紙の「ローマ教皇 広島・長崎訪問」の記事を比べて掲示した。

(3) 廊下・階段



毎月、各学年前廊下に子ども新聞を掲示したり、陸上教室に参加している子どもたちの練習意欲を高めるために、青山学院大学の駅伝部主将の記事を掲示したりした。

3 実践の内容

(1) 学校として

「朝の放送での新聞記事紹介」

週に一度、子ども新聞から記事の一つを選び、校内放送で全校児童に紹介している。今年度は、環境問題や健康、スポーツ、ヘッドネーションなど、様々な内容の記事を紹介してきた。記事の内容が難しい場合、低学年のクラスを中心に記事を印刷して配布し、担任が補足の解説をした。記事の紹介によって、時事問題への知識が身に付いただけでなく、新聞への関心が高まり、図書室前で子ども新聞を読む児童が増えた。



「朝の学習タイム」

18年度から、辞書引きを取り入れた国語の学習を行っていたが、本年度は新聞を活用した取り組みを増やした。例えば、新聞の中のわからないことばを辞書で引いたり、テレビ欄から四字熟語をみつけたりする活動。また、新聞の中からお気に入りの記事を選んで要約、感想を書いたり、それを友だちと伝え合ったりする活動を行った。



(2) 各学年の取り組み

○新聞を『つかう』

「防災スリッパづくり」(1年生)

1月の防災学習の授業参観で、非常持ち出し袋に入れる物について学習した。その中で新聞紙は災害時の様々な場面で利用できることを学び、実際にスリッパを作る体験を親子で行った。



「図工科」(1年生)

「やぶいたかたちからうまれたよ」では、破いた新聞紙の形から思いついたことをもとに、置き方やかき方を工夫して絵に表した。

子どもたちは、新聞紙を破いた感触を楽しんだり、そこから生み出された不定形な紙片から様々なイメージを想像したりして作品を作ることを楽しんだ。



「社会科」(5年生)

『わたしたちの暮らしを支える情報』

小単元「情報をつくり、伝える」では、メディアの特徴やその役割について学んだ。

まず、新聞を開き、どのような記事が載っているかを調べた。市内の病院の情報や市長の動静などの記事も発見し、たくさんの情報が載っていることに驚いた。また、5社の新

聞の1面を比べ、同じ日の1面でも新聞社によって記事の内容が全く違うことに気がついた。そこから、情報を伝える側にも意図があり、受け手はその意図を意識しながら情報を読み取っていくことが大切だということを学ぶことができた。



○新聞を『つくる』

「まわしよみ新聞」(5年生)

『夏休みまわしよみ新聞』

夏休み中の子ども新聞から、自分が気に入った記事を2つずつ選び、紹介し合った。その後、模造紙に切り取った記事を貼り、コメントやイラストを書き、壁新聞を完成させた。初めてまわしよみ新聞を行ったが、子どもたちは意欲的に取り組むことができた。



【児童の感想】

- ・自分たちの興味のある記事を班で集めると、おもしろくてびっくりな記事だらけになってよかったです。
- ・みんなの選んだ記事の理由を聞くと、あまり興味がなかったものがとてもおもしろく感じました。
- ・チームで協力しながらできたので、すごく良かったし楽しかった。
- ・コメントをいっぱい書いてうれしかったし、みんなのコメントを読んでとても楽しかった。また、つくりたい。

『人権まわしよみ新聞』

地域の公民館を会場とし、新聞の中から「高齢者」「女性差別」「いじめ」「障がいのある人」「戦争と平和」の視点で記事を選び、まわしよみ新聞を作った。幅広い世代が新聞を通してお互いの考えを交流する機会となった。

「○○新聞づくり」(2・3・4年生)

2年生は生き物について、3年生は大豆づくり、4年生はバリアフリーなど生活科や総合的な学習の時間に学んだことを新聞にまとめ、他学年に発信することができた。

「ことまど」(5・6年生、新聞委員会)

- ① 5・6年生は、chromebookで新聞作成アプリ「ことまど」を使って、「自然学校の思い出」や「プログラミングでできること」についてグループごとに新聞にまとめた。コンクールに出すことを目標に定め、意欲的に取り組んだ。





② 新聞委員会は、1～6年生に向けて学校の出来事や、行事に際してのインタビューなどを記事にして、校舎内に掲示した。校舎の改修工事の様子の写真などを掲載し、多くの学年の子どもたちが新しい学校になることへの期待で胸をふくらませていた。



○記者派遣事業（5年生）

1月23日、共同通信社神戸支局の小島鷹之記者をお迎えし、「新聞を使った調べ学習」をテーマに学習した。4、5人のグループに分かれ、「こども新聞」各紙から気になる記事を選び、分からないことや記事の背景にあるものを、ネットや本、アンケートで調査をした。その後、模造紙に記事を貼り付け、調べた内容を書き込んだ。「新聞を使った調べ学習選手権 in 豊富小」と題して、各クラスの代表グループが全体場で発表をした。小島記者からは新聞記者の仕事の内容や、調べ学習を行う際のアドバイス、発表の講評などをしていただいた。



【児童の感想】

- ・私たちの班は小型恐竜について調べることになりました。新聞記者さんは、本当に時間との勝負なのだと分かり、大変だと思いました。
- ・新聞を作ることがいかに難しいかが分かり、これからもっと興味をもって新聞を読んでいこうと思った。
- ・「自分の夢や趣味は仕事へつなげられる。」と教えていただき、私も将来の夢に向かってがんばろうという気持ちがわきました。

4 おわりに

はじめは新聞に抵抗のあった子どもたちも新聞が身近にある生活が当たり前になってきている。

本校は20年度、義務教育学校として新たなスタートを切る。同じくNIEの推進指定校である豊富中学校と、校舎が隣接し、渡り廊下でつながる恵まれた立地条件も生かしながら、児童生徒の情報活用能力を育成するために、共に新聞を活用した（「つかう」「つくる」）実践にさらに教職員一丸となって取り組んでいきたい。

新聞に親しもう

～新聞を活用し、表現できる子の育成～

洲本市立鳥飼小学校 校長 木田 留美
教諭 四丸 千尋

1 はじめに

本校は、全児童 96 名の小規模校である。学校教育目標「学びつづける子の育成 ～郷育・協育・響育～」を掲げ、日々の教育活動にあたっている。教育活動の取り組みとして本年度より、NIEを推進することとした。今年度は、高学年（4・5・6年）を中心に、各教科の学習の中に取り入れたり、チャレンジタイムを利用したりして、新聞に親しむ取り組みを実践した。

2 実践内容について

○NIEコーナーの設置

本校では、子どもたちに新聞を気軽に手に取ってもらおうと、職員室前にNIEコーナーを設置した。新聞は、6年生の日直が前日の新聞を新しい新聞に変えるように当番制にした。本年度は、元号の変更、消費税の増税など大きなニュースが続いたこともあり、子どもたちの話題にも上った。各社の新聞では、どのような扱いがしてあるのかを比較する児童も見られた。

また、新聞が設置される机の前には椅子を置いていたため、休憩のついでに新聞をめくってみる児童も見られるようになった。



○朝の「チャレンジタイム」での取り組み

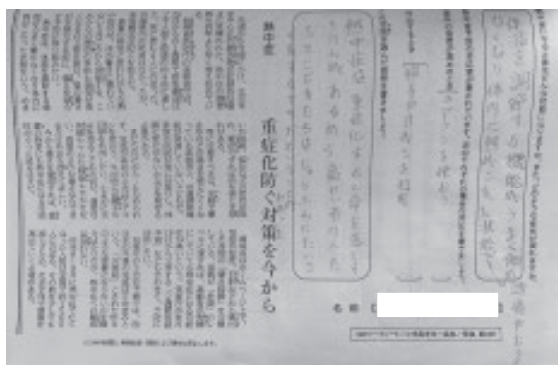
本校は始業前の朝の15分を「チャレンジタイム」と位置づけ、学習に取り組んでいる。月曜日と金曜日は算数、火曜日は国語（漢字等）、水曜日は国語（作文やまとめ）、木曜日は読書の時間としている。全国学力学習状況調査の結果を受け、正確に読み取る力、書く力が弱いことが明らかになった。そこで、水曜日の文章まとめの時間に5、6年生では、ネット上に上がっている学習シートを活用したり、教師の自作の学習シートを活用したりした。NIEまとめについては以下のとおりである。

- ①記事を読む。
- ②読んでわかったことを友だちと話し合う。
- ③学習シートの問題に取り組む。
- ④記事の内容を言葉でまとめる。

①は、記事の大まかな内容をつかむことを目的としている。続いて②では、①で自ら読み取った内容をペアで伝え合う。ペアで伝え合うことによって、自分が本当に内容を理解できていたのか、読み間違っているところがないのかを確認させる。③では、短時間で取り組める問題で取り組んだ。内容のさらなる理解に加え、わからない語句を辞書で調べる時間にも充てた。④では、②で伝え合った記事の内容、③でさらに理解できたことをまとめた。

最初は、新聞の記事を読むことに抵抗がある児童が多く、問題を解くだけでも相当の時

間がかかる児童も多かったが、取り組みを進めていくにつれ、一度の読みで内容の代替を把握できる児童も増えてきた。段階を経て、ペアでの内容の伝え合い、自分での要約までできるようになってきた。記事選びについては、新聞記事を読んでいると、児童の生活からはかけ離れていたり、犯罪や人を傷つける内容が書かれていたりするものもある。まずは、新聞に慣れ親しみ、身近に感じてもらうため、兵庫県や淡路島での取り組みや出来事の内容などの地域に密着した記事、世間で大きな話題となり、児童の中でも日々の話題に上がっている内容を中心に記事を選んだ。



○神戸新聞社による出前授業

9月10日、神戸新聞社からN I X推進部アドバイザーの三好正文さんに来ていただいて、5・6年生を対象に授業をしていただいた。まず、新聞がどのように作られるのかについてのビデオを視聴した。児童は、新聞ができるまでには、取材、執筆、編集、印刷、郵送・配達のための多くの工程が迅速に行われ、自分たちの手元に届くことをあらためて認識した。

また、3カ月分の子ども新聞がグループごとに配られ、おすすめの記事を選んだ。教室や廊下に掲示されてよく目にしている子どもたちであるが、いくつかの記事を読み比べるのは初めての経験だったようで、自分の選んだ記事について口々に感想を述べていた。この活動を通して、あらためて新聞の面白さを感じ、新聞を読んでみようという意欲がわいた児童たちであった。このほかにも、新聞に掲載される写真の秘密も教えていただき、本授業について、三好さんが記事にされるのに使われる新聞用の写真を、教えていただいた撮るコツをふまえ、児童の中から3人が写真撮影に挑戦した。撮影係になった3人はいい写真を撮ろうと、さまざまな角度から授業風景を撮影した。翌日の神戸新聞には3人が撮った写真の中から、三好さんの目に留まった写真とともに授業の様子がニュースとして掲載されており、児童らは新聞を身近に感じることができたようだった。



○各学年・委員会での取り組み

(1) 4年生

国語の時間に、「新聞を作ろう」の学習を以下の手順で行い、総合的な学習の時間などで新聞作りに1年を通して取り組んだ。

1 どんな新聞を作るかを決めよう。

新聞を使ってその特徴について調べた。新聞名と発行日、発行者が書かれていること、いくつもの記事が集まってできていること、記事ごとに、内容がひと目で分かるような見出しがついていること、記事と合わせて、写真などが使われていることなどを確認した。普段から新聞に触れている児童が少なく、実際の新聞を使った学習は、新鮮なものとなった。



2 どんな新聞を作るかを話し合おう。

総合的な学習の時間ともタイアップし、社会見学や福祉学習で学習したことを新聞にまとめることにした。



3 記事の下書きをし、わりつけや写真の効果的な使い方を考えよう。

実際の新聞では、学習していない漢字が多くあったり、内容が難しすぎたりして児童にとってはハードルが高く感じられる。そこで「マナちゃんナビくん写真ニュース」を活用

し、文の書き方やわりつけの効果的な方法を学んだ。伝えたい内容によって使われている写真が決められることを実際の新聞を通して理解することができた。

4 新聞を読んで、感想を伝え合おう。

教室に出来上がった新聞を掲示し、お互い内容や書き方について感想を伝え合った。見出しの付け方やわりつけなど、実際の新聞を参考にしながら読み手に伝わる新聞作りを追求した。また校内の学年掲示板に貼ったり、全校集会で発表をしたりして交流を深めた。学習したことが全校生に伝わったことで、児童の新聞作りに対する意欲がより高まった。



新聞作りを通して児童の新聞に対する興味や関心が高まった。家庭でも自ら新聞を読み、自主学习で記事の内容をまとめてくる児童も出てきた。また長期休みの思い出や自分の好きなことを新聞にまとめ発信しようとする児童も増え、新聞が児童の身近なものとなった。来年度も引き続き新聞を活用した学習を進めていきたい。



(2) 5年生

国語で「新聞を読もう」の学習を行った。この單元では、新聞における編集の仕方や図表や写真などを使った記事の書き方を実際の新聞から考えて、グループで話し合った。さらに、新聞には「逆三角形の構成」の書き方があることを学び、新聞を読むときのポイントを知ることができた。

また、全国紙や地方紙など、新聞によって記事の書き方や視点が変わっていることが見比べることからわかり、新聞に対する興味も高まった。

最後に、気になる記事を自主学习ノートに貼ったり、意見や感想を書いたりしてまとめた。



(3) 6年生

出前授業をうけて、新聞の構図、写真の選び方を学習した。学習したことを基に、修学旅行のまとめ新聞の作成に取り組んだ。修学旅行の出発前から、新聞を作成することを伝え、新聞用の写真も児童自身が撮影をした。

見出しには、興味を引く工夫をさせ、記事の配置もグループごとに考えさせた。5年生までの学習の中でも新聞の書き方を学んできた児童たちであったが、今回の新聞作成は、これまで以上に構図の工夫や写真の選定に力を入れて取り組む児童が多かった。



(4) 環境委員会

職員室前に掲示している、小学生新聞を毎日交換している。学期末には、委員会の児童が気になった記事を選び、児童朝会の際に全校児童にクイズを出題した。新聞が掲示されていることのお知らせとともに、まだ読むことの難しい低学年にも親しんでもらおうとする取り組みである。

3 おわりに

今年度の取り組みを通して、ほとんど新聞を見ることのなかった児童たちが、新聞に触れ、興味を持ち始めていることが分かった。取り組みの初めの段階では、「また新聞か…。」「文字ばかりで嫌だ。」という声も聞こえてきていたが、継続していくにつれ新聞に書かれていたことを話題にする児童も見られるようになったほか、NIEコーナーに立ち寄り、興味のある世間の出来事に対して、新聞から情報を得ようとする児童も見られるようになった。また、様々な新聞社の紙面の書きぶりに触れ、表現の工夫や、正しく情報を伝えるための書き方を学んだ児童は、作文を書く機会があると、抵抗なく書き進めることができた児童が増えてきた。

今年度は、児童が新聞に親しむ機会を多く設定した。来年度、他教科でも新聞をさらに活用して、学校としての課題である正確に読み取る力、書く力を伸ばしていきたい。

主体的で対話的な学びを新聞でも

淡路市立志筑小学校

校長

山本 哲也

主幹教諭

南 志乃婦

1. はじめに

本校は、全校児童 398 人で、淡路市では一番大きい学校である。淡路市の商業の中心地にあり、教育に対する保護者の関心は高い。スマホやタブレットの普及によるものなのか、家庭で新聞を定期購読している家庭は全体の 3 分の 2 程度である。

本年度は、6 年生を中心に取り組みを進めた。6 年生は、2 クラス 73 名で、活発で素直な児童が多い。しかし、なかなか新聞を手にとってじっくりと読もうとするまでには至っていない。教育活動に新聞を取り入れることで、新学習指導要領で求められる「主体的、対話的で深い学び」に迫ることができるのではないかと考え、1 年目の本年度は、「主体的で対話的な学び」を目指して取り組んだ。

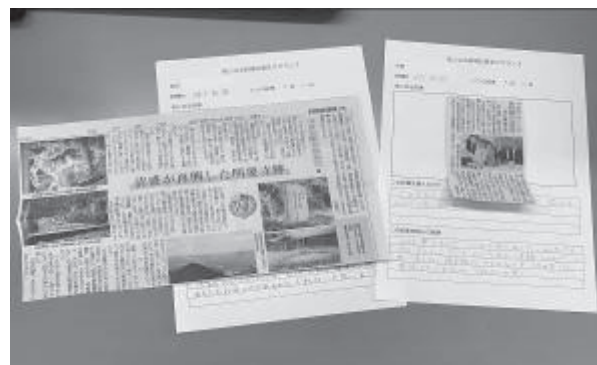
新聞は、6 年生の教室前のロッカーの上に置き、なるべく 6 年生が手に取りやすくした。また、廊下に置くことで、6 年生の教室前を通る 4 年生や 5 年生にも見てもらえると考えた。その日の新聞はロッカーの上に置き、前日までの新聞は、箱の中に入れるようにした。



2. 主な実践

(1) 気になる記事紹介の活動を通して (国語)

3 年前より朝の学習の時間をスピーチタイムとして活用している。6 年生では、スピーチタイムのテーマを「気になるニュースを紹介し合おう」としており、前日や過去 1 週間ぐらいのニュースをみんなに紹介することにしている。テレビだけではなく、新聞の記事もスピーチタイムで紹介するこ



とで、主体的に社会で起きている事柄について知ろうとし、紹介し合うことで対話的な活動が生まれ、互いに学び合う場になればいいと考え、取り組んだ。

毎朝、スピーチタイムで気になるニュースを紹介し合っているので、子どもたちはアンテナを高くして社会で起きていることをキャッチしようとするようになってきている。そこで、新聞記事を紹介し合うことでさらに社会への関心を高めることができると考えた。また、記事を選んだ理由や感想を書くことで、自分の思いを表現する力

もつけることができた。

毎週、この活動を行う中で、必ず「このコラム記事」を切り取る子、テーマを決めて新聞記事を探す子など、主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。

この活動が、朝のスピーチタイムにつながり、家で新聞を読んで気になった記事の紹介をするようになるとともに、なぜそのようなことが起こったのか、その出来事が意味することは何なのかというところまで考えるようになってきた。

(2) 回し読み新聞づくりを通して（特活）

NIEの研修で、回し読み新聞づくりについて教えていただいた。少しアレンジをして、次のような手順で行った。

- ① たくさんある新聞の中から、気になる記事を三つ選び、切り取る。本文だけではなく、広告や気象情報なども選んでいいことにする。
- ② 切り取った記事について、班で紹介し合う。この時に、なぜこの記事が気になったのか、この記事についてどう感じたのかということ伝える。聞く方は、その記事について質問をしたり感想を述べたりする。
- ③ 切り取った記事を、班で工夫して模造紙に貼りコメントなどを書く。
- ④ 各班で自分たちの回し読み新聞を紹介し、感想を聞く。

最初は、記事を選ぶだけで時間がかかっていたが、回数を重ねるごとに素早く記事を見つけられるようになってきた。記事紹介の活動で記事を選んだ理由や感想を書い

ているので、班の話し合いの中でほかのメンバーにも上手に伝えられるようになってきた。模造紙の紙面を作る際には、自分たちの記事をカテゴライズしたり、吹き出しをつけてコメントを書いたりするなど、いろいろ工夫する様子が見られた。



また、廊下に全ての班の模造紙を掲示して紹介し合うことで、記事の内容だけではなく、「このコメントがいいな」「こんなテーマで記事を集めるといいのか」などの感想が聞かれ、子どもたちは達成感を味わうことができた。



(3) 新聞づくりを通して（社会）

① 歴史新聞づくり

新聞に慣れ親しんだ頃、今度は社会科の歴史学習で学んだことを新聞記事にしてみんなに紹介しようということになった。

次のようなルールを決めて、1人でA4サイズの新聞を1枚作った。

- ・明治維新以降で、自分が興味のある時代や期間を選ぶ。
- ・文章だけではなく、絵や図、表などを入れる。
- ・カラーペンなどを使って、紙面をわかりやすくレイアウトする。



2学期の後半だったので、時代を明治以降に限定した。特に、戦前や戦後、戦時中の生活について記事を書く子が多かった。紙面をより読んでもらいやすくするために、カラーペンを使ってコラム風の記事を挿入したり、グラフや絵を挿入して見やすくしたりするなど、自分たちなりに工夫しようとしていた。

他の児童の新聞を見て、互いに褒め合う姿も見られ、これまでの活動が、この活動に結びついていることを子どもたち自身が実感しているようだった。

② 世界の国新聞づくり

6年生の3学期に、「日本と関係の深い国々」について学習する。そこで、教科書でどのようなことについて調べるのかを学習した後、自分が興味ある国を選び、その国の文化や習慣などについて調べることに

した。子どもたちは、思い思いの国について調べ、得た情報の中から取捨選択して新聞記事として取り上げる内容を決め、主体的に新聞づくりに取り組めた。この活動には、5W1Hをそのまま使うことはできなかったが、見出しを工夫するなど学習したことを生かそうとする工夫も見られた。

(4) 新聞記者から学ぼうの活動を通して(総合的な学習)

6年生は、総合的な学習の時間に「地域の伝統芸能を発信しよう」をテーマに人形浄瑠璃の学習に取り組んだ。

1年間をかけて、淡路人形浄瑠璃の魅力や歴史、地域で活躍した座元などについて調べるとともに、人形遣いや太鼓、太夫(語り)の技術を習得し、2月下旬の公演を目指して練習に取り組んだ。そして、公演の様子を新聞記事にして全校生や地域の人に見ていただくことにした。

そこで、2月中旬に本校図書室で、読売新聞洲本支局の加藤律郎記者に、新聞記者の仕事内容や記事の書き方などを教えていただいた。



まず、自己紹介の後に阪神・淡路大震災や西日本豪雨などの災害報道の様子やそのときの思いなどをお聞きした。被災の状況などを客観的に伝えることも大事だけど、

被災された人たちとの心のつながりも大事にしておられることを知り、それが人の心に訴える記事になっていくことを知ることができた。

その後、新聞記者の「七つ道具」として、常にカバンの中に入っているノートやカメラ、ICレコーダーなどを見せていただいたり、実際に持たせてもらったりした。子どもたちは、とても長い望遠レンズに驚き、重い鞆を持って取材に向かう記者さんの大変さに思い至ったようであった。



最後に、新聞記事を書く時に注意することとして「5W1H」や「見出しの付け方」を教わり、実際に記事を書いたり、見出しをつけたりした。「いつ」「どこで」ということはすぐに書けても、「どのように」など詳しく書こうとすると、なかなか書けない子もいて、新聞づくりの難しさを感じていたようだった。しかし、近くの子と情報交換をしたり教え合ったりして、何とかそれらしい記事を書くことができた。

結局、新型コロナウイルス拡散防止対策のため、実際に淡路人形浄瑠璃新聞を作ることはできなかったが、子どもたちは新聞づくりについてしっかりと学ぶことができた。

(5) 新聞記事紹介（朝の活動）

本年度は、学校の様子をたくさん新聞で

紹介していただいた。新聞に志筑小学校の記事が出たり、自分たちが調べている人形浄瑠璃の記事を見つけたりしたときには、それらを子どもたちに紹介して、教室の後ろに掲示するようにした。そうすることで、家で自分たちの学校が紹介されているのを見つくと、学校に持ってきてみんなに伝えるようになっていった。そこに対話が生まれ、互いに意見を述べ合うなどの姿も見られるようになった。

3. 成果と課題

(1) 成果

- 定期的に新聞を読むことで、社会で起きているさまざまな出来事に興味を持つようになり、わからないことをどんどん質問するようになった。
- 対話的な活動を通して、お互いの考えや感じ方がわかるようになり、人間関係の広がりを感じることができた。
- 記事の内容を自分事としてとらえ、どうしたら解決できるのか等、考えられるようになった。
- 比べ読みするまでには至らなかったが、教師自身が違う新聞の書き方について注目するようになり、子どもたちと共有することができた。

(2) 課題

- ・新聞を置く場所を、6年生に近いところと考えて廊下にしたが、高学年にしか見てもらえなかったため、20年度は図書室にコーナーを作るなどの工夫が必要だと感じた。
- ・もっと子どもたちに新聞を身近に感じる活動を取り入れることができればよかったのではないかと思った。

MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing, spanning the width of the page.

【 中 学 校 】

子どもたちの生活への新聞の取り入れ方

神戸市立山田中学校 校長 増田 和幸
教諭 荒木 浩輔

1. 実践の概要、研究テーマ、NIE学習計画案

NIE実践指定校2年目の本校は、実践校指定前から職員室前に新聞を閲覧できるスペースの設置、教諭個人の実践として、新聞を活用した授業の取り組みなどをしてきた。実践校1年目の18年度は、生徒がどれほど閲覧スペースを利用しているのか、生徒の新聞への興味関心の度合い、教員同士での授業実践の共有を始めた。

新聞に関して本校の3年生にアンケートを実施したところ、右のようになった。新聞を購入していない家庭も多く、校内の新聞コーナー利用率の低さも浮き彫りとなった。そもそも生徒の生活の中に新聞が入り込んでいないということがわかった。

昨年度から、実践指定校に認定されたことによって、新たに多くの新聞を購読することが可能となり、生徒一人一人の新聞活用を考えるきっかけとなった。

しかし、インターネットやテレビの影響もあり、世の中の大きなニュースは知っている生徒は多く、時事的内容を授業で扱っても反応は良いことは先に述べておく。

また、新聞の活用とは別に、次期学習指導要領では「主体的・対話的な深い学び」が提唱されている。私は社会科教諭として、どのように授業へこの理念を取り入れていくのかを考えていた。NIE実践指定校に認定されて2年目ということで、これについても新聞を活用して取り組む方向で考えた。

アンケート合計(全 107 人)	
新聞購読率	20人 (約18%)
・校内 新聞コーナー 利用率	36人(約34%)
・新聞を読んでいる生徒	41人(約38%)
ほぼ毎日	1%
週に2,3度	5%
週に1度	7%
月に1度	25%
・何を使って世の中の情報を得ているか(複数回答可)	
新聞	10人(9%)
テレビ	85人(79%)
ネットニュース	81人(76%)
その他 家族、友達、ラジオ等	



具体的な実践は「3. 実践の内容」に記すが、現在、世の中には多くの情報があふれており、スマートフォンや、パソコンで自由に情報を入手できる。しかし、そこに載っている情報は限定的であり、テレビのニュースやワイドショーでも、同じ内容の事件、事故などが取り上げられる。しかし、新聞には地域の情報、社説、テレビなどでは取り上げられない細かな情報まで余すことなく記されている。そこに注目した実践を行った。社会科では、自身の興味を持てる内容をピックアップし、意見を言葉でまとめる作業をした。また、興味のある記事だけで終わるのではなく、他のクラスメートが選んだ記事を回し読みし、仲間の意見・感想を共有するという課題に取り組んだ。

英語の授業では、英字新聞を用いて、英語の音声を流しながらのシャドーイングを行った。先ほども記したように、新聞は読まないまでも、テレビなどの影響で世情には詳しい生徒も多い。知っている内容を英語で聞くので、生徒にとっても取り組みやすかったようである。

全校朝集では、校長が時事的な内容を取り上げて紹介するというような場面も以前から度々あつ

た。1月17日の防災学習では阪神・淡路大震災で被災された方の冥福をお祈りし、2011年の東日本大震災は現在も含め、いまだに行方不明の方がいらっしゃる事、現地ではまだ復興が進んでいないこと、日本は災害国であることなどを新聞の記事を提示して紹介した。

教師の方から新聞に触れさせる機会、場面を意図的につくっていった2年間であった。

2. 新聞の置き場と整理の方法



先ほども記したように、本校には新聞を閲覧できるスペースが設置されている。上の写真のように、毎日管理員さんが新聞を入れ替え、閲覧しやすい状態となっている。昼休みなどの長めの休み時間に読む生徒もいる。読み終わったものは、写真の○で示した箇所にまとめて一定期間保管しておく。先ほど記した授業実践でも、新聞を購読している家庭は家から持参するように指示したが、購読していない生徒は、学校に保管された新聞を配布して授業に臨んだ。

3. 実践の内容

<授業で取り組んだプリント>

新聞記事から「自分の意見」を育てよう

()組 ()番 名前 ()

1 記事紹介

I

2 気になった理由・感想

II

神戸も何かが有名なものでアツク感じた
よいと思う。

3 私のメンバーからのコメント

III

<p style="text-align: center;">A さん</p> <p>神戸も何かが有名なものでアツク感じた よいと思う。</p>	<p style="text-align: center;">B さん</p> <p>ちさくけんを きにした方が 良いと思う。</p>
<p style="text-align: center;">C さん</p> <p>大げさなお祝いさうじ。</p>	<p style="text-align: center;">D さん</p>



新聞を活用した授業は2時間かけて行った。まず1時間目は、前半に各自が持ち寄った新聞記事を取り上げ、新聞記事の構成の仕方、見方、読み方など、知識的なことを中心に講義した。後半は、自身の興味ある（自分なりの意見を持つことができる）記事を探し出し、上記配布プリントのⅠの欄に添付。Ⅱの欄に自分なりの意見、その記事を選んだ理由、感想を書き込んだ。

まず生徒が戸惑ったのは、記事がどこからどこまでなのかがわからないということ。普段から読み慣れていないので、読み進めることに時間がかかった様子であった。生徒の取り組みを見ていて、1つ予想外であったことがある。上述のように、普段から新聞は読まないまでも、テレビやインターネットで世の中の大きな情報は知っている生徒も多い。なので、選ばれる記事もある程度偏るものかとも思われたが、実際に選ばれた記事は医学、政治、企業の新商品の紹介、スポーツ選手の影響による株価の動向に至るまで多岐にわたった。

自分で選んだ記事なので、意見、感想等も普段の感想文よりも多く、内容も濃いものであったと思う。以下、一部記事の感想、意見を紹介する。

生徒が選んだ記事 （抜粋）

<沖縄基地 辺野古移設問題 住民投票について>

自分が住んでいる県のことに重要なのに投票率が52%と低いのがとても気になった。投票している人の中でも「どちらでもない」という人がいて賛成か反対かを示した上で投票するべきだと思った。投票で自分の意見を示すことの大切さがあらためてわかる記事だと思う。

<ナイキの靴壊れ バスケ選手ケガ 株価急落 について>

選手のプレーをサポートする役割であるはずのシューズが壊れ、ケガをさせてしまったことに衝撃を受けました。普段、私もナイキのシューズをはいているので少し不安です。また、大手企業ということもあり、株価急落で約1621億円という数字から、この企業の影響力、注目度が高いんだと思いました。

<奨学金支払い義務「半額」 返還中の保証人に伝えず について>

奨学金には返還しなければならないものと、しなくても良いものの二つの種類があるが、返還型の奨学金の返済のためにアルバイトをしている学生も少なくない。この状態では本来すべきことである学業に対する認識が甘くなっている学生が多くなり、現在危惧されている大学の「職業訓練校化」が免れないことは自明の理である。本来、学生は将来の日本を支えるという点に置いて「公益」であり、これを政府が支えないということは将来の国の存亡に関わる重要なものであると考える。国・政府主導で返還の義務がない奨学金を受け取れる人の数を拡大し、貧困層でも優秀な人間の大学進学を支えるべきではないだろうか。

上記で紹介したように、記事の内容を踏まえ、自身の意見を盛り込んで書く生徒は多かった。1時間目はここまでで終了とした。

2時間目は、プリントを各班で回し読みし、クラスメートの記



事、意見を読んだうえでの自身の意見を新たに書き加えた。

(2枚目のⅢ参照) 授業で取り扱う教材は、普段であれば教師が提示したものとなるのが普通であるが、今回は同級生が選び、同級生が書いた意見、感想であるためか、共感できる部分や、興味をそそられる部分も多かった様子で、どのクラスも集中して取り組んでいた。最終的にプリントは手元に返却され、自分のプリントにクラスメートから多くの意見、感想が書かれているのを見て、嬉しそうな生徒の様子であった。

授業の最後にまとめとして、新聞の情報量の多さ(テレビやインターネットでは限られた情報に偏りやすい)や、多くの情報をインプットして初めて、意見としてアウトプットできるということ。勉強をするからこそ、自分なりの意見を述べるができるということ。この2時間で少なくとも五つの記事を読んだということは、普段あまり新聞を読んだことのない生徒にとっても新鮮だったようで、授業後生徒からは「(活字ばかりで)頭をたくさん使った。」「新聞にこんなにたくさんを書いていると知らなかった」というような声も聞かれた。

回し読みの様子



4. 成果と今後の課題

生徒が同一の教科書等で学習するのとは違い、新聞という、ツールは一緒だが中身が異なる教材を使っただけの授業は初めてだったように思う。上記にも述べたように、自分自身で選んだ記事だからこそ、自身の言葉で表出しやすかったのだと思う。クラスメートの言葉だからこそ、興味を持って読んだのだと思う。そういう意味で、子どもの言葉を表出させることには成功したと思う。しかし、社会に出て、意見を求められるのは必ずしも自分に興味のあるものとは限らない。どのような出来事にも自分自身の意見を述べられる社会人となってほしいと切に願う。

また、全員が上記で紹介したような「感想・意見」としてまとめられたかと言えばそうではない。「すごいと思った」「これはダメだと思う」など、抽象的な表現の生徒もいた。そういう意味で、今回のような授業を単なる「イベント的」なもので終わらせるのではなく、文章表現の学習を教えたり、良い感想を取り上げクラスで紹介したり、定期的に、何度も繰り返したりする必要性も感じた。そのためには、文章表現の技法を学ぶために国語科と連携をとるなど、他教科との連携の必要性も感じた。

また、新聞記事の時事ニュースを取り上げ、さまざまな立場に立って物事を考える道徳も実践した。具体的には、福岡県で行われたプリンセス駅伝での四つん這いで200mたすきをつないだニュースを題材に、選手、監督、観客、チームメートの立場になり、心情を考える授業であった。さまざまな立場にたって考えることは心の教育の面でも大変有意義なものであったと思う。

新聞はその日の出来事、情報をリアルタイムで発信しているものである。文部科学省から発行されている道徳教材も意義あるものだと思うが、生徒にとって見聞きしたことのあるニュースを題材に他人の心情をはかることも、リアルで当事者意識を持ちやすい教材であると思う。新聞記事=社会(社会科)ではなく、道徳や特別活動などでも積極的に取り上げていくことで、生徒にとっても新聞を身近なものとして感じることはできるのではないだろうか。

NIE実践校としては19年度で終了であるが、今後も新聞を通じて生徒の学力向上はもちろん、言葉での表現・育成に力を入れ、新聞が生徒の生活の一部となるように実践したいと思う。

新聞に親しみ、「学力」向上を目指す

尼崎市立大庄北中学校 校長 増田 裕一
主幹教諭 中嶋 勝

1、はじめに

実践指定を受けるにあたり「新聞に親しみ『学力』向上を目指す」という目標を立て、2年間の実践をさせていただきました。そして、NIEは、「学力」の向上をもたらすということを実感しています。18年度の報告書にも書いておりますが、本校生徒の新聞購読率は約30%であり、新聞を読んだことがないという生徒もたくさんいました。「新聞」は難しい読み物というイメージを持っている生徒がほとんどでしたので、まずは「新聞に親しむ」ことからのスタートでしたが、新聞を授業に取り入れていくと、いつの間にか生徒たちの語彙も増え、書くことへの苦手意識がなくなっていったようです。3年生になると、世界で起きていることや身近な問題にも強い関心を持ち、記事に対する意見の多様化や視野の広がりが見られました。新聞は「思考力・判断力・表現力」を育成する適切な教材であることを再認識しています。

また、高校入試で問われる「学力」も確実に培えるということは次の感想からも分かります。

【生徒感想】

①「入試に役立った」

小学校から国語が苦手で全然点数を取ることが出来ませんでした。新聞に触れ、内容を把握することが苦ではなくなりました。それから国語の点数が伸び、入試過去問題でも90点近く取れるようになりました。

②「小論文と面接にも」

NIEは小論文や面接に役立った。新聞の記事についての感想を書いたことが文章を書

く力を伸ばし、最近のニュースを詳しく知ること、「最近気になったニュースは何ですか」という質問に答えることができた。

③「問題が解けた」

国語の問題集を解くとき、前よりも、文章の内容を読み取り、文章を書く力がついているなと感じます。それはNIEでたくさん文章を書いたり、読んだりしてきたからです。NIEをしてきて良かったなと思いました。

2、今年度の実践内容

3年生で取り組んだ主な活動を三つ紹介します。

「新聞スピーチ」

新聞記事の一つを選び、記事の内容や調べてきたこと、記事に対する意見を2分程度でスピーチします。聞き手は、スピーチを評価とコメントを記入し、ベストスピーカーを選びます。

【生徒感想】

①中学1年生のときにしたスピーチは緊張していて、記事を朗読しているだけだったが回数を重ねるごとに緊張もしなくなり、スピーチの内容もみんなに聞かかけたり自分の考えを伝えることができるようになった。この3年間で自分は大きく成長できたと感じる。

②スピーチをしなくてはならないので、記事を深く読んだり、その後はどうなったのか、そこはどんな場所なのかを調べるきっかけになりました。記事について考え、その考えをどのような言葉にすればうまく伝わるのかを考えることが難しかったです。

「つぶやきNEWSッス」

自分が選んだ記事を班内(4人)で紹介し合うのですが、まわし読み新聞との違いは、お互

いの感想を「つぶやき」として模造紙に書き入れることです。書き入れられた「つぶやき」をもとに、さらに交流しあうので、いわゆる授業の「お客さん」が生まれず全員が参加できます。

(この授業の展開を最後のページに掲載しています)

【生徒感想】

①まわし読み新聞にはなかった、記事に対しての意見にさらに同意や反論を付け足すことができた。すると一つの疑問からさらにまた新しい疑問が増え、普段考えないいろんなことを班のみんなで話し会えた。

②班の人と意見を交換して、批判的な意見や肯定的な意見など多くの意見が飛び交うのでとても面白かった。また、その意見について「こ



こは違う」「それは共感できる」などの話し合いも面白かった。

「投書欄への投稿」

神戸新聞〈若者BOX席〉に2年間で30本を超える投書が掲載されました。朝日新聞にも3本掲載されました。掲載された投書は皆に紹介し、職員室前廊下に掲示しました。

【生徒感想】

①自分の考えが他人に伝わるようにするためにはどのようにしたらいいのかを考えて文章にするという、文章を構成する力が身についたと思う。

②どのように書いたら意見が伝わりやすいかを考えながら書くことができ、短い時間で文章を考える力もついた。新聞に自分の意見が載ったときはとても感動した。



3、成果と課題

【資料1】のアンケート結果から、生徒たちは「読み取る力、書く力、発表する力」が、NIEを通じて伸びたと実感し、特に「書く力」はほとんどの生徒がこれまで以上に伸びたと感じています。生徒の感想には具体的な成果を示すものがたくさん書かれていましたが、主なものを3つ紹介します。

【生徒感想】

①小学校の時は新聞なんて全くと言っていいほど読んだことがありませんでしたが、中学に入ってNIEの授業のおかげで新聞を読む機会が増えました。文字を早く読めるようになり、難しい漢字を新たに知り、読解力がついたのは今までNIEの授業を受けてきたからです。高校に進学しても新聞を読んでいきたいと思います。

②まずしっかりと自分の意見を持つようになりました。NIEの授業は自分の意見をしっかり持っていないと始まらないので良い経験になりました。そして、新聞だけでなくテレビのニュースなどにも関心を持つようになりました。世界で起こっている様々な問題、日本で起こっている問題、地方で起こっている問題などです。自分には関係ないと考えるのではなく、社会の一員として自分の意見を持ち、様々な人の意見を聞き、これから世界をより良くしていきたいです。

③NIEを3年間することで、文章を読み取る力、書く力、語彙力がとても向上したと感じた。文章を書いたりまとめたりすることが楽しいと感じるようになった。

今後の課題は、NIE活動を取り入れる時間をどのように確保するかです。授業時間内でNIEに取り組めることが一番望ましいのですが、教科の授業時間数も限られており、提供していただいた新聞を十分に活用できたとは言えません。課題解決のためには、年度当初に何を、どの学年で、どの時期に、どのように取り組んでいくかを計画することや、日常的に新聞に触れる手だけが必要だと考えます。

資料1

NIE（教育に新聞を）に関するアンケート（回答3年生126名）2020.2.下旬

①あなたのおうちは、新聞を取っていますか？

ア 取っている 35% イ 取っていない 65%

②最近（この1か月間）、家や学校で、どのくらい新聞を読んでいますか？

ア 毎日読む 3% イ ときどき読む 17%
ウ ほとんど読まない 37% エ 全く読まない 43%

③新聞記事やニュースなどについて、家族や友人や先生と話しますか？

ア よく話し合う 25% イ ときどき話し合う 42%
ウ あまり話さない 25% エ 話さない 8%

④NIE（新聞を活用する）授業は、興味関心が持てますか？

ア とても持てる 17% イ だいたい持てる 60%
ウ あまり持てない 20% エ 全く持てない 3%

⑤興味を持てたものは次のどれですか？興味を持った順番に記入してください。（3つまで）

ア 新聞スピーチ	35%	イ 新聞への投書	57%	ウ NIEタイム	26%
エ 新聞コラム写し	33%	オ 新聞記事紹介作り	25%	カ 広告の分析	36%
キ はがき新聞作成	33%	ク まわし読み新聞作り	56%		
ケ いっしょに読もう新聞コンクール	31%	コ つぶやきNEWSッス	38%		

⑥学習面で、これまでよりも力が伸びたと思うのは次のどれですか？伸びたと思うものから順番に記入してください。（3つまで）

ア 記事を読み取る力（読解力）	66%	イ 文章を書く力	88%
ウ 考えを発表する力	64%	エ 使える言葉（語彙）の増加	62%
オ 漢字の力	29%	カ 社会への関心	52%

資料2

NIE授業「つぶやきNEWSッス」の指導案の抜粋

1、本時の指導について

本時の言語活動「つぶやきNEWS」は、本年度宇都宮市で開催された、第24回NIE全国大会宇都宮大会において、白鷗大学渡辺裕子先生が実施された「『つぶやきNEWSッス』でアクティブラーニング」というワークショップである。この活動を行うのは次のような理由からである。

興味関心のある記事を選び、それを班員やクラスで紹介する「新聞スピーチ」という授業をおこなってきたが、その活動では、相手に分かりやすく説明するための準備をしたり、話し方を工夫するという力は身に付いていくものの、発せられたメッセージに対して受け答えしたり、他者の意見や疑問を自分の考えに取り入れて、思考を広げることはなかなか難しい。

2年生の時に実施した「まわし読み新聞」の授業では、「新聞スピーチ」から一歩進んで、選んだ記事を紹介し合い、話し合うことによって、相手の意見や感想を知ることはできた。しかし、相手の考えを知ってそれをさらに深め広げるにはどのようにすればいいのかという新たなもどかしさもあった。また、グループ内の話し合いでよくあることだが、発言する人とそうでない人、つまり大人しくて意見を言えないような生徒がいたのも事実である。

指導者がいくら「意見を出し合おう」と言っても、お客さんになってしまう生徒が生まれてしまう。意見を言いたくても言えないような生徒が、自分の思いを相手に伝えられるようになってほしい。そうなるための何かいい手立てはないかと考えていたところ、渡辺裕子先生のワークショップと出会った。

自分の感想を「つぶやき」として書く方法ならば、大人しくて発言を苦手とする生徒にとってもハードルは低くなる。そして、つぶやきは記録として残り、相手に届く。短いつぶやきが相手にとっては視野を広げるヒントになるかもしれない。「つぶやき」をもとに対話をすることで、今まで行ってきた取り組みとは違う、話し合いや考えの広がりや深まりが生まれることをこの活動に期待している。

2、指導計画（全7時間）

	活動及び教材	ねらい
1時	新聞を読み、記事を選ぶ。 語句等を調べる。	①新聞記事を読んで自分の意見や疑問を持つことができる。 ②新聞記事を説明するための準備ができる。
2時	説明できるようにメモを作り、練習する。	①新聞記事を分かりやすく説明するためにメモを書くことができる。 ②班で相談し班名を決める
3時	記事を紹介し合う	①新聞記事の内容や感想を伝え、考えを広げ深めることができる。
4時 5時	「情報社会を生きる」 ～メディア・リテラシー～ を読む（三省堂3年）	①メディアの利点と限界について理解できる。 ②メディア・リテラシーについて理解できる。 ③語句の効果的な使い方を捉えることができる。 ④文章の構成や表現の仕方から、筆者の工夫を読み取ることができる。
6時	「新聞記事を読み比べよう」 （三省堂3年）	①A新聞とB新聞の「見出し、写真、取り上げている事実、構成や文体」を読み比べ、その違いを捉えることができる。
7時	単元の振り返り	①単元を振り返り、メディア情報の特性やこれからどのように情報と付き合っていくかについて、自分の考えを書くことができる。

3、ねらい 新聞記事の内容や感想を「つぶやき」をもとに伝え合うことができる。

4、本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価・評価の方法
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 本時のねらいを知る 紹介するための準備をする 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事の内容や感想を伝え、考えを広げ深めることができる。 記事を班員に見せながら話すこと 	
展開 ① 8分	紹介タイム 分かりやすく、記事の内容や感想を伝えてみよう		
	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ記事を紹介する 記事について交流する 	<ul style="list-style-type: none"> 一つの記事に1分以内で説明する。 表情豊かに伝え、聞くように指示する 話し合いが進んでいない班にアドバイスをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手にわかりやすく説明したり、他の人の話を聞くことができる。（話す聞く）
展開 ② 9分	つぶやきタイム つぶやきを書いてみよう		
	<ul style="list-style-type: none"> 記事の横につぶやきを書いていく一つの記事に2分 他の班のつぶやきを読み、付け加える 	<p>注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> 使用するペンの色は固定 進行役が進める 自分の気持ちを書く。他の人にあわせなくても良い 時間があれば他の班の記事を読み付箋を貼る 「うろうろタイム」 	<ul style="list-style-type: none"> つぶやきを書くことができる。（書く）
展開 ③ 18分	わいわいタイム 「つぶやき」も参考にして交流してみよう		
	<ul style="list-style-type: none"> つぶやきを読んで交流しあう 12分間で4つの記事について交流する 	<ul style="list-style-type: none"> 「つぶやき」を読んだ後、改めて自分の記事や班員の記事について、考えたこと、気付いたことを交流しあう 一つの班を指名し、記事を紹介させる 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを説明したり、相手の考えに対して感想を述べるができる。（話す聞く）
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 本時の振り返り 記入3分 振り返りの交流 交流2分 	<ul style="list-style-type: none"> 「伝え合う」というテーマで、本時に学んだことや気づいたことを書く（ピンク付箋に） 班で交流し合う。 数名の振り返りを全体に発表する。 付箋は中央に貼る（名前を記入） 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の感想を記入し、交流することができる。（書く）（話す聞く）

NIEを通しての学び合いから世界を考える

(終戦から74年、阪神・淡路大震災25年)

西宮市立平木中学校 校長 池田 巨
主幹教諭 守屋 敬次郎

1、「NIE発表」

本校では、生徒たち、一人一人が「NIE新聞」を作成し発表している。その中で社会全体や、世界の動きを通し、社会科への関心、興味を高め、世界や日本社会全体の動きを考えるねらいがある。NIE新聞発表は、授業がある前に、各自が新聞やインターネットの記事の中で、興味を持ったものをスクラップし、重要な箇所に線を引き、発表ワークシートに貼り、感想を書く。

授業の最初に、各班の代表が、書画カメラを使って、発表をする。お互いに発表者の内容をメモにとる。毎回、それぞれ個性的な記事や、大きな動きの記事など、発表している。社会の動きや情勢などを知り、興味・関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分の意見やアイデアを発揮できる生徒を育成したい。



★NIE (Newspaper in Education)

【社会の授業で毎授業最初5分程度】

最近の新聞から、記事を切り取り、ノートに貼り、自分なりにまとめたものを発表。

→定期テストに時事問題として出題。

新聞をとっていない人は、テレビのニュースを聞いたり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

★NIEレポート(長期休業中の課題を確認)

- 1、所定のレポート用紙に新聞を、きれいに切り取り、貼る。
- 2、「日付」、記事の「まとめ」、自分の「感想(15文字以上)」をしっかりと書く。

発表を聞いて、各自レポート用紙に要点や感想をまとめる。

○「NIE発表について」

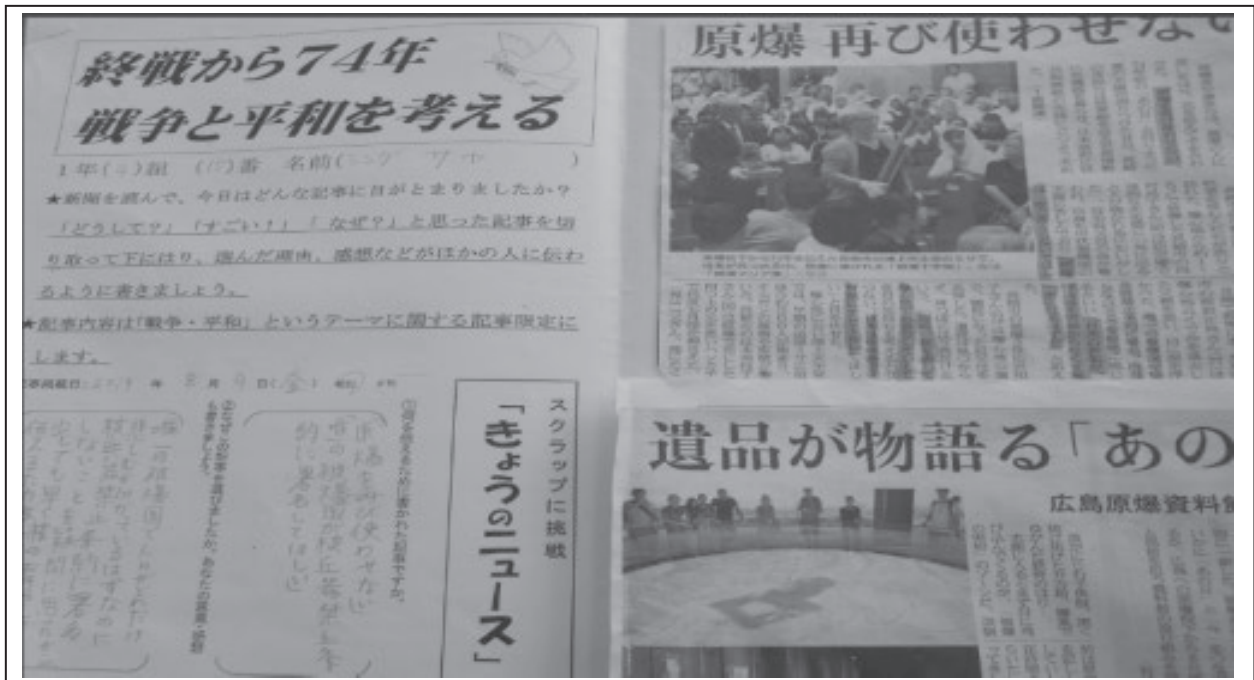
●『社会的思考力・表現力を伸ばす』

- ・正しい日本語を読む力。
- ・記事の内容を理解し(記事の起承転結)、まとめる力。
- ・自分の考えを表現する力。
- ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。

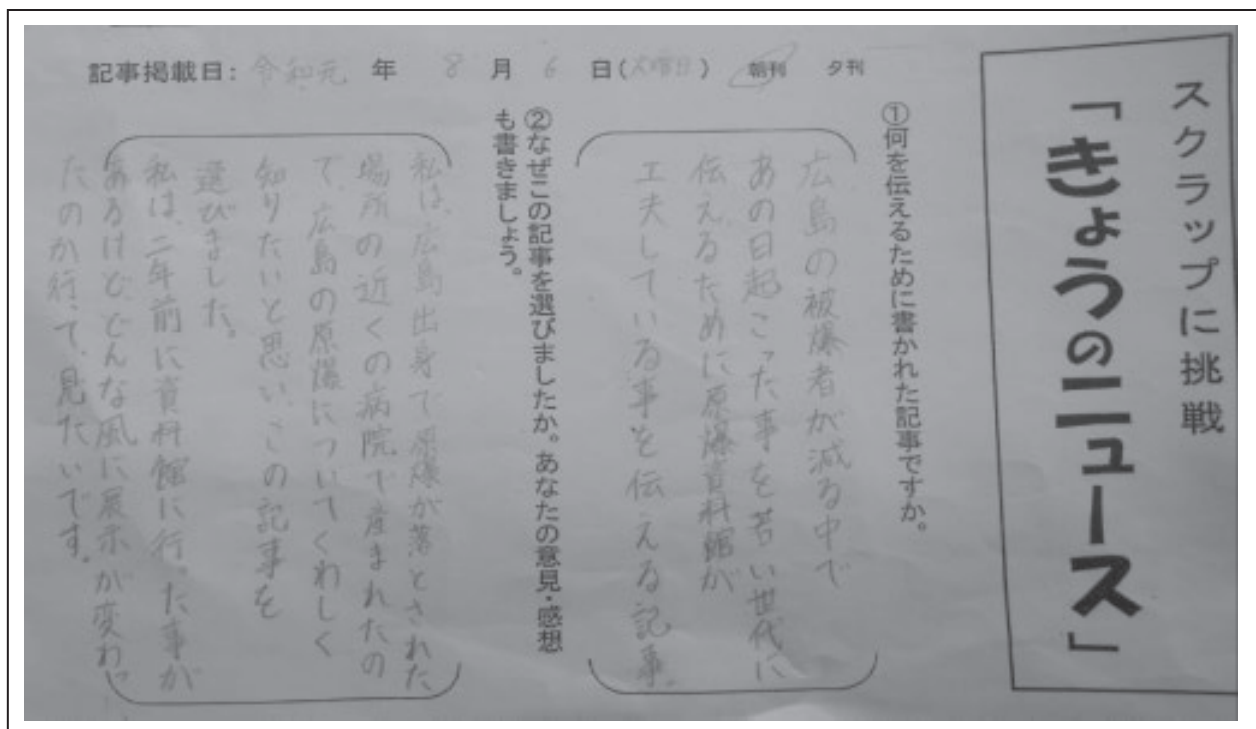
○「戦争と平和を考えるNIE新聞の作成」

●『スクラップに挑戦；きょうのニュース』

- ・記事の内容を理解し（記事の起承転結）、まとめる力。



- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。



職員室前での新聞置き場
(各紙別に)

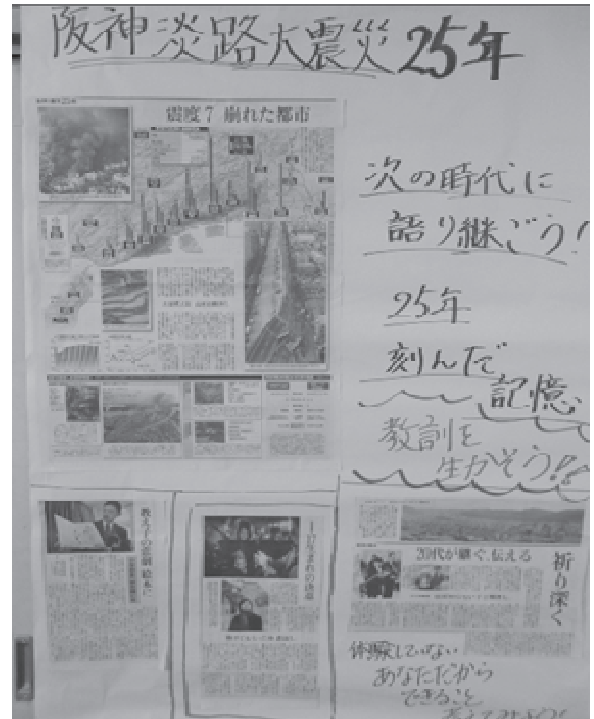


職員室前や廊下などに新聞記事を掲示し、常に閲覧できるような環境を作っている。

●教師作成の記事の掲示

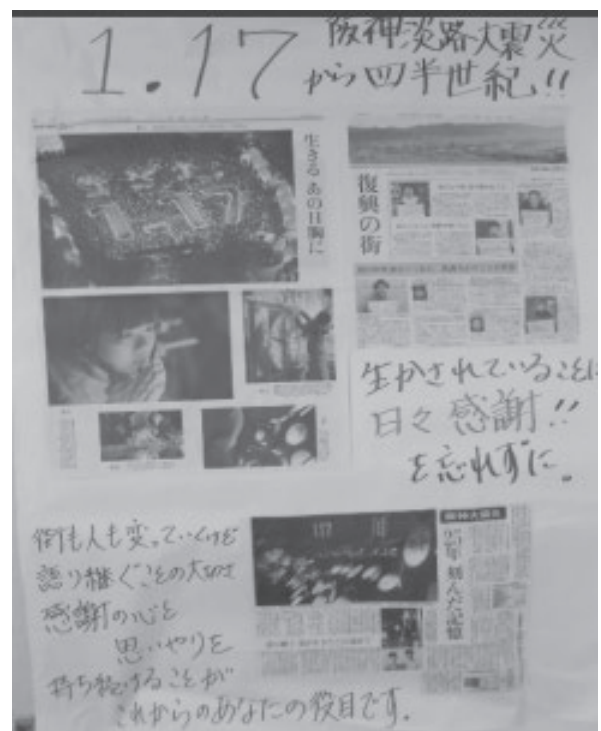
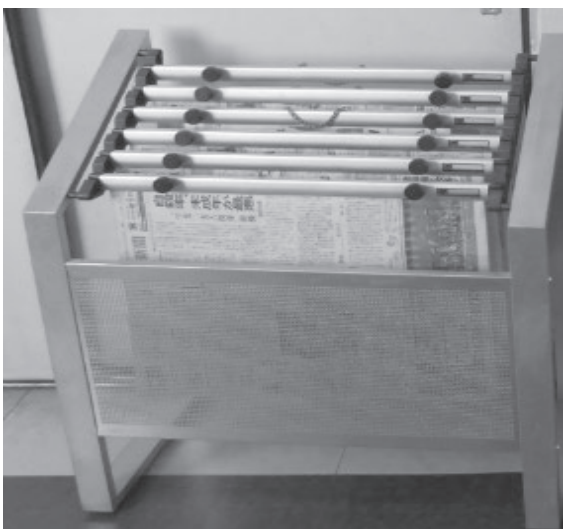
定期的に、教職員が新聞のスクラップ記事から、生徒たちが興味を持ちそうな内容のものをまとめている。

阪神・淡路大震災から四半世紀を迎え、震災特集をまとめた。



●新聞の読み比べ

新聞を置いたり、気になったニュースをテーマ別に集めたり、いつでも読めるようにしている。



成果と課題

本校においては、日常の社会科授業の中で「新聞スクラップ」の活動に取り組みさせた。

成果としては、生徒自身が自分の興味・関心で新聞記事を選び、切り抜き、授業ノートに貼り、その記事内容を要約したり、意見や感想を書いたりすることで、読む力や書く力をつけられるようになった。また、昨今、話題となっている生徒の活字離れの一助になったとも考えられる。

正解のない課題が待ち受けている現代社会を生きる子どもたちには、目の前のさまざまな課題に対して、「正しい考え方」や「正しい行動」を導き出す力が要求されている。その力をつけるためには、新聞がタイムリーかつ信憑性の高い情報に基づく必要がある。その意味において、新聞の持つ存在意義はこれまで以上に大きなものと言える。

短時間にもかかわらず学習効果が大きく、生徒が自ら学ぶ楽しさが実感でき、だれでも手軽に取り組めるNIEの取り組みは、今後も大いに活用されるべきである。

今後の課題として考えられることは、学校の学習は、単元ごとの一区切りであり、次の単元に移行していく傾向にある。そのため、学んだことを定着させたり発展させたりする機会に欠ける側面がある。現在学んでいる内容に直接関連した記事だけでなく、以前に学習した内容に関わる記事に生徒自身が気づき、過去の新聞等を活用しスクラップ等を行うことで、学習の連続性や一貫性が生まれ、その欠点を補うことができると考えられる。

また、授業時間数確保の問題である。授業内で新聞を活用するのが一番望ましいが、授業準備や授業時間数の関係で、提供していただいた新聞を十分に活用できたとは言いがたい。各教科と総合的な学習の時間のそれぞれの役割を明確にし、日常的で積極的に、生徒が新聞に触れる環境を作れるような工夫が必要である。

生徒と教師が社会のことについて話をするだ

けでなく、生徒はもちろんのこと、教師にも新聞と触れ合う機会を日頃から意図的・計画的に作っていくことが、NIEの実用性を高め、生徒たちをさらに成長させることにつながるとも考えられる。



新聞で学びを深めよう

猪名川町立中谷中学校 校長 石上 勝久
教諭 千葉 舞

1. はじめに

本校は阪神地区の北部に位置し、能勢電鉄の日生中央駅が校区内にある学校である。生徒数は145名であり、クラス数は各学年2クラス、特別支援学級が2クラスである。周囲は自然豊かな環境に恵まれ、校舎周辺ではシカ、ウサギ、キジ、イノシシといった野生動物を目にすることもある。

学校教育目標は、「豊かな心、高い学力、健やかな体～命と人権を大切にする生徒の育成～」である。今までにユニバーサルデザインを取り入れた教室の環境整備や授業における視覚支援などを行って、わかる授業づくりを推進してきた。

生徒は学校の規則を誠実に守り、高い学習意欲をもって生活を送っている。校門前を通る車に対して、生徒たちは深々と一礼をする伝統がある。訪問者からほめていただくことも多い。また、授業においては、授業者の話をしっかりと聞いて、授業内容を十分に理解しようとしている。その一方で、自分の周りのこと以外は関心が薄い生徒や、社会情勢に興味がない生徒が少なくない。新聞に触れることで、社会への関心を高めたり、物事を多角的に見たりする力を養いたい。

2. 新聞の置き場と整理の方法

本校では、1階廊下のスペースにNIE新聞コーナーを設置した。毎日、学校図書館司書が新聞記事等を精選し、ホワイトボードに掲示している。その日の新聞は長机に置き、生徒が読めるようにしている。1週間分の新

聞は新聞ラックに収納し、その月の新聞は、新聞社ごとに段ボールで仕分けし収納している。いつでも閲覧できるようにしている。それ以外の過去の新聞は、学校図書館に保管し調べ学習等で活用できるようにしている。



NIE 新聞コーナー



「新聞の読み方」やワークシートなどを掲示して
生徒の興味を引くよう工夫している

3. 取り組み

①NIE新聞コーナー

先述したNIE新聞コーナーは、いつでも誰でも新聞を見られるようにと設置したものである。毎日の記事のほかに、「新聞の読み方」の図や、NIEのワークシート、新聞に掲載されていたクイズなど、生徒の興味を引くものを学校図書館司書が工夫を凝らして掲示した。

初めのころは、ホワイトボードは目にするものの、新聞まで手に取る生徒はほとんどいなかった。しかし、日がたつにつれて昼休み等にその日の新聞をめくり記事について言葉を交わす姿が見られるようになった。

②学校長の講話

本校では、月に1度全校朝礼を行っている。その中で学校長が新聞記事を題材に講話をした。校長自らが実践している「ちよい読み」のすすめや、生徒が興味を持ちそうな記事を選び、それについて話をした。また、防災学習の際には、その日の新聞記事や当時の新聞記事から命の大切さや防災意識を高めることなどについて説いた。

③授業の導入

授業の導入として新聞を活用する教科があった。美術科では、美術に関する記事を美術室前に掲示し、生徒の興味関心を高めた。また、各教科でそれぞれの教科に関する記事を見つけた際にその話題に触れるようにした。

④修学旅行調べ学習

本校は、修学旅行で沖縄へ行く。事前学習として新聞を作成させている。

3年生は、それぞれが調べた項目について個人で新聞を作成した。新聞を見た人が読みたくなるようなレイアウトを考え、読みやすい新聞が多くあった。

2年生は、グループで壁新聞を作成した。個人で調べ学習をし、それを各グループでレイアウトを相談しながら作成した。パッと見た時に、読みたくなるような新聞にするためにはどんなレイアウトにすればよいか工夫していた。また、文字制限がある中、班員全員の調べたことをそのまま写すわけにはいかない。内容の取捨選択に悩んだり、文章の書き換えに苦労したりしている班もあった。



3年生



2年生

⑤青少年ニュース

技術科では、NIE実践指定校になる前から、定期的に「青少年ニュース」と題して青少年に関するニュースのレポートを作成させている。自分の気になった新聞記事を要約し、自分の考えを記述する。スポーツ・事件・世界の子どもたちなど、生徒が選ぶ記事のジャンルは多岐にわたる。1年次は要約が精一杯で自分の考えは少量である生徒が多いが、3年次には記事の内容を深く考え、自分の意見をしっかりと記述できるようになる生徒が多い。

⑥自分新聞

1年生国語科で、「自分新聞」を作成した。新聞の書き方を指導し、テーマは自分の好きなことや興味のあることなど書きやすいものにして夏休みの課題として出した。文章を書くのが苦手な生徒も、自分の好きなことについての記事なので筆が進みやすかったようである。文化祭で全員分展示されるので、来場者に読んでもらうためレイアウトに工夫を凝らした自分新聞が多くあった。

⑦新聞投稿

1、2年生国語科で「葛藤」というテーマで作文を書かせ、新聞に投稿した。新聞投稿は、NIE実践指定校になる前から取り組んでいるものである。ありがたいことに、毎年1名は新聞に投稿した作文を掲載していただいている。

⑧新聞の読み取り

2年生国語科で新聞の読み取りの練習をした。主に神戸新聞のHPからダウンロードしたワークシートを解いていった。神戸新聞のワークシートは記事のジャンルが多岐にわたり、単に読み取り問題としてだけでなく議論のテーマとしても取り扱うことができた。

ワークシートは、一問一答形式の問題と記述式の問題があり、一問一答形式の問題は記事を読めばすぐに見つかるものが多く、読み取りの苦手な生徒も答えられ自信を持って発表することができた。最初は嫌がっていたワークシートであるが、答えられる問題があることで意欲的に取り組む生徒が増えていった。

⑨新聞感想文

国語科で新聞記事に対する感想文を書かせた。教師が選んだ記事を読み、時事問題について感想を書かせることが多かったが、悩み相談の投稿に対してのアドバイスを書いたり、同年代の投稿についての自分の意見を書いたりすることとした。

感想文は、コピーして切り取り、模造紙に貼って学年の廊下に掲示した。掲示すると昼休みなどに立ち止まって読む生徒が多くおり、その時に議論を交わす姿が見られた。また、自分と違う意見に目を通し、「そんな考え方もあるんだ」と新たな発見をした生徒もいた。

○生徒の感想文

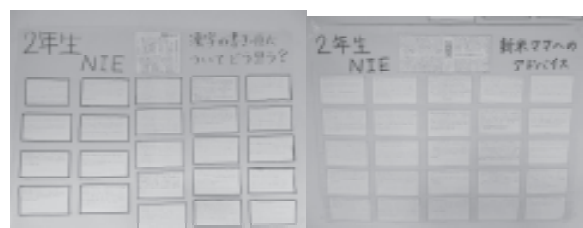
〈漢字の書き順についてどう思う？〉

- ・僕は書き順はある方がいいと思います。なぜなら、書き順を守ることで、丁寧に字が書けるようになったり、そもそも字が書きやすいと思うからです。ただ、パソコンなどを使う場合は書き順を必要としないので無理にすべての書き順を覚えなくてもいいと思います。

- ・漢字の書き順を守らなくても字がわかるし、これから先は文字を書くのではなく、文字を打つ時代が変わっていくと思うので、書き順は守らなくてもいいと思います。

〈新米ママへのアドバイス〉

- ・僕は同じような立場の友だちや知り合いがいたら相談すると思います。同じ立場の人と話し合うことで不安が解消されていくと思います。
- ・お母さんがそんなことを気にしていたら子どもがかわいそうです。小さいうちからいろいろなものを見て感じたりすることを自分だけの理由でうばってはいけないと思います。他人の目が気になっても子どものために勇気をもって外出した方がいいですよ。
- ・私も他人の目を気にする方かもしれないけれど、自分が思っているよりも他人は自分のことをそんなに見ていないのではないかと思います。「良い母」はなるのはすごく大変そうだと思いますが、「良い母」になろうとしている気持ちがあるというだけでも、私はすごいと思います。もっと自分に自信をもつと気持ちが変わるのではないかと思います。



感想文を模造紙に貼って掲示した

⑩ひょうご新聞感想文コンクール

2、3年生でひょうご新聞感想文コンクールに参加した。感想文は、1時間は記事探し、もう1時間で感想文を書き、授業内で完成させた。今年度は3年男子生徒がD部門入選を果たした。

授業では、記事を4月から9月までの新聞から選ばせた。記事は自由に選ばせたのだが、

大半が大きな事件やニュースを選んでしまい感想文も似たような内容のものが多かった。逆に地域の記事や、大々的に取り上げられていない記事を選んだ生徒は自分の考えを深く掘り下げて書いているものが多く、記事選びの際に少し制約をかけた方がよかったと感じた。

⑪教職員間の記事交流

新聞には、教育問題を取り上げた記事や、文科省の指針などの記事もある。生徒へ情報を発信するだけではなく、教職員研修のために新聞記事を活用する取り組みを行っている。

国の進める政策の動向や、各自治体が行っている教育の取り組みを目にすることで、自信の教育活動が啓発され職務への意識が高まった。

これは、実践指定校になる前から一人の教員の厚意で続いているものである。毎日、教育に関する記事や社会情勢についての記事を選んでくれている。その記事について教員同士で議論を交わすことは日常的にある。また、学級担任はその記事の情報をもとにクラスで話をすることも多々ある。

⑫記者派遣事業

毎日新聞阪神支局・井上元宏記者に来ていただき、「新聞記者をやってきて」というテーマで講演していただいた。



日韓ワールドカップの話や東日本大震災の話から、多角的に物事を見る大切さ・相手に寄り添うということはどういうことなのかを学ばせていただいた。

○生徒の感想

・ワールドカップの話ではそれぞれの場所に良い点があり、私は「写真を撮る」に手を挙げたのですが、繁華街の取材などでも違

った視点から見れて新しいなと思いました。

- ・さまざまな視点から一つのものごとを見つけることの大切さが伝わってきました。記者という仕事は、実際に起こった事件などを多くの人に伝えるという重要な職業でとても大切な役割を担っていることがわかりました。
- ・相手のことをよく知ろうとし、伝えたいことは何かを考えることが大切だと感じました。
- ・新聞記者にとって大切なことは、僕たちの日常にも役に立つと思いました。相手のことをまず先に調べ、その上で話を聴くのが大事だし、会って話したり声を実際に聞くのが大切だということ学びました。

4. 成果と今後の課題

本年度の取り組みで、新聞への抵抗感が少なくなった生徒が増えたように感じる。取り組み当初は「新聞」と聞いただけでも嫌がる生徒がいた。だが、実際に読んでみると身近なテーマや新たな発見のできる記事があることを知り、楽しみを覚えた生徒が出てきた。感想文を書かせると、自分の考えを書くに留まっていた生徒が3学期には「この立場の人はこう思うだろう。でもこの立場だったらこう思うのではないか。」などと多角的に考えることができるようになっていた。実際に起きたことや、記者や投稿者の生の声を読むことで、物事を多角的に考えたり自分に置き換えて考えたりすることができたのではないかと思う。しかし、新聞を十分に活用して学びを深められたかというとまだまだ課題がある。20年度はさらに生徒が新聞に触れる機会を作れるようにしていきたい。

新聞を活用した「調べる力」の育成

姫路市立豊富中学校 校長 山下 雅道
教諭 井上 佳尚

1. はじめに

本校では、20年4月開校する～蔭山の里学院～姫路市立豊富小中学校の開校に向けた三本柱の一つとして「調べる力」の向上・育成を掲げている。その中の取り組みとしてNIEの実践を進めることとした。

本校も各生徒の家庭での新聞購読率は、あまり高いものとはいえず、そもそも新聞を読まない生徒や、身近に新聞が存在しないといった生徒が多い。

また、18年度、2年生で行った「震災調べ」における調べ学習で、新聞各社の阪神・淡路大震災報道縮刷版や、集成版を活用した。その際に見出しから「調べたいこと」を探し出す力や、文章中から自ら「調べていること」を読み取る力が足りないという認識に至った。たくさんの活字になった情報の中から、自らが必要とする情報の取捨選択をすることが、生徒の今後の進路や、調べる力、ひいては生きる力となると感じるに至ったのである。

2. 実践の概要

本校でのNIEの実践は、教科や学年を限定せず、学校全体で取り組もうという姿勢で行うこととした。本報告では、主に学校図書館と連携した、調べ学習や各教科の授業、特別の教科道徳などの実践例を紹介したい。

【1】3年生 国語科

「つぶやきNews ッス」feat. SDGs

本校では以前より消費者教育の研究推進指

定を受けており、各教科において消費者教育の視点を踏まえた授業を行ってきた。その延長線上で、SDGsの視点を生徒たちにも持たせようという取り組みを行うこととした。

授業の展開は以下の図表の通りである。

1. SDGsを知る

新聞の切り抜きにてSDGsの概要や、目標を大まかにとらえる。



2. SDGsを捉える

新聞の切り抜きを読み、自分なりに17のターゲットを5分割する。(People, Planet, Prosperity, Peace, Partnershipの五つの観点に分ける)



3. 五つのPに当てはまる記事を探す

新聞各紙をそれぞれ読み、自らが選んだ観
点の記事を探し、自分なりの考えを持つ。



4. 「つぶやきNews ッス」の手法を用いて発表し、模造紙に貼り付けて考えを共有する。(共有・発表)

以上の流れで4時間の授業を展開した。

生徒の反応としては、「わからないこと」を話し合い活動の中で深められたり、目的を持って新聞を読むことによって「記事の要旨をと

らえるコツがわかってきた」などといった反応が見られた。

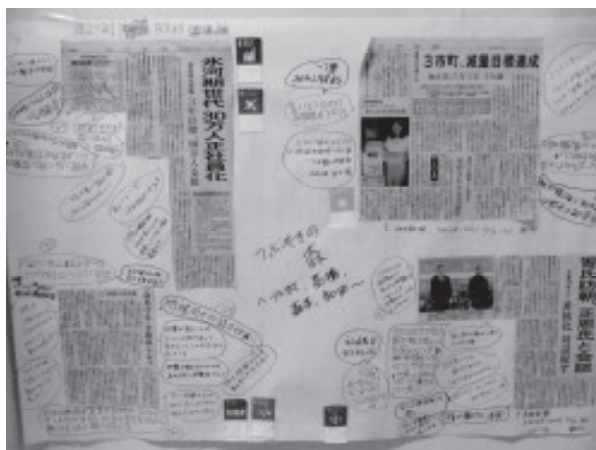
☆3年生・取り組みの様子



各自で概要を新聞切り抜きで捉える



記事を切り抜き、模造紙に貼りつける



班内で発表し、SDGsの観点分けをする

【2】2年生 総合的な学習の時間 「震災調べ、ポスターセッション」

18年度は、それぞれ選ばれたテーマに沿って国語科の中で「パネルトーク」をするため

に調べ学習を行った。その際に新聞縮刷版や、当時の新聞の複写等を資料として活用した。今年度は、新たな取り組みとして震災調べを各自で行い、「ポスターセッション」を各班の活動として行うものとした。

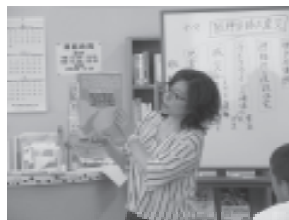
その前段階として、神戸新聞NIX推進部の三好正文アドバイザーに「平成に発生した災害」と題し講演していただいた。阪神・淡路大震災に限らず、平成期に発生した大きな災害を振り返ることにより、減災の意識や復興に向けての努力、震災がもたらした都市災害への心構えなどを再確認するに至った。

講演の後、図書室やPC室にて班別でテーマを決め、調べ学習を行ったのだが、18年度も課題となった資料の活用において、本年度も頭を悩ませた。調べるテーマがわかっていたとしても、普段からGoogle等の検索エンジンでAND・OR検索ばかりを利用しているため、どうしてもテーマを深めることや、縮刷版の新聞から見出しを見て自らが必要とする情報を引き出すことに苦手意識を持っていた。

そういった中で、本校図書室の学校司書により、新聞の読み方や、縮刷版の使い方、新聞集成版の資料としての扱い方など、調べ学習の進め方や深め方をガイダンスとして行った。その中で、樹形図であったり、フローチャートを作成することにより、問題の可視化であったり、思考の深化の方法を学習したりした。



新聞縮刷版や集成版を説明する学校司書。同時に、新聞の切り抜き方も教授する。



新聞縮刷を活用し、調べ学習を進める

【3】3年生 特別の教科 道徳

本年度より教科化された道徳の授業でも新聞の切り抜きを活用した授業を展開した。主に本年度は3年生が主体となって活用したが、来年度以降は学年関係なく、さまざまな記事を道徳の授業にて活用しようという声がある。本年度活用した新聞記事は以下の通りである。

- ① 平成30年11月13日付 産経新聞 夕刊
・泉州弁「だんじり」が守った
「郷土を愛する態度」として活用。
- ② 令和元年11月6日付 朝日新聞 朝刊
・「法王訪問で原爆資料館入れない」
投書きっかけで招待状
「相互理解・寛容」として活用



道徳にて新聞の切り抜きを読む生徒

- ③ 平成28年2月15日付 朝日新聞朝刊
令和元年 6月29日付 新聞各社 朝刊
・ハンセン病隔離訴訟 熊本地裁判決
「公正・公平・社会正義」として活用

道徳担当者の声としては、新聞を道徳の授業にて活用することは、新しい社会問題を生徒個人の問題としてとらえる機会として有用である。また、一つの事象に対して、各社さまざまな視点から取材を行っており、切り口が違うため、多角的な視点が養える。そのために、モラルジレンマ教材であったり、人権意識の高揚であったり、社会正義を考えさせ

るためには今後も新聞を活用した道徳の授業を考えていかなければならないと感じた。

【4】1年生 「新聞を読み比べよう」

1年生では、読解の教材として新聞を活用した。ただひたすらに一つの記事を読むのではなく、新聞各社、同一の事象を扱った記事を比較し、表現の違いを見つけるための教材として活用した。



発表のために話し合う

話し合い活動の中で、新聞記事を読み比べる。同じ内容を扱っていたとしても、表現の仕方が異なっていることや、取り上げ方が違うことに気づくことができた。

また、地方紙と全国紙の記事の捉え方に関して触れた生徒もいた。例を挙げると関西国際空港の記事を3紙で読み比べた班の生徒が、地方紙である「神戸新聞」では災害、特に地震災害の切り口で書かれていることに気づき、また、全国紙である「朝日新聞」では記事の取り上げ方が小さく、「産経新聞」ではアジア諸国などからのインバウンド需要に対して前向きな姿勢の記事であることに気づき、それぞれを比較して発表していた。

この取り組みにおいても、わからない言葉



各紙違いを発表する生徒

や、表現としてとらえにくい部分を、班活動の話し合いで共有し、「わからない」ままで終わらせることがない状態を作り出すことができた。

以上のことから、新聞を数名で読み比べるという取

り組みは、教え合い活動や、話し合い活動において、非常に有効な学習の手段として活用できる。また、わからない言葉を共有し、数名でそのわからないことを調べたうえで情報を共有できるという点において、基礎的な読解力の醸成に役立つと考えられる。

【5】図書室 新聞コーナーの設置

N I Eに取り組むにあたって、各教員がそれぞれに教室にて「新聞を活用する」と言う



のも大切である。しかし、本校では指針を指し示す旗艦としての場所を図書室として設定し、何時でも誰でもどんな時でも、新聞を読めるようにした。

昼休みや放課後に図書室をのぞくと、新聞を広げて読んでいる生徒がいる。18年度より、新聞配送所からの支援を受け、各教室にも新聞が配布されている。しかし、学校に届く全ての新聞が図書室にアーカイブされているので、各社読み比べるような生徒や、自身が気に入っている新聞社の紙面を広げている場面が見られる。

また、月ごとに保管し、いつでも引き出して読めるため、社会や理科の授業で話題になった過去の記事を読みに来る生徒や、教科に限らず、学活や授業で紹介した記事を確認しにくる教員が見られた。また、学級通信などで紹介された記事を探しに来る生徒もいた。



前述の道徳の時間で活用した記事も同様で、本校の図書室にアーカイブされていた新聞紙面を活用した。なお、図書室での保管は13カ月をめどに考えている。

そして、独自に予算を組み、本校で購読し

ている中高生新聞を毎週楽しみにしている生徒もいる。発行された翌日などは、中高生新聞目当ての生徒が図書室に来館する姿も見られた。



3. おわりに

【成果】

本年度、N I Eに取り組んで感じたことは、従来通りの情報メディアを活用した授業を、新聞をより濃密に活用することで、時代や世の中の流れを「自分事」として生徒たちが捉える姿を見ることができた、ということである。

また、紙面を共有することで、生徒間での理解を深めることも可能になった。そして、2次的な成果として、紙面そのものの読解よりも基本的な言語事項の理解が深まったようである。

【課題】

一方で、取り組み方を柔軟にとらえられる生徒や保護者、教員もいるが、その逆もしかりである。新聞を読むことが直接的に教科の学習につながるとは考えていない生徒や保護者、教員にどう啓蒙していくか、が今後の課題である。

また、本年度やり残したこととして、投書に挑戦させてみたいとも考えている。表現活動としての「話す」は、今後も研究を続けることとし、「書く」観点でも実践を行いたい。

最後に、20年度以降の義務教育学校化により、新聞の扱い方も変わってくるのが想像できる。情報のホットアーカイブとしての新聞の活用なのか、情報の泉としての新聞活用なのかを目的意識を持ったうえで今後も取り組み、実践する必要がある。

MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing, spanning the width of the page.

【 高 等 学 校 】

新聞を通して社会への関心を高め、社会の一員としての自覚を高める

兵庫県立武庫荘総合高等学校 校長 宗石 理
教諭 山村 康彦

1. はじめに

本校は2018年度、実践校指定をいただき、「まなび支援部」が窓口となってNIEの取り組みを始めた。本校独自の部である「まなび支援部」は、生徒の学ぶ意欲を刺激することを目標に、全校生に対する働きかけをしている。新聞を使った活動は、部が立ち上がった10年前から継続して行ってきた。18年度、介護福祉士の国家資格取得をめざす「福祉探求科」が開設されたこともあり、あらためて新聞を使った活動を部の重点目標に据えて取り組んできた。

本校は教育方針の一つに、「自分を知り、社会を知り、自分と社会をつなぐ」を掲げてきた。新聞はそのためのツールとしては最適だと言えるが、19年末のアンケートでは、購読している家庭は35%であった。

2. 新聞の置き場と整理の方法



NIEで提供していただいた3紙のうち2紙はまなび支援室前の廊下に5日分、1紙は図書室前に約1カ月分、それぞれ閲覧コーナーを設けて生徒が自由に読めるようにし、特

に生徒に読んで欲しい特集記事などはまなび支援室前廊下の長机に貼り、通りすがりに目を引くようにした。さらに、本校で購入している2紙は職員用として職員室と事務室に置いた。それら全5紙は最終的にまなび支援室内の整理棚に各紙発行日順に整理し、それらも職員・生徒が自由に閲覧できるようにした。

3. 実践の内容

(1) 朝のSHRで短い記事を継続して読む～「Manabee morning(マabeeモーニング)」～

全校生が取り組んでいる「Manabee morning」は、週2回の実施をめどに、入学後間もなくから3年次の卒業考査直前まで継続した。A5サイズの用紙におさまる短い記事を載せ、3年間で約130号を発行している。記事の内容は、新聞に慣れて親しみを持つような記事から社会の動きや課題に気付けるような記事まで、幅広く選定しており、各年次団の教員にも年に一つ以上の記事を選んでもらっている。

新聞には、進路決定の参考になる、自分を肯定する、人生の先輩たちの生き方に触れる等、授業ではなかなか取り上げられない内容をどんどん取り入れられる良さがあり、担任と生徒とのコミュニケーションの一助になることも期待している。

(2) 年3回、新聞課題に取り組む

① ゴールデンウィーク課題

関心のある新聞記事を切り抜いて課題用紙に貼り、感想を書いて提出。

②夏休み課題

「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募。

③冬休み課題

用意された記事の中から一つ選び、「選んだ理由や、気になったこと疑問に思ったことを書く」と、「選んだ記事に書かれている、訴えや疑問、新たな視点などの問いかけをどう感じ、どうすればいいと考えるか」に答える。

三度の課題はそれぞれに形態を変えている。初回となるゴールデンウィーク課題は、まずは新聞を手にとること、興味を持って読むことを目標にしている。夏休み課題はコンクールへの応募である。この課題は身近な誰かから意見を聞いてまとめなければならず、コミュニケーションとその後の本人の思考の深化が問われるというものである。他者の意見に揺さぶられた思いを素直に表現できる生徒と、伝聞調で終わってしまう生徒との差は大きい。全校生から集めて応募している。昨年度は2年次生から1名、奨励賞受賞者が出た。また、昨年度と今年度に学校奨励賞もいただくことができた。

冬休み課題はある程度のボリュームで、なにがしかの問いかけをする記事をこちらで選んでいる。1年の最後の課題で、生徒が成長してきたということもあるが、やはり、記事を選ぶことが説得力のある作品を書くためには重要であると認識させられた。今後、生徒の記事選びについてなにがしかの働きかけを考えたい。

(3) LHRで「回し読み新聞」に挑戦

昨年度は1年次で、今年度は3年次でそれぞれLHR時に全クラスが「回し読み新聞」に取り組んだ。

短い時間の中ではあったが、生徒たちは新聞に興味を持ち、クラスメイトが選んだ記事のプレゼンに聞き入り、楽しんで新聞を作り上げたようだった。作った新聞の中から、クラス代表作一つを廊下に掲示した。感想をいくつか紹介する。

- ・友達が興味を持った新聞を見て、「こういうことに興味があるんだ」というような発見がありました。
- ・自分の中で思っていることはたくさんあるのに、一言コメントにしようとするとても難しかったです。
- ・いつもなら飛ばしてしまうような記事も、みんなの紹介で興味がわいた。

(4) 「MCニュース」(壁新聞)の作成

本校では1年次生に新聞委員を置いている。昨年度と今年度は新聞委員による壁新聞作りに取り組んだ。タイトルは新聞委員会で話し合って「MCニュース」に決まった(MCは、Mukonosu Comprehensiveの略称)。昨年度は各クラスの新聞委員がみんなに読んで欲しい記事を選んで作成したが、今年度はクラスごとにSDGs(持続可能な開発目標)の17のテーマからひとつを選び、「SDGs壁新聞」とした。

まず、テーマに沿った記事をたくさん切り抜き、コメントをつける。この時、選んだ人だけでなく、ほかの2人もコメントすることで、記事の内容を共有するようにした。次に選んだ記事から壁新聞に載せるものを選び、3人で協力してコメントを考えて作成していった。みんなコメントを書いたので、そのことが大変だったと答えた生徒もいたが、全体としては好評であり、新聞を読む機会を持ちたいと答えた生徒も多かった。最初は新聞

委員の役割として受動的に取り組み始めたものの、書き上げていくうちに「時間を忘れるくらい真剣に取り組めた」という感想もあり、1人だけで読むよりも、友人らと話しながらか読むほうが、理解も深まり、興味を持って取り組んでいるように感じた。

出来上がった壁新聞は中央階段に掲示したが、一つ一つは限られた内容であっても、全体として見渡すと八つのテーマを取り上げているため読み応えがあり、教師間でも高評価であった。



(5) 記者派遣事業

18年度は、読売新聞大阪本社より宣伝広報部の西村泰輔さんに来ていただき、「伝わる文章とは～新聞に学ぶ」と題した講演をしていただいた。対象は2年次生全員。「総合的な学習の時間」で取り組んでいる課題研究のまとめの時期が近づく中、論文を書く参考にとお願いした。新聞が文字だけだったらという架空の紙面から、見出しが付き、写真が入っていく工程がスクリーンに映し出され、見やすく、わかりやすくなっていく紙面に皆が驚いた。また、「現在・過去・未来」の時系列を意識して書くというアドバイスに生徒たちはうなずきながら聞き入った。

19年度は、朝日新聞阪神支局長の西見誠一

さんに、「SNSといじめ」と題して、いじめに関する朝日新聞の特集記事とSNS上で起きやすいトラブルについて講演をしていただいた。「親しくしている友達だからこそ、言葉に気をつけよう」「いじめをしないのはもちろん、傍観者にもならないようにしよう」などといった生徒の感想が聞かれた。中学時代にいじめられたり、いじめを目撃した者もいるようで、特に1年次生に対する反響が大きかった。

(6) 「国語表現」(2、3年次)の取り組み

2、3年次の選択授業である「国語表現」では、新聞記事を読み関心を持った記事に関して投書をするという単元を4時間で行った。

1時間目は、実際の新聞投書を読み、どのような特徴があり、どのような展開でかかれているかを読み取った。2時間目は自分なりのテーマを決め、下書きを書いた。3時間目は生徒相互で読みあい、批評し、推敲した。4時間目は清書し、新聞社にメールで投書した。

「国語表現」選択者約100名が投書し、神戸の小学校で起きた教師間いじめを取り上げた『「いじめは悪い」忘れた先生たち』をはじめ、『落書きと芸術の違い理解を』、『ポイント還元策不平等さを懸念』、『ブラック多く社会に出るの怖い』、『趣味を見つけてスマホ依存脱却』、『空港の保安検査しっかりと』の計六つの投書が新聞各紙に掲載された。

(7) 福祉探求科での活動

本校には18年度、新たに福祉探求科1クラスが開設された。介護福祉士をめざす生徒たちと、「現代社会」の時間を使って、NIEに取り組んだ。

家で新聞をとっているという生徒は4割を切っている。そこでまず、6月に新聞について学んだ。クラス全員に、朝刊・夕刊1セットずつ配付し、まずはページをめくってどんなことが書いてあるかを確認。次に、見出し比べ。ある日付の朝刊を持っている生徒を前に並ばせ、トップ記事の見出しを比べた。ちょうど米朝会談の記事が出た時で、その日使った6紙がほぼ同じ見出しであることに感心していた。特に大きな事件がなかった別の日の一面では、同じニュースがトップになったり、2番手・3番手になったりと新聞社ごとの違いが分かるもので、生徒からは、「社によってニュースの重要度が違うことが分かった」「見出しの字の大きさや写真の大きさが違い、そんなことから伝えたい気持ちが分かった」という感想が出た。

後期に入ると、授業で福祉関係の新聞記事を紹介し、生徒たちがどう感じたかをあらかじめ用意したいくつかのコメント欄にシールを貼って表示するという取り組みを始めた。「ニュースで考える現代社会」と題し、教室の後ろに模造紙で掲示板を作った。高齢者をめぐる社会の動きを感じられるような記事を紹介しつつ、生徒たちが課題を考えられるような声掛けをしていった。反応が大きかった記事のひとつ、「認知症とお金1 預金を引き出せない」では、認知症の親の預金を子どもが代理で引き出すことができないというルールに驚き、福祉の授業で学んだ成年後見制度の理解の一助にもなったようである。

本年度は、朝日新聞派遣事業の「VR体験」を実施した。「認知症になると空間把握能力が落ちる」「幻視が見えることもある」と説明を受けた後、生徒たちはVR機器を顔に着けて見え方を体験。階段から落ちそうになったり、自動車

の運転中に視界がぼやけたりすることの怖さをリアルに体験した。



4. 成果と今後の課題

2年間の実践を終えるに当たり、総合学科各年次2クラスずつ計236名を対象にアンケートを実施した。その中で、「Manabee Morning、新聞課題、回し読み新聞、壁新聞等に興味・関心が持てるか」という問いに対して「全く無い」が37%であり、残りの63%の生徒たちが何らかの興味・関心を持ってくれたことに安堵した。また、「NIEの活動で伸びた学習面での力」(複数回答)に対してはちょうど50%の生徒が「社会への関心」と答えてくれた。本校でのこの実践の目標が「新聞を通して社会への関心を高め、社会の一員としての自覚を高める」であったことを鑑みると、半数の生徒が社会への関心を高めてくれたことで目標はほぼ達成できたものと自負している。また、「関心を持つようになった新聞記事」も、事件・事故、1面記事、スポーツ、のみならず、教育・学校、政治・経済、人権・福祉、海外にまで広がったようである。

しかし、冒頭にも書いたように新聞を購読している家庭は35%であり、はたして今後の生活の中で「新聞」に親しむ機会が増えるのだろうかという点は疑問が残る。今年度でNIE実践は終了するが、継続できる取り組みは今後も続けて行きたい。

新聞で「他人事」から「自分事」へ

兵庫県立津名高等学校 校長 魚井 和彦
教諭 大石 昇平

1. 本校の概要

本校は、今年、創立 100 周年を迎える普通科高校である。2019 年度は 1・2 年生 4 クラス、3 年生 5 クラスの構成となっており、そのうち各学年ともに総合科学コースが 1 クラス設置されている。生徒の進路希望は進学から就職まで多様であるが、「生徒の伸び率 No. 1」をスローガンに掲げ、個々の進路実現を目指した手厚い指導を心がけている。

2. 実践の概要

津名高校の取り組みとしては、新聞を教育活動に取り入れることで、社会への関心を高め、主体的に社会に関わる生徒を育成すべく、次のような取り組みを実施した。①学年フロアでの新聞閲覧場所設置、②週に 1 度の「朝のかわら版タイム」、③2 年生の総合的な学習の時間「REBORN PROJECT」（後述）での新聞記事の活用の 3 点である。

1 点目の学年フロアでの閲覧については、1 学期には 2 年生フロア、2 学期には 3 年生フロア、3 学期には 1 年生フロアへと新聞の閲覧ラックを移動させていった。

2 点目には、毎日 1 時間目が始まる前に行っている「朝の 10 分間読書」の時間に、週に一度「朝のかわら版タイム」と題して新聞記事を全校生徒で読む時間を設定した。

そして、3 点目に、本校では 2017 年度から 2 年生文系生徒の「総合的な学習の時間」に「REBORN PROJECT」と称した地域課題解決学習を設定している。この取り組みの中で、地域課題を探す際に、新聞記事から情報を集める時間を設定した。

これらの取り組みを計画した背景には、生徒たちが新聞を読むことで、社会への関心を高め、積極的に社会とつながりを持とうとしてもらいたいという期待があった。本校生徒の実態としては、新聞を手取る生徒が非常に少ない。そのような現状に対し、新聞に触れ、社会のことを知り、地域や社会の課題に主体的に取り組んでいけるような生徒の育成を目指し、計画を立てた。

3. 提供を受けた新聞と閲覧スペース

本校では、2019 年 4 月から 2020 年 2 月まで朝日・神戸・産経・日経・毎日・読売の 6 紙を提供していただき、生徒に閲覧できるように設置した。その際、学年のニーズに応じて、学期ごとに閲覧ラックを移動していった。1 学期には 2 年生が総合的な学習の時間で活用しやすいように、2 学期には 3 年生が進学・就職試験等での時事ニュースに対応できるように、3 学期には 1 年生が 2 年生へと進級した際に総合的な学習の時間で活用できるように、各学年へ配慮して設置した。

4. N I E実践活動内容

具体的なN I Eの活動として、ここでは、全校生徒による「朝のかわら版タイム」と2年生文系生徒による総合的な学習の時間「REBORN PROJECT」での新聞の活用について報告させていただく。

(1) 朝のかわら版タイム

本校では、予てから1時間目が始まる前の10分間を利用した、「朝の10分間読書」という取り組みを行ってきた。このうちの週1日を利用して、全校生で新聞記事を読む取り組みを行った。3名のN I E担当の教員が生徒に読ませたい記事を事前に選んでおき、その候補の中から話し合っ1つを選び、プリントで配布する形式である。新聞記事のテーマは社会問題から人生論まで幅広いテーマを扱い、生徒が関心を持ちやすく、社会とのかかわりを意識しやすいようなテーマを選ぶように心がけた。そのプリントには、2題程度の「MISSION」と題した問題を付けた。このMISSIONは、記事を読み解けているか確認できるクイズ形式の問いと、記事にまつわる自分の感想や考えなどを問うものも設定した。模範解答は終礼のショートホームルームで担任が発表すると共に、感想や個人的な考えについては生徒間で意見交換するよう促し、個人のファイルに綴じてストックしていくように指示した。

今年度は合計14回実施した。「朝のかわら版タイム」で取り上げられた記事が、教科を問わず、授業での教材や話題につながることも多くあった。授業以外でも、3年生の進路指導の際に、面接練習の話題に使われたり、導入教材として使われたりという効果もあった。

今年度の「朝のかわら版タイム」において、生徒の間だけでなく教員間でも話題になった記事は、第4回6月15日付の神戸新聞の淡路島外への高校進学者に関する記事を扱ったものであった。学区再編後、島外への高校進学者が増加傾向になっており、2019年には2割弱が「流出」していることを伝える記事である。この回では、「MISSION」記入後、周囲の生徒との意見交換も勧めたのだが、自分たちも経験した意思決定に関する話題であっただけあって、いつも以上に活発な意見交換が行われた。また、教員にとっても、生徒目線で島外への進学をどのように考えているのかは非常に興味深いものであった。このように、限られた回数ではあるが、「朝のかわら版タイム」を通して、自分たちも社会の一員であるという自覚とともに、社会問題を認識し、社会に関わる意識が高まっていったと期待している。

(2) 「REBORN PROJECT」

「REBORN PROJECT」は、2017年度から始まった、2年生文系生徒による「総合的な学習の時間」の授業である。1年を通して、自分たちで地域の課題を探し、解決策を考え、市役所をはじめとする地域の方々にプレゼンテーションしていこうという取り組みである。

この取り組みの中で、情報収集の時間として、4月に2時間の時間を設定し、地域課題を探す際に新聞を活用していった。具体的な方法としては、約100人の生徒が2人1組のペアになって、2019年1月から4月までの新聞から地域課題や地域活性化に関する取り組みを扱う記事を洗い出し、リストアップしていくという作業である。その後、資料2のように、エクセルファイルに「新聞名・日時・紙面・見出し」を入力してまとめたものを印

刷し、生徒に配布した。生徒はそのリストを見て、自分の関心のある記事がどこに載っているのかを探し、情報収集していった。

資料 1. 新聞記事から洗い出した地域課題データベースの例（抜粋）

207	129	神戸新聞	129	1	観光	街づくり	交通	六甲摩耶山開発規制緩和
210	129	神戸新聞	129	5	観光	国際	交通	地方創生 観光立国
214	129	神戸新聞	129	28	観光			コア2匹の長寿を祝って
219	135	神戸新聞	204	20	観光	街づくり	文化	鬼舞う街 龍踊る春
230	124	神戸新聞	124	6、上	観光	文化		レトロ銭湯疲れ癒し100年
231	124	神戸新聞	124	27、中	観光	街づくり	文化	島の絶景撮影食も満喫
234	130	神戸新聞	130	6、中	観光	水産	商業	瀬戸内の冬の味覚訪ねて
252	125	神戸新聞	125	6上	観光	街づくり	文化	ドーミエの作品など100点展示
297	140	神戸新聞	209	1中	観光	街づくり	商業	鮮やか、かき餅すだれ 新温泉町

先述のように、普段の生活で、新聞を手にする生徒は非常に少なく、新聞をとっていない家庭も複数あることがわかっていった。そのような生徒にとっては、地域課題だけではなく、新聞がどのような構成になっており、どんな情報を掲載しているのか知るきっかけになったと思われる。

以後、市役所・大学・関係団体等との連携を経て、地域課題に対する解決策を考えていった。そして、取り組みのまとめとして、11月27日にNIE実践指定校の公開授業を兼ねて成果発表会を開催した。自分たちの考えた取り組みをポスターセッション形式で発表し、市役所職員をはじめとする地域の方々に提案を聞いていただき、コメントをしていただくというものであった。講師として、福知山公立大学の中尾誠二教授からのご講評とご講演をいただき、閉会となった。

閉会後の研究会では、来賓の皆様から、発表の際の新聞記事やデータ出展の明示、今後の「解決策の実践方法」のあり方について、貴重なご意見をいただいた。

資料 2. 11月27日 REBORN PROJECT 成果発表会



5. NIE 記者派遣事業

今年度の記者派遣事業として、3月10日に朝日新聞神戸総局次長の浅倉拓也様から異文化理解をテーマにご講演いただく予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染予防のため、3月3日から臨時休校となり、講演会もやむなく延期となってしまった。

6. 成果と今後の課題

以上のような取り組みを経て、生徒と新聞、さらには社会問題との距離が近づいたと考える。地域の課題、社会で起こっている問題、新聞で報道されている問題が自分にも関係することであると捉え直すきっかけになったと思っている。そして、「他人事」から「自分

事」へと視点が変わり、自ら世の中へのかかわりを持つ姿勢を今後も持ち続けてもらいたい。

2019年度をもって、NIE実践指定校としての取り組みは終了するが、今後も「朝のかわら版タイム」や「REBORN PROJECT」の中での新聞を活用した取り組みは、継続していく予定である。今後も、新聞の活用を通じて、社会への関心を持ち、主体的に社会にかかわっていく生徒が増えるよう尽力していきたい。

朝の“かわら版”タイム No. 4

次の6月15日「神戸新聞」の記事を読んでMISSIONに取り組んでください。




MISSION1 学区再編前（2014年）と学区再編後（2019年）を比較して、島外への進学者数と流出率の増減をそれぞれ算出してみよう。

進学者数の増減 _____ 流出率の増減 _____

SPECIAL MISSION あなたが、1歳下の後輩から進路についての相談を受けたとします。ここで、津名高の魅力をPRしながら、後輩を引き留めるとすれば、あなたは何と言いますか。後輩からの反応も考えながら、次の会話を完成させて下さい。

既読


なんで島外の高校がええの？



自分

既読

やっぱり島外の高校の魅力は、



後輩

既読

そっか…。でも、津名高校の魅力は、

モラルジレンマの枠組みを用いた社会的論争課題の探究

～みんな違って、みんないい～

神戸市立神港橋高等学校 校長 谷口 元庸
教諭 高野 剛彦

1. 実践の概要

神戸市立神港橋高等学校は、2016年4月、神戸市立兵庫商業高等学校と神戸市立神港高等学校を統合・再編して開校した、全日制商業高校（みらい商学科）である。1学年8クラス（定員320名）、3学年で24クラス（定員960名）、うち75%が女子生徒である。

創設のコンセプトとして「“ひと”を“たから”にとらえ、神戸を愛し、支える“人財”を地域とともに育てる」を掲げ、二つの“MIRAI”を備えた人財の育成を図っている。本年度からは「橋コンソーシアム」を立ち上げ、神戸市兵庫区と地域連携協定を結んで、タウンミーティングや通年型インターンシップなど地域連携をさらに推進している。

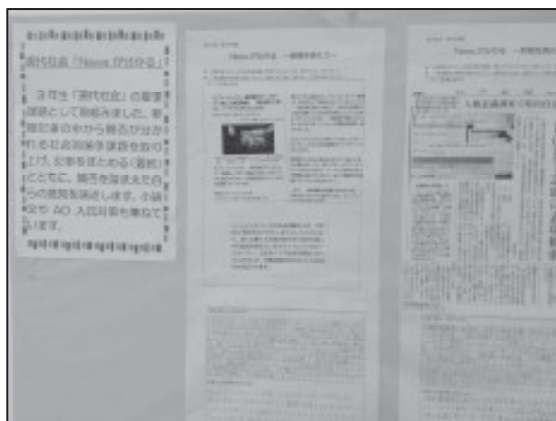
また教育目標にある「思いやりや礼節を重んじ、職業人としての心構えや倫理観をもって行動できる人の育成」の達成に向けて、生徒を取り巻く道徳的諸課題を自らの力で解決できる道徳的実践力を身につけるため、3年間を通した課題解決型道徳教育を系統的・計画的に展開している。

本校では、2年生より情報類型システム活用コース、情報類型システム開発コース、会計類型の三つの類型・コースを設け専門的な学習に取り組むとともに、多様な選択科目を設け学習の深化や希望進路実現、興味・関心の伸長を図っている。本年度NIEに取り組んだ公民科「時事問題」もそうした選択科目の一つである。（以下はシラバスより）

科目名	時事問題	教科名	公民	種別 科目群	選択Ⅱ
単位数	2単位	配当学年	3年		
履修の条件	就職希望者、進学希望者で「小論文」が必要なもの			授業の形態	講義・演習（発表）
使用教科書	実教出版「最新現代社会」（必修「現代社会」の教科書を使用）		使用副教材	ニュース時事能力検定 公式テキスト&問題集 「時事力」基礎編（毎日新聞社） 実務教育出版「一般常識&SPI対策ワーク」	

せるという学習を繰り返した。学習過程は、㊦社会的ジレンマ課題に関する記事の提示→㊧【第1次】立場・意見の選択・判断→㊨グループディスカッション→㊩【第2次】立場・意見の選択・判断→㊪200字程度の小論文にまとめるというものである。

また、夏休みの課題として新聞記事から社会的論争課題を自分で見つけ、記事の要約と自分の意見（賛否）をまとめる「Newsが分かる」に取り組んだ。2学期には、各自の課題を発表し、それを受けて残り全員がその課題に取り組む（小論文を作成）ことを繰り返した。



②記者派遣

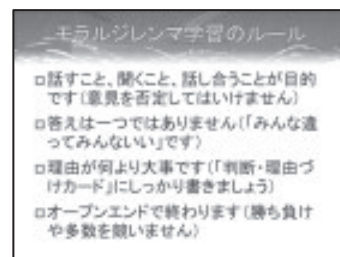
11月27日には新聞記者派遣制度を利用して、毎日新聞社神戸支局の春増翔太記者による特別授業「事件は現場で起きる～県警（捜査1課）担当記者が語るニュースの裏側～」を実施した。

4. 成果と今後の課題

言うまでもなくモラルジレンマ学習の本来のねらいは、生徒の道德性の発達を促すことであるが、系統的に取り組むことで次のような効果を実感した。

①他者への基本的信頼感の醸成

新学習指導要領では「探究活動」において、「対話的な学び」の視点から「異なる多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学び」が求められている。グループによる協働的な学習が成立するためには、グループメンバーへの基本的な信頼感が欠かせない。批判や否定されるのではないかという不安を抱えたままでは、安心して自らの考えや意見を表明することはできない。だがモラルジレンマ学習では右のルールが徹底される。生徒のアンケートでも、次のような記述がみられた。



みんなが自分の意見を聞いてくれたり納得してくれたりすることで、自らの意見に対して自信を持つことができたり、自分にとってプラスになるようなことだと思う。

協働的な学習をするうえで欠かせないグループメンバーに対する基本的信頼感を醸成するうえで、モラルジレンマ学習は最適であるといえる。

②探究・問題解決を進める基本的方略の獲得

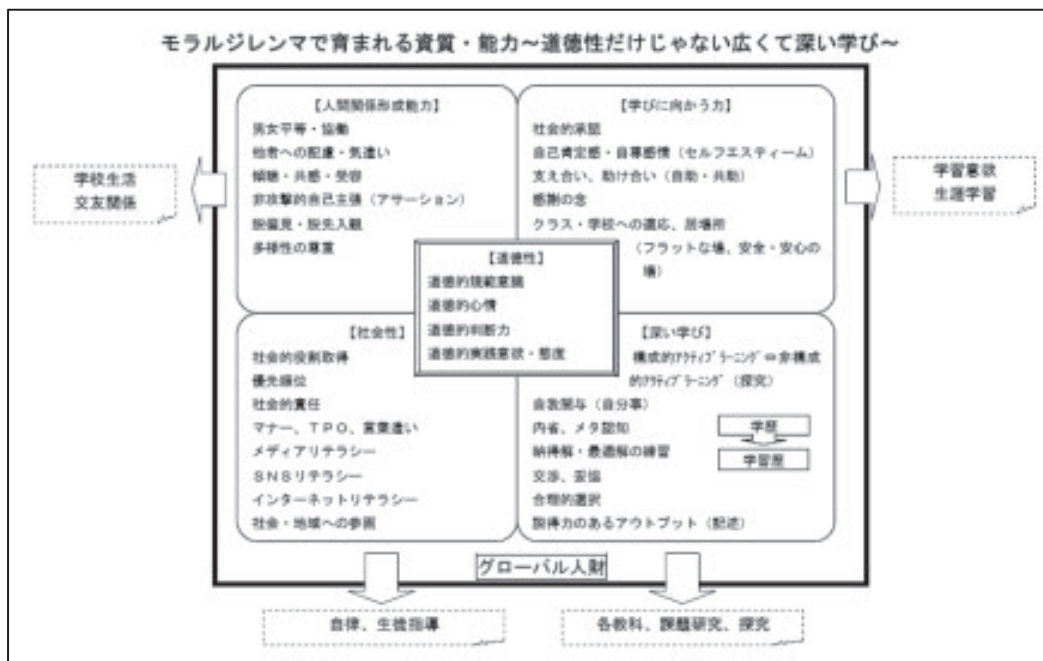
モラルジレンマ学習では、相反する2つの立場（道德的価値観）から一方を選び、モラルディスカッションを行う。生徒は自分とは異なる立場・意見を知ることができ、自己の既存の価値観が揺さぶられ、より高次のものへ再編成される。モラルジレンマ学習を繰り返すことで、自己の主張を一方的に展開するのではなく、多角的・多様な視点から分析・検討する習慣が身につく。

授業で班になって調べ学習をしたとき、相手が間違った答えを出していたら、すぐに「違う」というのではなく、最後まで話を聞いて、その上で自分の考えを話すようになった。

自分とは反対の意見や考えが出た時に、一度自分が考えていた意見をおいて、広い視野で客観的に物事を考えてみたことで、相手の意見を理解し尊重しつつ、自分の意見も伝えることができた。

モラルジレンマ学習で決められたテーマについて論争的課題を探究する際の基本的方略を獲得し、「Newsが分かる」など自由なテーマについて探究する際に応用する。またオープンエンドであることから、自然に正解ではなく納得解や最適解を求めようとするようになる。基本的方略を獲得することは、小論文指導など進学指導の場面でも有効に機能している。

この他にも、他者への配慮や気遣い、傾聴・共感・受容、多様性の尊重といった「人間関係形成能力」、社会的責任、マナー・TPO・言葉遣い、メディアリテラシーといった「社会性」など、モラルジレンマ学習を通じて、道徳性だけでなくさまざまな資質・能力が育成されることが明らかとなってきた。（下の図を参照）



i 本校はこれまでも、地元神戸市・兵庫区の産官学公と協働した地域協働型キャリア教育に取り組んできた。すでに、「橘タウンミーティング」や「キャリア実践（通年型インターンシップ）」、「道徳の日」、「商品開発」等の授業で、地域との協働によるプロジェクトを展開してきた。さらに今年度からは、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の「コンソーシアム」を活用し、各プログラムの準備、招聘団体や講師の選定・連絡・調整、評価についてご協力とアドバイスをいただいている。

ii モラルジレンマ学習はコールバーグの認知発達説に基づく。道徳性の発達を促すためには、道徳的な認知不均衡にする、つまりモラルジレンマ（価値葛藤）の状況が必要であるとする。モラルジレンマに遭遇すると、不調和や矛盾、ある種の不整合を感じ始める。この不調和のために認知的不均衡が生じ、その状況を正しく調整するために、自分の考えを変えたり、調整したりする動機が生まれる。道徳的発達を起こすためには、別の視点から考えさせたり（役割取得の機会）、多くの他者の判断の論拠や意見、見方に触れることも大切である。そのために、集団討議（モラルディスカッション）が行われる。この中で、特に自分の道徳的な見方よりも一段階上位の道徳的思考に出会うと、均衡化のためにシエマ（その人の持つ基本的な認知枠組）を調整しようとし、結果として道徳性の発達レベルが押し上げられる。

日々の教育活動への新聞の活用と 地理歴史科地理 B 授業への新聞の活用

兵庫県立柏原高等学校 校長 井上千早彦
教諭 久保 哲成

1. 日々の教育活動への新聞の活用

本年度NIE実践校に指定され、提供していた新聞は以下のように活用した。

1) 3年生の生徒には、面接試験（大学、専門学校、公務員、就職）における質問に時事問題を問われることがあるので、NIEコーナーに常備している新聞に日々、目を通していくことを指導した。

2) 3年生で学校設定科目「教養社会」選択者には、授業開始後の1分間スピーチで関心のある時事問題をスピーチしてもらうので、NIEコーナーの新聞に目を通していくよう指導した。

3) 学校設定科目「教養社会」選択者のテキストとして『2019年度版ニュース検定 公式テキスト&問題集「時事力」基礎編（3・4級対応）』を使用し、11月のニュース検定3級合格も目指し、週2時間の授業を行った。このテキストの各時事テーマに沿った新聞記事を補助資料として活用した。



4) 新聞記者による講演

以下のテーマを、神戸新聞丹波篠山支局長のキムキョンスン金慶順記者による講演を行った。

① 「頑張っている人」を知らせたい：令和元年9月24日

② 多文化共生を考える：令和2年1月30日

5) タイムリーな新聞記事を授業の導入に使い、その問題を掘り下げる授業をデザインし、実践していった。以下の報告のとおり、第2学年地理Bにおいて「イギリスのEUから離脱の文化的な理由」を考察する授業を開発、展開した。

2. 新聞から得られる時事問題を活用した授業開発と実践

1) 授業開発のきっかけ

ちょうどイギリスのEU離脱が最終局面に入ってきた2020年1月下旬に、第2学年の地理B授業の進度が「ヨーロッパ地誌」であったので、「イギリスはヨーロッパなのか？」のタイトルでのアクティブ・ラーニング型の授業を開発していった。

2) ジグソー学習によるアクティブ・ラーニング型授業

ジグソー学習とは、アメリカ合衆国の社会心理学者エリオット・アロンソンが考案した学習方法で、アメリカのハイスクールのクラスで生徒を人種・民族を越えて協力させ、同じ学習目標を達成させるものである。

生徒はジグソー学習の各設問に取り組む中で、

インターネットの情報を吟味するメディア・リテラシーの力、グループ内で意見を交換し、まとめていく言葉の力、複数の情報をもとに現象を構造的に把握していく力を培う。

さらに、今回のジグソー学習「イギリスはヨーロッパなのか？」の最後の問5はオープンエンドの問いとなる。この明瞭な解なき問いに耐えながら考察を進めることで、生徒たちは、一つの明瞭な正答のない仮説的回答に耐えていく知的体力を身に付けていく。

ジグソー学習の手順は次の通りである。

- ① 5分：教員による本時の説明、各オリジナルグループで問1～問4担当者（生徒）を決める。
- ② 5分：問1～問4の担当者（生徒）が集まりエキスパートグループを構成し、エキスパートグループで担当の設問に取り組む。
- ③ 5分：各設問のエキスパートグループ代表が、各設問の回答を板書する。
- ④ 10分：エキスパートグループの回答を踏まえながら、オリジナルグループに帰り、問5（まとめの設問）を考える。
- ⑤ 10分：各オリジナルグループからの問5の発表を基に教師が授業のまとめをする。

3. 授業プリント「イギリスはヨーロッパなのか？」

の設問内容

イギリスのEU離脱を伝える令和2年2月1日の下記の新聞記事を生徒に配布し、イギリスのEU離脱の様子を生徒に知らせ、以下の内容の設問で授業を進めた。



問1 ヨーロッパ大陸における迫害事件について、(太字・斜体は回答例)

- 1) スペ

イン中世において行った異端審問制度でスペインを追われたのはどんな人たちか。

ユダヤ教徒とイスラム教徒

- 2) フランスにおいて起こったドレフュス事件 (1894～99) について、

- a ドレフュスは何人か。

ユダヤ人

- b 軍人ドレフュスは何の疑いをかけられたのか。

スパイの嫌疑をかけられたが、無罪が判明

- 3) ロシアにおいて多発したポグロム (ポグロム) とはどのような事件か簡潔に記せ。

ユダヤ人の虐殺

- 4) ドイツで第2次世界大戦中ヒトラーはユダヤ人に対してどのような扱いをしたか答えよ。

ナチスによる大量虐殺

- 5) ヨーロッパ大陸の人々 (キリスト教徒) は、異民族 (非キリスト教徒) に対して寛容か。

異民族 (非キリスト教徒) に対して寛容でない

問2 イギリスにおけるユダヤ人の扱いについて

- 1) ヨーロッパ社会 (キリスト教文化) においてユダヤ人 (ユダヤ教) が嫌われる理由を宗教的側面から述べよ。

イエス・キリストの居場所をローマ帝国に密告して磔の刑に追い込んだのが、13番目の弟子のユダであったことから、ユダヤ人に対する迫害が強い

- 2) イギリスの主な民族は何民族か？

アングロサクソン

- 3) イギリスの主な宗教は何か？

イギリス国教会 (キリスト教新教 (プロテスタント))

- 4) イギリスの1800年代後半の首相ディズレーリ (在任 1868、74～80) は何民族か。

ユダヤ民族

- 5) イギリス政府は第1次世界大戦で戦費をロスチャイルド家が経営する銀行から借りたが、ロスチャイルド家は何民族か。

ユダヤ民族

- 6) イギリス人(キリスト教徒)は異民族(非キリスト教徒)に対して寛容か。

異民族(非キリスト教徒)に対して寛容

問3 イギリスは1971年にEC(のちのEU)に加盟したが、

- 1) 第2次世界大戦で勝利した大英帝国の植民地は戦後どうなったか。また戦後のイギリス経済は、衰退したか、繁栄したか。

多くの植民地が独立していき、戦後のイギリス経済は衰退した

- 2) 第2次世界大戦後のイギリスの経済状況を表す言葉は何か答えよ。

英国病

- 3) イギリスはなぜEC(EUの前身)加盟(1973年加盟)を希望したか。イギリスの第2次世界大戦後の経済状況から類推せよ。

経済状態が悪化したため、ヨーロッパ大陸への市場拡大を狙った

- 4) しかし、イギリスが統一通貨ユーロを採用しなかった理由を、ドイツとの関係で述べよ。

ドイツにヨーロッパ経済の主導権を渡したくなかった

- 5) EU加盟国で、経済危機に見舞われている国をすべてあげよ。

ギリシャ、スペイン、ポルトガル、イタリア、キプロス、アイルランド

- 6) 5)の状況を見て、イギリスはポンドを維持したことに、どのような評価を下していると思うか。

ユーロを使用しなかった判断は正しかった

問4 イギリスはEUに加盟していますが、

- 1) イギリスはシェンゲン協定を批准していない、この条約は何を自由にする条約か。

*批准(ひじゅん):条約に同意し、締結すること

EUに加盟するヨーロッパ大陸の国々の多くが加盟している。

国境での入国審査なしに、自由に人の移動ができる。

- 2) イギリスがシェンゲン協定をどうして批准しないのか。

ヨーロッパ大陸と一体化することへの不安感、躊躇

問5 以下の設問をオリジナルグループで考えよ。

- 1) イギリス元首相キャメロン(保守党)は、「イギリスのEU離脱についての国民投票を2016年に実施する。」との公約を掲げ首相になった。このことは、つまり、イギリス国民の中に常にEUに対してどのような感情があったのか、ユーロを使用せず、シェンゲン協定も批准していないことから考えよ。

EU(大陸ヨーロッパ)への不信感

- 2) 1)の感情をイギリス人(アングロサクソン)が持つ理由は、ヨーロッパ大陸人のどのような性格に由来すると思うか。ユダヤ人への対応の違いから類推せよ。

イギリス人(アングロサクソン)より、大陸ヨーロッパ人は、異民族に対して不寛容

- 3) イギリス人(アングロサクソン)は、自分たちをヨーロッパ人と思っているでしょうか？

大陸ヨーロッパ人とイギリス人(アングロサクソン)の文化には大きな溝がある

4. 今回の授業で学んだこと・感じたこと

生徒が授業で学んだこと・感じたことについては、「ジグソー学習」、「イギリス人」、「ヨーロッパ大陸」、「ユダヤ人」、「一般化」の五つに分類して記しておく。

- 1) ジグソー学習について

- ・楽しい中でイギリス理解を深められた。
- ・いつもと違う授業で楽しかった。またジグソー学習をしたい。
- ・コンピューターを使って調べると、設問の答えだけでなく、それに関連することも知れて良かった。
- ・自分で調べた結果から考えて別の問題に取り組むのが面白かった。また、そのことにより理解が深まった。
- ・グループで協力しながら取り組めた。

ジグソー学習による授業への評価は良く、今後
も、地誌のまとめの授業にジグソー学習を行うこ
とに生徒たちは好感を持ってきていることがわ
かった。

2) イギリスについて

- ・イギリスとEU関係が理解できた。
- ・イギリス人が自分たちをヨーロッパ人と思
っていないことを知り驚きました。
- ・EUとイギリスの関係が将来変わりそう。
- ・アングロサクソンの独立意識

イギリスがEUを離脱するという現実のなかで、
生徒たちは強い関心を持ちながら授業に取り組ん
だ。そして、生徒なりにイギリスがEUを離脱して
いく文化背景を理解することができた。

3) ヨーロッパ大陸について

- ・イギリスとヨーロッパ大陸の関係は、日本
と東アジア大陸との関係に置き換えられる
のではと思った。
- ・ナチスドイツについて調べたい。
- ・ヨーロッパの宗教的背景。

イギリスとヨーロッパ大陸との関係から、日本
と東アジア大陸の関係を類推する鋭い考察力を示
した生徒がいたことは驚きであるとともに、生徒
の思考力の深さに感銘した。

4) ユダヤ人について

- ・ユダヤ人差別がイエス・キリストの処刑と
関係していることに驚いた。
- ・ユダヤ人虐殺の話アンネ・フランクを読
んで知っていましたが、イギリス人のユダ
ヤ人に対して持つイメージとともに学べて
楽しかった。
- ・未だにユダヤ人への差別があるなんて知ら
なかった。
- ・同じキリスト教文化にあるのに、ヨーロッ
パ大陸人がユダヤ人を強く差別し、イギリ
スではそうではないことを不思議に思った。

キリスト教世界でのユダヤ人差別の実態は、な
かなか生徒には理解しがたいことが分かる。

5) 一般化について

- ・地域の問題を考えながら勉強する地理は楽

しい。

- ・自分が現代社会の問題に対して何も知らな
いことを知った。
- ・「イギリス人がユーロを導入しなかった」こ
のように一見して意味の分からない行動で
も、きちんとした意図が背景にあることが
理解できた。
- ・違う宗教を信じていても、互いの宗教を理
解しあって、認め合うことができれば差別
はなくなると思う。
- ・その国に根付いている思想や偏見を変える
のは難しいと思った。

現代社会に起こっている事象を理解するため
には、歴史的背景や文化的背景をひも解きなが
ら、構造的に理解していかなければならないこ
とを生徒たちは理解できた。このことは、この
ジグソー学習のこの実践が彼らの社会認識を深
めたとともに、学びのメタ認知も進めたことで、
大いに意義があったと言える。

《使用教科書・地図・資料集等》

片平博文他9名(2019)『新詳地理B』帝国書院
帝国書院編集部編(2019)『新詳高等地図』
帝国書院編集部編(2019)『新詳地理資料
COMPLETE 2019』

《参考文献》

オリビエ・ペリエ(2008)『野望あり図』東方出
版
筒井昌博他(1999)『ジグソー学習入門』明治図
書

課題研究論文のテーマを探す

兵庫県立加古川南高等学校 校長 原 実男
教諭 西澤 和美

(1) 実践の概要

1年次において、各クラス2名のN I E係を中心にホームルーム活動の一環として実践をした。

目的は、世の中のことに広く目を向け、課題研究論文（各自が独自のテーマを設定し、3年間で8000字の論文を完成させる）のテーマを広い視野をもって探すということである。

1学期、2学期はN I E係の中で担当者を決め、各自が選んだ新聞記事を模造紙に貼り付け、その紹介、感想コメントを書き足したものを、1年次の廊下に掲示した。

11月には新聞記者の方に来ていただき、研究論文のテーマ探しについて講演していただいた。

2学期の終わりの「産業社会と人間」の授業での論文のテーマを探す活動の一環として、全員に新聞を配布し、記事の中から面白そうなキーワードを探し、テーマ選びの一助とした。

3学期には、各クラスで朝のホームルームの時間に新聞記事を題材にした「1分間スピーチ」を行った。



(2) 実践の内容

「新聞記事を切り抜いてコメントを書く」

各クラスのN I E係に新聞を持ち帰らせ、印象に残った記事を切り抜いて模造紙に貼り付け、記事の概要の紹介と、感じたことなどのコメントを書かせ、各クラスの廊下側の窓に掲示した。

国際情勢や環境問題、事故や災害、スマホに関する話題や入試関連のニュース、地域の話など、各自が興味のあるニュースを選んだ結果、多岐にわたるニュースが廊下に貼り出され、休み時間に生徒達が記事に目をとめる姿が見られた。

また、廊下に長机を設置し、新聞を並べて置くことで、係以外の生徒が新聞を手にする機会を設けた。

新聞をとっていない家庭も増える中、新聞記事には、見出し、写真、背景説明などニュ

ースへの理解を促す工夫が凝らされており、それを日常的に目にすることで、世の中で起こっていることに対する関心を引き起こす機会となった。

2学期には「新聞の1面比較」に取り組み、新聞社によって1面のトップ記事の題材が違っていたり、同じ題材でも、見出しの付け方や、記事の扱い方が異なっていたりすることを学んだ。

「新聞記者による講演会」

11月には読売新聞姫路支局長の米井吾一記者による講演会を開いた。

テーマは「課題研究論文のテーマ探しのヒント」である。

ニュースと言っても、いろいろな事件や事故、出来事などを速報として伝えるニュースと、事件や事故、出来事などの背景を独自に取材して、深く掘り下げる記事があることをお話していただいた。

その上で、課題研究論文のテーマの設定や、論文の掘り下げ方の例として、新聞の記事から自分の身近なところでも同じようなことが起こっていないか調べたり、逆に自分たちの身近で起こっていることが他の地域でも起こっていないかを考えてみたりするといったお話をしていただいた。

また、答えを探る方法として、①文献（本、新聞、インターネット）にあたる②国や地方自治体のデータを探す③専門家（大学などの先生やNPOの方）に聞く④その道に詳しい人に聞く⑤自分でアンケートをとる といった方法を紹介していただいた。

専門家の本が全て正しいとは限らない、自分なりに集めた材料から答えを考える

ことで、オリジナルの結論を出すことができる、とにかく多くの人に話を聞くことが大切であるなど、大切なことをいろいろと教えていただいた。生徒たちはメモをとりながら熱心に聞いていた。



「1分間スピーチ」

3学期からは、NIE係が朝のクラスホームルームで1分間スピーチを行った。

各自が興味のある新聞記事を選び、「いつ、誰が、どこで、何を、どのように、なぜ行っただ」という5W1Hの要素をおさえた記事の内容の紹介と、その記事に対する自分自身のコメントを合わせて400字～500字で原稿用紙にまとめ、それを覚えてクラスで発表した。

新聞記事にはきっちり5W1Hの要素が含まれているので、それをまとめることでわかりやすい文章の書き方の練習になった。また、語彙や文章表現の習得、つなぎ言葉の使い方、コメント力の向上などさまざまな力を養うことにつながると考えられる。

聞いている側にとっても、人によって記事を選ぶ視点が違うので、世の中で起こっているさまざまなことを知るきっかけになった。

（3）成果と今後の課題

N I E 系の生徒たちは、出された課題に積極的に取り組み、他の生徒たちに新聞の良さや面白さを広げる活動に取り組んだ。

新聞記者の方による講演会では、1年次の生徒全員がお話を聞き、「論文」を書くにあたってのテーマの決め方、調べ方、最終的に目指すべきゴールについての理解が深まった。

〈 新聞記者講演会に対する生徒の感想 〉

私が夏休みの課題で調べたときは、問題点ばかりあげて実際に自分たちで解決できる方法や、課題に対する対策までしっかり考えられなかったもので、講演を聞いて、もっといろいろな見方で物事を考えるのが大切だと分かりました。まずは自分の身近なところに着目してから、幅広い分野にまでつなげられたら、いいものができるんじゃないかと思いました。

自分で調べた情報も大事だけど、実際にその道に詳しい人に直接話をきいたり、アンケートしてみたりすることで、新たな考えや問題が見つかると思います。 （1年次女子）

講演を聞いて、新聞記事を作るときのテーマの決め方や、調べるに当たっての大切なことがよく分かりました。お話を聞く前までは、論文はどんなことを書くのか、どうやって調べていくのか全く何も分からず不安に思っていたので分かって良かったです。ありきたりな答えや考え方にならないようにするには、たくさんの方の声を聞いて教えてもらい、新しい答えを導き出すことが大切とおっしゃっていたので、論文を書いていく際、様々な話を聞いて書いていきたいと思いました。参考になることばかりで、とても貴重な話を聞くことができました。

（1年次女子）

1分間スピーチはベースが新聞記事なのでまとめやすく、本人たちなりに達成感を得ることができた。書き上げた原稿を事前にチェックする際、5W1Hを点検し、話題がバラバラにならないように、一つのテーマに絞るよう指導した。その上でポイントになるところ、良く書けているところをほめることで自信を持ってスピーチに臨めたようである。スピーチという意味では声の大きさや目線の配り方などの課題は残っているが、第一歩としては意義があったと思われる。

〈 1分間スピーチに対する生徒の感想 〉

普段調べないようなことも調べることができてよかったです。新聞を読むことがあまりないのですが、読んでみると興味をそそられるものばかりなので、選ぶのに時間がかかったけど、いろいろな記事を見ることができたので楽しかったです。 （1年女子）

全部は暗記できていなかったもので、原稿を見ながら発表したせいか、あまり緊張せずに読むことができました。経済、政治などの難しい記事ではなく、「古着」という、聞いていて面白い内容を発表しました。普段、あまり詳しく見ない新聞を開き、テーマをしばらく原稿に書くというのは、意外と楽しかったです。みんなが日頃、詳しく見ない新聞の内容を自分の言葉で発表し、知ってもらうことは少し楽しく感じました。 （1年女子）

今回、N I Eで1分間スピーチをしたことや、他のN I Eでの活動を通して、新聞を読むいい機会になったと思います。普段あまり新聞を読むこともなく、私はスマートフォンで気になるニュースを見るだけということも多かったけれど、新聞には気になるニュースだけでなく、たくさんの情報が載っていて、今まで興味のなかったものにも興味を持つことができました。

(1年女子)

上手くいったことは、あまり緊張せず発表できたことで、やってみて良かったことは皆の前で発表する機会が増えたこと、もうちょっと工夫すべき点は、大きな声でハキハキ発表すべきだったということです。

(1年男子)

今後の課題は、N I E活動をN I E係だけではなく、全員の生徒に広げていくことである。

そのために、来年度は全員の生徒が1年間で1回は新聞記事を題材にした1分間スピーチを行うことを計画している。全員が行うことで、スピーチをする一人一人が新聞記事を通じて社会に目を向け、話題を選んで原稿をまとめる力、発表する力が身につくとともに、それを聞く側としても多様な話題に触れ、どのようなスピーチが聞きやすく、どのようなスピーチに改善の余地があるかのモデルが多くなるというメリットが生まれる。

20年度からは本格的に課題研究論文の執筆が始まり、個人でのプレゼンの機会も増えるので、日常的にスピーチをしたり、聞いたりする機会があることはプレゼン力の向上にもつながる。

本年度の当初の目的は、「課題研究論文のテーマを広い視野で選ぶ」ということであった。しかし、実際の活動が普段のホームルーム活動の時間内の、N I E係による活動がメインだったため、「産業社会と人間」の授業内で行う「課題研究論文」と結びつけて生徒に考えさせることは難しかった。「産業社会と人間」の授業はプログラムがぎっしり詰まっているので、かろうじて「新聞記者の講演会」のみ授業内で行えたが、他の活動はホームルーム活動の中で行うという形になった。実際に全員の論文のテーマが出そろってから、どの程度テーマ選びや設定にN I E活動が影響を与えたのかを検証できると考える。

ただ、「社会のできごとに目を向ける」「文章力、表現力を向上させる」という点において、また、スマホ以外に「知識を広く深く得るための手段としての新聞」に対する認知度を上げ、活用させるという点においては、一定の効果を上げることができた。

最初、「N I E係」とは何をするのか、よくわからないまま係になり、活動について説明された生徒たちは、自信がない様子であった。ところが、活動する内にクラスの代表であるという自覚が生まれ、新聞の奥深さや面白さに段々目覚め、しっかり活動に取り組むようになった。クラスメイトのそのような姿は他の生徒達にとって、何より説得力を持つものであり、新聞に対して興味と理解を広げられたと思う。

また、今回この活動に取り組んでみて、プロの記者によってしっかり取材をして書かれた新聞記事の持つ、文章としての骨組みや視点の確かさや、話題の多様性に、実践者自身が改めて気づいた。生徒たちにものごとを考える材料として、新聞に触れ続けていく機会を持たせたいと考える。

新聞を活用した主体的な学び

兵庫県立三田西陵高等学校 校長 田畑 吉三
教諭 鹿田 尚宏

1 はじめに

本校は三田市の住宅街（ウディタウン）の一角にある創立27年目の全日制普通科高校である。2011年より、将来幼稚園教諭や保育士をはじめとする教育関係への進学を目指す「子どもみらい類型」を設置し、特色ある授業を展開している。

本校の進学に関する取り組みについては、AOや面接、小論文を利用した受験で進路を決定する生徒が比較的多い現状である。特に小論文入試では課題文（新聞記事や史資料などからの引用文など）を読み解き、自らの考えを記述する傾向がみられる。そのような状況を踏まえて、今回、NIE実践指定校に選出されたことを機に、新聞を活用しながらの主体的な学び、広い視野に立った学びができる環境づくりに取り組むこととなった。

2 実践に向けての環境づくり



新聞を活用した授業などに取り組むため、新聞を閲覧できる場所を設置した。

本校では図書室前（2階）のスペースに、NIEについての説明とともに3社の新聞を置いた。昼休みや放課後に図書室内で自由に読んだり、授業担当者は自由に教室へ持って行くことができるようにした。

3 さまざまな取り組み

(1)総合的な学習(探究)の時間

本校の「総合的な学習(探究)の時間」は、これまで各学年独自で計画を立てて展開してきた。

2018年度入学生より「総合的な学習(探究)の時間」は“3年間を見通したキャリア形成”というテーマで、統括部署を設置して取り組むこととなった（18年度は進路指導部で、19年度より教育推進部を新設して取り組む）。

①1年「総合的な探究の時間」

“3年間を見通したキャリア形成”のスタートとして、4～6月に「三田西陵高校ではどのような学校生活を送れば良いか」（子どもみらい類型は「教職を目指すためにはどのような学校生活を送れば良いか」と題して班別協議・ポスター発表を行った）。

夏休みの課題に「職業人インタビュー」を課し、9月当初に報告会を実施して、将来の職業観をイメージさせ、加えて情報収集の必要性を意識させた。

10月末からの取り組みとして、豊富な情報をもとに「自分の考えを表現する」と題して小論文講座(全4回)を実施した。

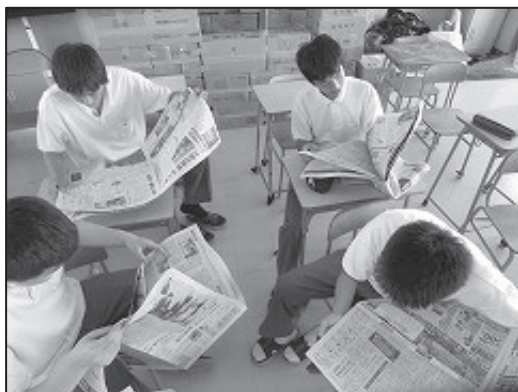
その導入部分として、記者派遣事業を活用した。産経新聞社より記者を招いて、「新聞記者の視点から文章を書く」と題して学習会を行った。



②2年「総合的な学習の時間」

4月より自らテーマを設定して研究を進める「課題研究」に取り組んだ。生徒たちは新聞をテーマ探しのために活用したり、文献やインターネット検索とともに資料として活用していた。

普段、新聞を読み慣れていない生徒が多い。スマートフォンなどでは検索したいワードを打ち込めば知りたい情報がすぐに手に入る。しかし、新聞から情報を入手するとなると、なかなか思うようにいかない。そのため、担当教員の指導の下、生徒同士協力し合いながらの活用が主となった。



(写真は「情報技術の発展と私たちの生活」講座の生徒の様子)

(2)1年「現代社会」*夏・冬季休業中課題

1年生(在籍199名)の公民科「現代社会」で夏季・冬季休業中の課題として新聞記事(社

会的問題を扱った記事に限定)を読みレポート作成を課した。

(夏季休業中課題のワークシート)

【担当者による取り組みについての総括】

- ① 課題として新聞記事を選び、レポートさせることで新聞を読む時間を作ることができた。生徒たちは日常的には新聞を読む習慣がない者が多く、わずかでも新聞を読む機会ができたことは有意義だった。
- ② 新聞を定期購読していない家庭が増加しているため、インターネット上での新聞記事を扱ってもよいことにした。新聞紙に限定することは困難であった。
- ③ 新聞記事をネットで読むことができても家庭で印刷はできない生徒も多くいるので、学校に複数社の新聞が配達されているNIEの取り組みは生徒に利用を勧めることができ、たいへんありがたいものだった。
- ④ 夏季休業中と冬季休業中の2回にわたり、NIEの新聞を利用するように生徒には案内したが、レポートの提出のために利用をする者がなかった。休業中に学校の新聞を見ることが困難であった可能性が高い。また、冬季はまだ休業になっていない時期も設定したが、1年生は校舎4階に教室があり、新聞は2階の図書館前に置いてあることが利用を困難にしていたのかもしれない。設置方法は今後の検討課題である。

(3) 1年「家庭基礎」*夏休み課題

①「新聞記事よりSDGsについて学ぼう」

1年生の家庭科「家庭基礎」で夏季休業中課題として、「SDGs についての新聞切り抜き」を実施した。国連が2030年までに達成すべき世界全体の課題とした、17の目標と169のターゲットからなる持続可能な開発目標「SDGs(Sustainable Development Goals)」について、日本でも認知度が高まっている。

家庭基礎では家庭科を学んで持続可能な社会の担い手になることを目標としている。1学期の家庭基礎の授業において、SDGsの17の目標についてグループ学習を通して学んだ。また、衣生活の分野ではファストファッション等私たちの衣生活についてもグローバル化により、SDGs 課題との関わりが深いことについて学習した。このこと以外にも生活と関わりのあるSDGs 課題や、解決に向けて取り組まれていることについて、「みんなに伝えたい、知ってもらいたい!」と思うSDGsに関連する新聞記事を探して、これという1枚を選び、2学期に発表し、クラス内で共有した。

発表の中には重複するものを避けて、17のゴールに分類して掲示した(ワークシートは産経新聞ホームページより「5W1Hシート」を活用した)。

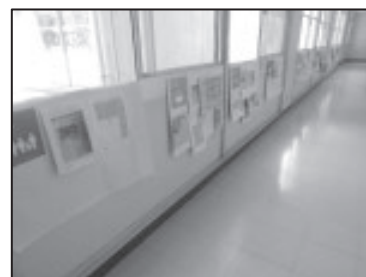
家庭で新聞を購入していない場合には、本校NIE事業として届けられる新聞が図書室前に配置され、自由に閲覧できるようになっており、それを活用することや、コンビニエンスストアなどで購入できることを紹介した。最近ではインターネットを介して多くの情報を収集できるが、新聞の良さを知ってもらうことも考え、この機会にぜひ、新聞を読むよう薦めた。

この取り組みを通して、SDGsの取り組みや現在課題としていることについて国内だけでなく世界の動きについて知ることができ、視野を広げる機会となった。また、SDGsに

ついて引き続き関心を持ってもらえればと考える。



今後の課題としては、SDGs課題の解決に取り組む姿勢を養うことである。



(写真は、発表風景とSDGsの17の目標ごとに新聞切り抜きを分類して掲示した様子)

②神戸新聞社「未来をつむぐコトノハ」企画への参加

神戸新聞1月17日(金)朝刊掲載紙面「語りかける25年の『ことば』過去から未来へ」は、1995年1月17日以降、阪神・淡路大震災に関する記事(約135万本)で語られてきた言葉(コトノハ)を時間の経過に合わせて可視化したものである。この日に「家庭基礎」の授業があった一クラス(男子23名、女子18名)を対象に活用した。生徒達は紙面を見ながら興味を持った言葉を選び、言葉と関連した出来事を書き留めていった。また、興味を持った言葉に対する印象や感情、言葉が表れる時期を分析した。「復興」「復旧」「ボランティア」と言葉を通じて、阪神・淡路大震災から25年の経過を確認することができた様子であった。

そして、本題である震災から30年、40年、50年になった未来には、どういう言葉が語られているのか、「阪神・淡路大震災を経験した兵庫、神戸これからどのような言葉が生まれ、発信されていくのでしょうか。あなたが生き

る将来の姿を思い浮かべながら、あなたが考える未来の言葉を記してください。」の問いについて考えた。「生きる価値」「語り継ぐ」「心の復興」「記憶」「対策」「思いやり」「守る」、丁寧に未来へのことばを書いた。同じ言葉でもその理由は異なり、一人一人が阪神・淡路大震災とその経過に向き合うことができた様子である。このたびの企画に参加することを通して、兵庫・神戸に住む自分たちが阪神・淡路大震災の経験を未来へ受け継いでいくのだという意識が生まれたのではないかと思う。

(4) 2年「保健」

2年生の保健の授業で健康に関するさまざまな社会問題について、新聞記事を活用しながら班別協議を行った。そして、協議内容を簡単な新聞記事形式にまとめ発表し合った。普段あまり新聞記事を読むことがない生徒にとっては、短時間ではあったが有意義な時間となった。



(写真は新聞記事を使った班別協議の様子)

(5) 3年「LHR」

新聞「1面記事の読み比べ」

【実践概要】 全国紙A・B・C社の9月6日付朝刊の1面記事を比較し、なぜ取り上げる記事が違うのか考えさせた。さらに、同じ事件に対するB社とC社の取り扱いや社説内容の違いに気づかせ、新聞各社にはそれぞれ考え方に傾向があることを理解させた。班別協議の形式を取り、20分の協議後、代表が各

班の考えを発表する。

※各紙1面トップ記事の見出しは以下の通り

A社「英下院、EU離脱延期可決」

B社「即位の礼 恩赦実施へ」

C社「日露 平和条約進展なし」

※B社C社社説見出しは以下の通り（両社ともロシアとの北方領土交渉について）

B社「中長期の視点持ち戦略的に」

☞交渉に肯定的見解

C社「どうして席に着いたのか」

☞交渉に否定的見解

【本時の目標】 「多様な考えを知ったうえで自分の考えを持つ人間を目指させる」

読み比べは目標実現のための一つの方法。

【実践のまとめ】 生徒たちは保守やリベラルといった政治的な立場や各新聞社の考え方の違いなどについて考えた経験はなく、協議は難航していた。しかし、考えたことがないことについて考えること自体が刺激的で、意欲的な取組みが見られた。普段から新聞記事やニュース番組に触れる必要性和楽しさを感じ取れた様子だったので、われわれ教員側も積極的に取り組んでいきたいと感じた。

4 成果と今後の課題—2年目に向けて—

「新聞を活用した主体的な学び」をテーマに一年間取り組んできた。生徒達の日常的な新聞活用は少ないという実情は否めない。閲覧場所に足を運んで新聞を手にする生徒も多くなかった。しかし、実際に授業やホームルームで新聞を活用しながら考えを示したり、班別協議をしてみると、新聞の内容に興味関心を示す生徒が比較的多かったということも事実である。

2年目に向けては、生徒達が気軽に新聞を手にし、「主体的な学び」ができる環境づくりを最優先としたい。新聞を読むことで多面的・多角的に社会の実情を知り、自分の進路にも活かせる取り組みができればと考える。

「私たちの街・神戸について」記事を書いてみよう

兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校 校長 島田 育生
教諭 鶴岡 愛

1 はじめに

本校は 2007 年に鈴蘭台高等学校と鈴蘭台西高等学校の発展的統合により生まれた全日制普通科高校です。敷地内に菊水山への登山口があるなど、豊かな自然に囲まれています。各学年国際コミュニケーションコース1クラスを含む7クラスからなり、生徒たちは大変素直で明るい気質で日々文武両道を目指し活動しています。



2年生で行っている総合的な学習の時間では高大連携を行い、1年間かけてさまざまな分野ごとに複数の大学や専門学校の先生から学ぶ取り組みを行ってきました。その中の一つ「私たちの街・神戸について記事を書いてみよう」の講座は「話す力」「考える力」「表現する力」を養うことを目的とし、2019年度に新しく設定しました。地元の企業経営者や、行政にかかわる方、地域に根差した様々な取り組みをされている方など17名にご協力を得てインタビューを行い、新聞記事を書くというものです。講座の選択者は20名でした。この20名を4名×5班に分けてスタートしました。

2 新聞の設置場所と活用について

総合的な学習の時間で新聞制作に取り組むことを念頭に入れ、2年生のフロアである生徒棟3階の生徒の動線のスタート地点にあたる特別教室の廊下に新聞を設置しました。9・10月に届くようにしたため、全学年、全クラスに案内をして、3年生の受験にも活用できるよう昼休みと放課後は特別教室を開放して新聞を読めるようにしました。実際に3年生からも活用の申し出がありました。また、新聞講座では、派遣記者から新聞作成の現場や流れなどについても講義があり、日々の出来事を「新聞」という形にして届けるという作業の大変さや情報の価値にも気づくことができました。



3 実践内容

週1時間15回（最後の成果発表2時間を含まない）を学期ごとに大きく三つに分けて取り組みました。まずはじめに新聞に目を通して、どのように記事が書かれているのか、実際に新聞が出来上がるまでにどのような工程で作られているのか、またインタビ

ューを行うにあたり、どのようなことに気をつけるのかなどを派遣記者から学びました。実践として、ペアをつくりお互いにインタビューを行い、相手を紹介する記事を作成し、派遣記者による添削、アドバイスをいただきました。次に班ごとにインタビューをする協力者にどのようなことを聞きたいか質問の内容についても話し合いました。特に多く出てきた項目は協力者の皆さんの高校時代のことなどプライベートな部分についてでした。第一線で活躍する大人たちが自分たちと同じ年代のころにどのように過ごしていたのか大いに興味があったようです。次に多かったのが「お金」についてでした。社長個人や会社でどのようなお金の使い方をしているのかを聞きたいとのことでした。ほかに、「流行」についてや「目標や夢」「社長として心掛けていること」など多岐にわたりました。

こういった準備のあと、2学期にはいよいよ協力者に学校にお越しただいて、おひとりあたり4～5名の生徒からのインタビューを受けていただきました。

インタビューの方法は、事前に班ごとに考えた質問の内容を、班員それぞれが別の協力者の方にインタビューを行います。つまり、協力者の方々は五つの班すべての質問に答えていただくという形になっています。また、生徒たちは、自分の班の質問については一人で責任をもって答えをうかがい、その情報を班に持ち帰り正しく伝える必要があります。「自分ひとりで責任をもってインタビューをする」という形式にしたことで、生徒たちにはよい意味での緊張感



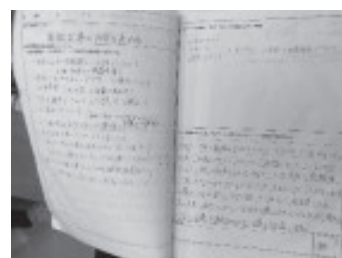
を持たすことができました。すべての生徒たちにとって、初対面の方にインタビューをするという体験は初めてのことで、しかも「社長」という肩書を持った大人に話を聞くということもあり大変緊張していました。また、インタビューを行うにあたってアドバイスのあった、「下調べをしすぎない」ということを素直に言葉通りに受け取り、ほぼ相手のことについて何も知らない状態でインタビューに臨んだ生徒がほとんどで、第1回目は完全に受け身になってしまい、会話も続かない状態になってしまいました。インタビュー終了後に協力者の方々からご意見をうかがった際にも、あまりにも準備不足なのでインタビューする会社についても調べておくべき、おとなしい、もっと積極的に、質問事項をもう少し多めに考えておくべき、などと辛口のご意見をいただきました。一方で、高校生の現状や悩みなど、どんなことを考えているのか話をできることは大変うれしい、高校生らしく恐れることなく何でも聞いてもらえれば、というアドバイスもいただきました。そこでいただいたご意見や派遣記者からのアドバイスを確認して、相手の仕事や会社について調べること、難しい言葉や分からない言葉は恥ずかしが

らずにきちんと質問することなどを伝え、インタビューの流れについても、まずは名刺をいただき、自分自身について知ってもらうために部活など自己紹介をする、調べた情報に基づいて会社についての質問を行ってから一番聞きたい質問に入っていくことなど、50分間の流れを確認しました。また、講座名に掲げた「私たちの町・神戸」の記事が書けるように神戸の魅力につ



なげるために必要な質問や、最終的にどのような新聞になるのかといったビジョンを持つように伝えました。さすがに高校生は飲み込みも早く、回を重ねるごとにインタビュー活動が活発になっていきました。協力者の方には2回ずつ来校いただきましたので、2回目にお越しになった時には生徒の成長に驚かれた方も多数ありました。

普段の授業では黒板に書かれたことを書き写す作業が多く、話ながら、聞きながらメモをしていくことが大変難しかったという生徒の感想もきかれました。また座学の授業の様子ではわからない生徒たちの表情や取り組みなども見ることができました。こだわりをもって質問する生徒や、インタビューグループの中でリーダーシップを発揮する生徒も出てきて、「限られた時間の中で何を聞きたいか事前に用意して話しつつ、会話の中から生まれた話題を掘り下げていくことを意識した（男子生徒の感想より）」様子も見られました。



最後にいよいよ新聞制作です。生徒ひとりあたり6人の方にインタビューをしましたので、どなたをどのような記事にしていくのかを班ごとに検討し、A4用紙に下書きをしていきます。この取り組みについて書かれた派遣記者による新聞記事や、届けてもらった新聞、最初におこなった他己紹介の添削などを参考にして、個々にインターネットを利用して調べた内容や、班員が得た情報、インタビューの際にいただいた資料、インタビューの様子の写真などを材料に内容やレイアウトにもこだわりながらまとめていきます。

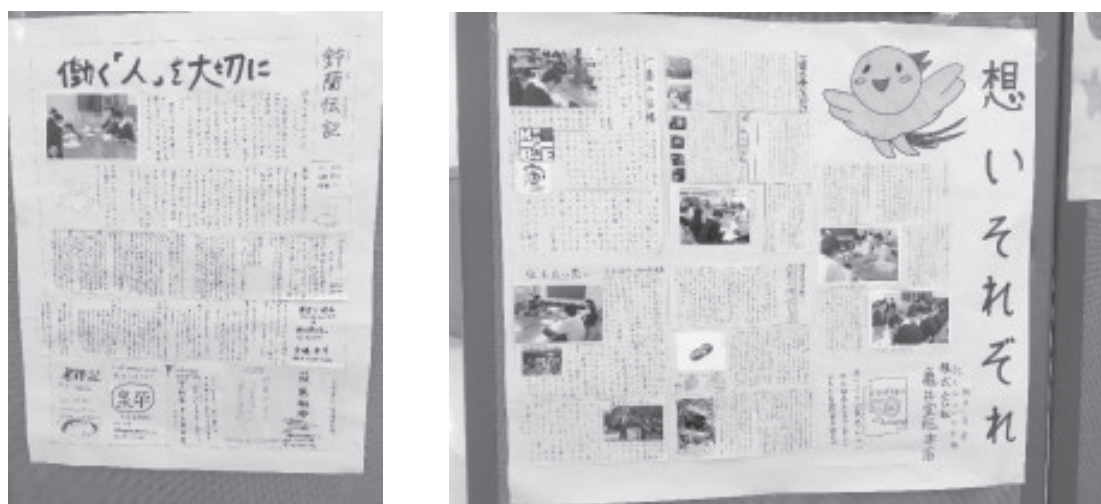
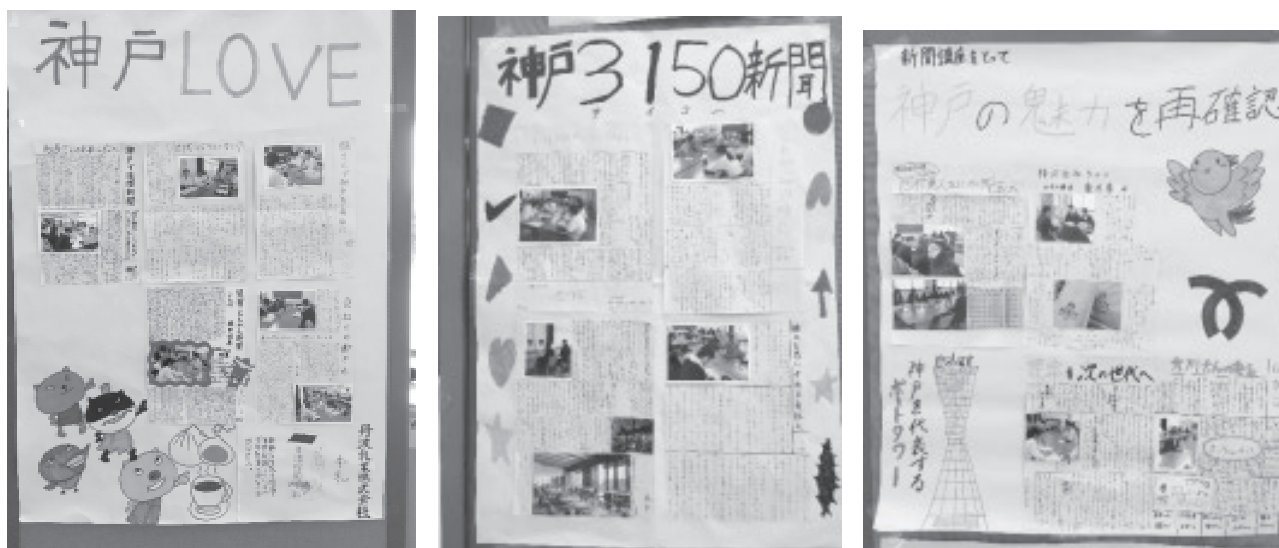


最終的には班員の作成した新聞を模造紙に張り付けて1枚の大きな壁新聞が出来上がりました。文章だけではなく、広告を入れてみたり、イラストや天気予報を書いてみたりと、班ごとに趣向を凝らしたものとなりました。

4 成果と課題

2月には兵庫県NIE推進協議会実践発表会での講座選択代表生徒による報告と校内での成果報告、3月からは完成した新聞を最寄り駅である神鉄鈴蘭台駅のすずらん広場に展示をして地域の方にもご覧いただくとともに、協力者の方にもご送付し、大変喜んでいただきました。

以下、班ごとの完成した壁新聞になります。



この講座を始めるにあたり、どの程度生徒たちが興味をもって前向きに取り組めるのか心配もありました。実際生徒の感想には「講座開始時は乗り気ではなかった」という言葉もちらほらとありました。ただ、「インタビューを始めると、50分では足りない、もっともっと話を聞きたいと思うようになった」と続いていました。これはひとえにご協力いただいた皆様の仕事に対する真摯な姿勢や、地元を大切に思う気持ちが生徒たちを動かしたからだと思います。また生徒たちも、インタビューに必要なコミュニケーション力や文章にまとめる力が今後の進路や社会に出ても求められる力であることに気づき、日々の活動や学習にも取り入れようとしてくれたことも大きな成果だと思います。ほかにも「制作者の意図をくみ取ることにより、一層情報の価値を感じて受け取り、情報を選択する大切さを学んだ」「この授業で学んだ多くのことを今後活かしたい。受講してよかった」といったうれしい感想もたくさんありました。

2019年度はインタビューに重点をおいたことで生徒が準備する時間と振り返る時間が少なかったことが反省点であり、その点を踏まえ2020年度は時間配分を再検討して1年間の取り組みを行いたいと思います。

MEMO

A series of horizontal dotted lines for writing, spanning the width of the page.

【 特別支援学校 】

神戸聴覚N I E 希望の風にのって

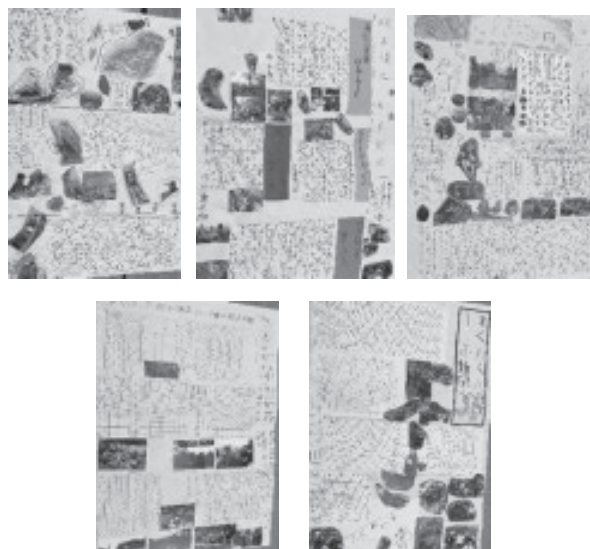
～主体的対話的で深い学びを実現するために～

自分の思いを文章で伝える

兵庫県立神戸聴覚特別支援学校 校長 森村 美佐
教諭 津守 温子

1、はじめに

兵庫県下の特別支援学校において、初のN I E実践指定校となった本校は、本年度2年目を迎えた。1年目の「ことばの獲得」、「世の中を知る力」、「判断する力」を養うことに加え、2年目は「自分の思いを文章で伝える」ことに重点を置き活動に取り組んだ。



2、実践内容

小学部

小学部に在籍する児童30名を対象に主体的に学ぶ姿勢を育み、言語活動の充実をはかるために新聞を取り入れながら、子どもたちの語彙の獲得、文章表現力の向上にも努めた。N I Eを取り入れた話し合い活動や新聞作りについてもグループや各学年で随時取り組んだ。

(1) 縦割り班活動での取り組み

春の遠足、秋の遠足の事後学習の一環として、新聞作りに取り組んだ。1年～6年までの児童を縦割りにし、班を構成している。記事担当、写真選び、レイアウトについて児童同士で話し合い、相談し、協力しながら班オリジナルの新聞作りを行った。

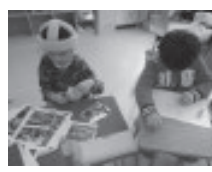
(2) 各学年での取り組み

2年目を迎え新聞作りを通じた活動が増えた。小学部棟の階段や廊下などに、児童たちが作成した新聞がたくさん掲示されるようになった。

① 1・2年生

・校外学習のまとめ

校外学習の写真を模造紙に貼りながら、須磨水族園で見たものや感じたこと、楽しかった写真に生きものの名前や短い感想文などを書き添えた。作成したものを友達や保護者、教師などに「見てください。」とアピールする様子が見られた。



② 3年生

- ・学級新聞

「伝えよう神戸聴覚特別支援学校」

- ・個人新聞

「ブラックホール新聞」「深海生物新聞」

新聞作りを行う中で、友達同士で協力して作成する様子が見られた。インタビューの際は、役割を分担することでスムーズに進められ、これは他教科の学習でも生かすことができた。新聞に興味を持つようになり、興味のある記事を見つけて学校に持ってくるようになった。



③ 4年生

- ・学級新聞

「クラス紹介」「野外活動」「体育大会」

「校外学習」

- ・個人新聞

「夏休み」「冬休み」「星座まとめ」

新聞作りに対して積極的ではなかった子どもたちが、新聞作りに取り組むうちに楽しさを感じ、少しずつ意欲的になってきた。



④ いるか1組 (4・5年生)

- ・学級新聞

「野外活動の思い出新聞」

「夏の校外学習新聞」「秋の校外学習新聞」

4月当初、文章を作成することに苦手意識を持っている児童に対して、自分の思いを教師が確認して文章に起こす必要があった。新聞作りの回数を重ねることで、児童自身が伝えたい思いや経験したことを少しずつ表現できるようになった。



⑤ いるか2組 (4・5年生)

- ・学級新聞「野外活動」「校外学習」

新聞に貼りたい写真を選んだり、体験したことや感じたことを文章に表現するよう考えることができた。友達と協力して1つの新聞を作り上げる喜びや、他のクラスの友達や教師、保護者に見てもらおう喜びを味わっている様子も見られた。



⑥ 6年生

- ・学級新聞「専科の先生紹介」

「誕生日おめでとう」「体育大会」

- ・個人新聞「野外活動」「校外学習 (奈良)」

「修学旅行」「夏休み」「冬休み」

個人新聞では、まず小見出しを決めてから下書きをした。その際に同じ言葉を繰り返さないように留意することで、使用語彙が広がった。原稿用紙ではなく新聞様式にすることで、書くことに対する抵抗が減り楽しく取り組めた。読む相手がいるということ意識して丁寧に仕上げようとする姿勢も育まれた。



中 学 部

中学部に在籍する生徒 15 名を対象に新聞を活用した様々な学習活動に取り組んだ。特に今年はオリンピックの前年ということもあり総合的な学習の時間に「スポーツから学ぼう～ベストを尽くして未来を変える～」というテーマを設定した。まず様々なスポーツについて生徒たちが調べたことを新聞にまとめた。また新聞を使って道具を作成するなどオリジナリティあふれるスポーツを自分たちで考え実際に体験した。



(1) 「新聞紙を使ったスポーツ」

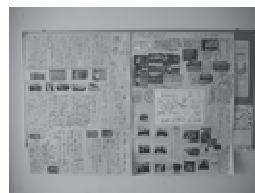
(紙フト・ゴルフ) 体験

「新聞紙を使ったスポーツ」として新聞紙で紙飛行機を折り「紙フト」を体験した。新聞を工夫して加工する「新聞ゴルフ」も実施した。「紙フト」の大会を開催し生徒と保護者と教師とが一緒になって体験した。新聞を使った道具を自分たちで作って、ルール説明も行った。体験した保護者からも楽しかったとたくさん感想が寄せられた。活動後は、準備から体験までの一連の学習についての感想をまとめ、新聞形式で発表した。



(2) 行事ごとのオリジナル新聞作り

各行事、1年生～3年生の学年の枠を超えた縦割り班で作成に臨んだ。最初は話し合いがなかなか進まず、新聞のレイアウトやタイトルを決めるだけでも数時間要している班があった。しかし、回を重ねるにつれ、次第に新聞の作り方に慣れ、作業速度も速まった。記事も教師の補助なしに的確な内容のものが書けるようになってきた。終盤になると、「他者が読む」ということを意識する必要があることに生徒たちは気づき始めた。個性的なレイアウトにしたり、見出しに色を付け、インパクトのあるフォントにしたりするなど注目度を上げるための工夫を凝らした新聞を、自主的に作りはじめる生徒もいた。文章を書くのが苦手な生徒や障害が重い生徒も、イラスト・カット描きやレイアウト枠線づくりなど、それぞれの能力や特性に合わせた仕事を受け持ち、新聞作りに貢献することができた。班ごとに協力しながら生徒たちの個性が溢れる新聞が完成し、大きな成長の様子を見ることができた。



(3) ディベート

(新聞の記事を読んで考えをまとめる。)

3年生を対象に社会科の公民で「世論とマスメディア」をテーマに研究授業を行った。授業の中で新聞の是非についてディベートを行い、マスメディアによる世論調査と行政への影響について学習した。



高等部

高等部に在籍する生徒 26 名を対象に新聞を用いた教育活動や学校行事の際に、自分の体験や感想、また調べた内容などを個人やグループでまとめ、新聞作成に取り組んだ。

(1) 校外学習新聞

新入生歓迎会を兼ね、毎年春に行われる校外学習は、1年生から3年生までの縦割り班で活動を行う。この活動の振り返りとまとめ、会計報告を新聞という形式で行った。

学年混合縦割り班で新聞作りをすることで生徒同士の交流が深まり、互いに協力し合うことができた。作成時には、読み手にわかりやすく伝える方法も各班で工夫することができた。完成後は、他の班の新聞を読み、多様な表現方法があることを知り、文章の書き方を深めることができた。題字に凝る班、ユニークな見出しを付ける班、規則正しいレイアウトの班など、各班個性豊かな新聞を完成することができた。



(2) まわし読み新聞

高1の現代社会と自立活動の時間に「気になるニュースを紹介しよう」をテーマに、生徒それぞれが自分の気になる記事を選択し切り抜き、模造紙に貼り付けコメントを記入していった。生徒1人1人全く異なる分野の記事を選択したため、互いに記事を読みながら「こんな事柄があるのだ。」と広い視野を持って現代社会の現状を知るきっかけとなった。コメントも非常に面白く、物事に対する考え方、捉え方の違いを知りそれぞれ深めることができた。



(3) 学年ごとの取り組み

1年生は自分が将来希望する仕事について、職務の内容や必要な資格について調べ学習を行った。生徒は自分の夢や、好きなことを仕事として実現するために必要なこと、今、自分が何をすべきかについて考え新聞にまとめることができた。



2年生は「修学旅行」の新聞を作成した。事前学習として知覧特攻平和会館における特攻の背景や実情、熊本城の復興の様子などを調べ新聞にまとめた。事後学習では実際に体験して学んだ内容を資料や撮影した写真などを使用し新聞にまとめた。制作活動を行う中でお互いの意見を尊重し協力しながら自身の役割を責任をもって活動することができた。また、各学期「まとめ新聞」を作成した。学期の振り返りを生徒自身の得意な技法を用いて自由な発想で表現することができた。



3年生は「自分史」という新聞作りで横断的な自己肯定観を高める学習を行うことができた。どの生徒も過去を客観的に振り返り、障害認識も含め「過去の自分」「今の自分」「これからの自分」について考えることができた。また、自己分析したことを文章でまとめる際、読み手を意識してオリジナリティ豊かな新聞を制作し発表できた。



3、実践のまとめ

2年間のNIEのさまざまな取り組みは、本校の児童生徒にとってまさに「社会への扉」の1つとなった。児童生徒が主体的対話的で深い学びをさらに発展できるよう今後も新聞を活用した教育活動を行っていきたい。



Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2019（令和元）年度
『兵庫県N I E実践報告書』

－2020（令和2）年5月発行－

兵庫県N I E推進協議会 編

〒650－8571

神戸市中央区東川崎町1－5－7

神戸新聞社読者本部内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/>

「教育に新聞を」実践 中学校編

- ◇N I Eを通しての学び合いから世界を考える。
(終戦から74年、阪神・淡路大震災25年) (西宮市立平木中学校)
- ◇新聞で学びを深めよう
(猪名川町立中谷中学校)
- ◇新聞を活用した「調べる力」の育成
(姫路市立豊富中学校)

「教育に新聞を」実践 小学校編

- ◇社会に目を向け 自分を拓く 新聞の活用
(神戸市立向洋小学校)
- ◇社会に対して自分の考えをもち、参画していこうとする児童の育成を目指した授業づくり—新聞記事のスクラップ・読み比べ、投書欄への投稿を通して—
(加古川市立川西小学校)
- ◇伝え合う喜びを実感しながら発信しよう！
～仲間・地域・世界とつながる児童の育成をめざして～ (養父市立建屋小学校)
- ◇新聞に親しみ、文章を読み取る力の育成
～初見ノートを使った音読を通して～ (神戸市立六甲アイランド小学校)
- ◇新聞を「つかう」「つくる」活動を通して
(姫路市立豊富小学校)
- ◇新聞に親しもう～新聞を活用し、表現できる子の育成～
(洲本市立鳥飼小学校)
- ◇主体的で対話的な学びを新聞でも
(淡路市立志筑小学校)

「教育に新聞を」実践 特別支援学校編

- ◇神戸聴覚N I E 希望の風にのって～主体的対話的で深い学びを実現するために
～自分の思いを文章で伝える (兵庫県立神戸聴覚特別支援学校)